

如何にもして、此の結核菌の侵害を、其の部分に、喰留めようとして、凡ての機能が、働き出します。さうして、結締織が増殖して、結核菌を取囲み、其處に、幽閉せうと、努力する。結締織の増殖と、結核菌の増殖と、相反する二つの勢力が戦つて、結締織が勝てば、病氣は治癒に赴き、結核菌が勝てば、病氣は重くなるのである。……何れにしても、結核菌團を、結締織で取圍んで仕舞つて、初めて、治癒があるので、此の以外に、治癒の道はないのである。結核病の治癒するのは、かうして固まるのである。治療法は、固める以外には、無い道理であります。之れを固めるのは、結締織の増殖は、自然の療能によりて、行はれるのであるからして、吾々は、此の自然の療能をして、十分に働かせ得るやうに、仕向けなければならぬ。然るに此の自然の療能を、遺憾なく働かせるには、藥品其他の治療材料では駄目で、必らず、身體の一般的營養状態を旺にし、生活状態を良くし、以て結締織増殖に要する、活力を強くする外はないのである。それには、確固不拔の精神を持つこと、規律ある生活をする事、身體を清潔にすること、新鮮な空気を呼吸すること、明るい光線の射す所に居ること、十分の休養をすること、滋養分の多い、食物を攝ることが必要である。これ即ち自然療法である。」と。而して、

十分なる休養が自然治癒の力を導き出す原動力です。しかく煩悶のある處に休養はなく、覺醒なき處にも休養はありません。休息のみの休息は實際上は不可能です。

野村盛行氏は曰く「快潤なれ。呑氣なれ。咯血したとて、心配するには及ばぬ。夫れも亦、自然療能の、作用の一つだ。胃腸に受け入れられぬ物を、下痢するのと同じく、内部の毒物を體外に、排泄するのが咯痰である。咳嗽は其の働を助けるのである。決して心配していけない。病氣を苦にすると、新陳代謝が停滞する。神経を苛立たせるから、神経衰弱となり、全身の機能が鈍くなる。病魔は益々鋭鋒を差し向ける。心配は、自分で自分を傷ける外何の甲斐もない。」と。精神の平靜が、眞の休養の大切な條件です。

笈田長陵氏曰く「一、病人とて、自分で、卑下すること勿れ。人は残らず重病人なり。一、あの釋尊が雪山の、命懸けなる難行も、あの基督が、十字架の、世にも恐ろしき苦も、偏に我等が爲なりと、思へばいとど涙なり。一、時、永劫に比べては、千年もけに東の間ぞ、況して百年五十年をや、短命と云ひ、長命と云ふ、蜉蝣の朝と夕を争ふ如く、唯一二時間先と後の如し。思へば百年の後、吾もなし。彼もなし。あはれ一百年後の月、皎々たる影は、何人を照す

ぞや。共に生れて、共に逝く。生死同行の友なれば、世の人々のなつかしや。一、もろき身を持つ、皆人いとほし。生死の海の、群生可愛ゆし。一、御互に自分で生れようと思つて、生れた譯でなし。自分の作つた體でなし。自分で附けた目でも、耳でもなし。何事もみな天の力。神の御業なり。貴とからずや。一、一日生きて居るも天恩なり。貴からずや。一分一秒の生存も、決して自分の力でなし。感謝すべし。一、何事も神の御旨なり。總てを神に任せ奉れ。」と。これ總てを天に任せて安心する心であつて、靜養の根本をなすものです。

肥田春充氏は曰く、「休養姿勢を執れば、體はユツタリとして、非常に樂になる。すると精神も、自ら安らかに、自ら統一状態となり、暗示に對する、感應性が強くなる。自然體にあつては、只安らかに、休むで居れば、よいのである。何にも考へてはいけない。考へまいとも、考ふる勿れ。雑念なからしめんと、努める雑念のために、腦は却つて苦役される。沈黙と安靜とは神の常態である。體を動かすと、呼吸で得た酸素と、組織中の酸素とを、燃焼する。其の補充は、休息中に、血液に依つて行はれ、又、組織中の疲勞素も、『休息中』呼氣と血行によつて、體外に、排泄され、神經及び筋肉に、新活力が生ずるのである。それがため、ために、體

に「休息」を與へるのには放漫の姿勢を執らねばならぬ。そして子供らしい、無邪氣な態度であらねばならぬ。病者は凡て、安靜療法を執らねばならない。脊椎カリエスは、コルセットによつて、結核性膝關節炎は、ギブス、繃帶、或は副木によつて、副腎丸炎は、吊上げることによつて、凡て、其の部の固定と安靜とを圖り、以て組織の防禦機能を助け、癰疽形成を助長せしめる。外傷、骨折、膿腫等の場合も、之れと同じく、消毒と、安靜とによつて、自然治癒を促すのが、熟練した醫家の執るべき、最良手段である。運動は、漸く治癒能力の現はれた局部を、伸展牽引して、新生結締織を崩潰せしめ、血液循環を亢進せしめて、炎症を大にする。故に凡て病氣になつたら、氣樂に、靜かに、寢て居るのが一番である。病人が靜かに、寢て居るのは、消耗を少くする爲である。其のかはり、筋肉は發達しない。血行は旺にならない。食慾も強くない。即ち他働的に、適度の刺戟を與へねばならぬ。自然體は陰である。充實の心身は陽である。……電氣の陰陽相合して、ここに中和し、天地平靜に歸するが如く、自然體と、氣合とが、機械的、心理的施術によつて、相接觸するとき、其處に強大な、治療能力は動いて來るのである。自然體休養法、及び、自然的安靜呼吸のみを執るべき場合を擧げて置く。出

血、咯血、脱腸、胃潰瘍、強い腦貧血の發作、水腫ある時、癲癇其他神經症の強い時、熱ある時、痛ある時、自然體を以て休養せよ。微笑せよ。自然體を以て進退せよ。凝る勿れ。固くなる勿れ。肩を軟かにせよ。悠然たるべし。怡然たるべし。」と。休養の必要を説いて充分であります。又田邊一雄氏は、結核治癒における安靜の必要をのべて曰く、「何故かく安靜が必要であるか。其第一の理由は、病竈面の安靜である。外科、内科、何れの疾患に拘はらず其部を安靜にして、人間が有する自然治癒の良能を發揮させ様とする。肺結核も其病竈は一種の糜爛症であるから、安靜と榮養に依り、漸次體力を増進し、病竈の外部から漸次結締織を以て圍み蓋はうとするのである。若し肺結核者が安靜を怠つたならば、病竈を大きくするは勿論、折角出来上つた結締織さへも破壊する虞れがある。かくして安靜を破つた爲めに、咯血、血痰、發熱の如きを繰り返す人の多きは遺憾の極みである。第二の理由としては、榮養についてである。結核病は又消耗病とも云はれる位で、安靜にして居てさへ多くの榮養分を以て、此消耗を補つて行かなくてはならないのである。然るに病者が安靜を缺いて運動をしたとすれば、其の一舉一投足が一々疲勞となり、體力の消耗となるのであるから、病氣治癒の大目的を達しない許り

か、却つて病氣を増悪せしめるのである。……吾々病者が、安靜を忠實に行つたが爲め、得る所の効果は非常に多いのである。……第一は解熱である。醫師は一般に熱の高低するを見て、安靜如何のバロメーターとする程であつて、十分間の運動がよく一度の熱を高め、一週間の安靜がよく一度の熱を低める場合がある。第二には咳嗽、呼吸困難、胸痛等の諸症を緩和するに、安靜を措いて方法はない。第三に、咯血、血痰の際は絶對安靜が唯一の療法であつて、どんなに止血注射をしようと、氷冷法を行はうとも、安靜を缺いて居たならば止血するものでない。第四に、運動は病者に疲勞を與へ、殊に内臓を倦怠せしめて、却つて食慾を減じさせる。一寸考へると、病者が安靜にして居る事は却つて食慾を減じさせる様に考へられるが、體力の弱つて居る病者としては、安靜にして居て、疲勞を恢復し、體力を充實せしめて、食膳に向ふ事が最良策なのである。第五に、最も重要なものは、精神の安靜である。靜かに青い空を眺めつつ、仰臥する病者の心は、實に慰樂に満ちてゐる。平安そのものである。安靜の姿勢としては、原則としては仰臥がよい。」と。

更にスマイルはその「勞働論」に於て曰く「休養は創造なり。……體力又は腦力が勞働に

由りて消耗せる時、休養は第二の創造なり。睡眠其のものは一種の休養にして熟睡安眠するほど健康は回復す。」と。ある日一人の獵師が使徒ジョンの門前を過ぎました。ジョンは日當りのよい門前で、掌上に一羽の小鳥を乗せて、之を撫でつつ、小兒のやうに楽しんでました。一世の高僧が無益の時を費すのを怪んで、獵師はその故を問うひました。ジョンは曰く、「君は何故君の弓を常に満月の如く張りつめて、おかないのです。」と。獵師曰く「弓の力が衰へるからです。」と。ジョン曰く「さうでせう。私の精神も弓と同じです。之に鬱散休養を與へないと、弓のやうにその力が衰へるのです。」と。

原榮博士も曰く「心身の安静は、結核患者をして、無熱ならしむる。最良の合理的療法なり。」と。私は食養については、減食主義をとります。腎臓肝臓の弱い人は断食は不可です。しかし胃腸病のみならば断食も可。ブルターク曰く「薬を用ゐる代りに、一日断食せよ。」と。チツテンデン氏は曰く「腸胃を傷つたら、只減食せよ。」と。次に睡眠には枕を外し、仰臥して、両手を四十五度に體側にひらき、兩足は一尺離して爪先は外に倒します。病中の静養姿勢も徐にこれに近づけます。

觸手をしてゐると、病者の疾病の反應があらはれてゐる處に手が當つて、術者の手は非常な痛みを感じてきます。この現象を一般には非常に神祕的に解釋してゐます。しかしこれは、疾病の反應部にある熱、冷、凝、虚衰、過敏その他の反應を術者が觸覺し、術者の精神が統一してゐるだけ、その觸覺が觀念と聯合して、術者の手掌感覺の異常興奮をおこし、遂に痛みを感じるのであつて結局一種の自己暗示に過ぎないのです。痛みの度は、觀念力の強さ、精神統一度によつて違ひますが、時には術者の方に病的興奮が起る事があります。術者と被術者が離れてゐる時にも術者には自己暗示によつて興奮が起り、被術者には、術者の態度、興奮から來る暗示と、術者を信ずるために起る自己暗示によつて興奮が起きます。

肥田春充氏はその「病弱者の力」に於て曰く、「日露戦争に於て、赫々の勇名を馳せられた海軍の某將軍を御訪ねして、一夕日本海々戰の御話を聞いたことがある。其の折、將軍は、近頃右の腕が、リウマチスに悩まされて居つたが、或る治療法の有效なことを聞き、早速遠隔治療を依頼した處が、何日何時何十分に、術を施すと、通知されてきた。其の時刻になると不思議なる哉、フツツリと痛みが無くなつて、忽ち腕の輕きを覺えた。其の靈妙な奇術には、只管驚

嘆の外ないのである。百圓の會費、五十圓の治療費も誠に廉いものであつた。ハ、ハ、ハ、と大笑された。將軍は敵の艦隊を撃沈し、捕獲する時には、鬼神の働をせらるるのであるが、健康問題、治病法に於ては矢張り門外の稚兒である。治者に對する信仰心と（癒ると思つたからこそ依頼したのである）、百五十圓の金によつて（それだけの値があると信じたからこそ出金したのである）、自分自身の衷にある自療力を呼び起したのに、御氣が附かれないのだ。」と。遠隔治療の如きも全く自己暗示で癒るのです。

又手の掌から、何らか特別な化學的物質が出たり、或は光線、音響等が發する事は現代の科學では、到底理解し得ない迷信であります。總てこのやうな考へ方は精神作用を物質化するものであつて總て迷信です。吾々はかかる迷信に陥つてはなりません。

富士川游博士は、その「迷信の研究」に於て、同系統の迷信である神靈寫眞を批評して曰く、「神靈寫眞が可能であるといふことは、神靈が化學的光線を放射するところの形成物であるとするを前提とするもので、すなはち精神の物質化をなすものであるが、此の如きことは、今日の我々の科學的知識の上にては到底これを信することが出來ぬものである。」と。

永井潛博士はその著「醫學と哲學」に於て曰く、「動物茲氣説及び催眠術は、一時其の勢力を逞うせしと雖も、生理學、心理學の進歩によりて、畢竟、一種の暗示に基づくこと明かとなりし以來、是が神祕の反面は全く其の色彩を失ふに至れり。夫のライヘンバツハによりて唱へられたる、「ヲド」と名づけられたる一種の氣が、指頭より立ち昇るとの説、及び今日猶ほ世俗の間に信仰を保ちつつある、靈魂教義の如きは、何れも皆「メスメリズム」の餘燼に過ぎずとす。」と。

手掌を患者に觸れる時は、云ふ迄もなく觸覺の興奮を起します。そして一定時間手掌を被術者の身體にあてて、姿勢態度を正し、呼吸を深く靜かにして、自己の精神を統一する時は、自己暗示によつて術者の手掌は微動が起きてきます。その微動の感觸が、細かければ細かい程、被術者の觸覺は心快く興奮を起してきます。術者の感觸が強ければ總て大いなる感動の場合に起る如き、血管神經の興奮をともし、微動は激しくなつてきます。その場合感觸が靜かで深く、精神統一の度が正しければ正しい程、微動は規則的に微細に起ります。精神統一が出來てなければ微動の工合は粗く、且つ不規則です。丁度、惡事をなす際に手足がふるへる場合に

は、その振動は粗く且つ不規則であります。(例 〓物を盗む時の手のふるへ。 〓恐怖を感じる時の身のふるへ。)處が公明正大なる事をなす時のふるへ方は、規則正しく、且つ愉快です。(例 〓喜極つて萬歳をする時の手のふるひ。 〓勇士戦はんとする時の武者ぶるひ。 〓母親が愛子を撫する時の手のふるへ。 〓親友相會して握る手のふるへ。容されたる戀人の抱き合ふ身のふるへ。 〓心からの同情から差のべる手のふるへ。 〓義を叫んで卓を叩く拳のふるへ。)そこにはみちたる氣合と、こもりたる愛の振動があります。吾々の感覺はその好き振動と悪き振動を辨別することが出来ます。よき振動が體につたはる時には、吾々はそれに共鳴して振ふのです。總て吾々は感極る時身をふるはし、精神統一する時には、特に手掌に振動がおこります。合掌は、自ら自らの法悦ほふやくによる喜の振動を體感する形です。法悦なく、精神統一なき合掌はそこに何らの正しき微動を起さないのです。

被術者と離れて手をかざして行ふ場合には、只感應作用による自己暗示によつて色々な感じが起るだけです。眞の觸手療法は正しい手を觸れなければなりません。

握手すると相手の感情が分るのは、そこに感激のふるへを感じるや否やによつて判断が出来

るのです。吾々は本能的に正しい振動を知つてゐるのであります。

故に觸手療法を行ふ者は先づ自ら正しい姿勢、態度、呼吸、氣魄を持つた上に、正しい感動が中心から發出しなければ、正しい微動を手掌にあらはし、進んで患者にその正しい感激の律動を傳へる事が出来ないのであります。正しい律動があたへられなければ、觸手を通じての患者への暗示は失敗に終ります。

願くば觸手を行ふに當つて、手掌から變なものが出て、それで患者の病が癒ると云ふ如き迷信を棄てよ。只々自己の精神を統一し、自己の心身の力を中心に統一する時には、正しい感動と律動が起り、それが最も他に働きかけ易い手掌に著しく現れて、患者の觸覺を通じて、患者にも亦同じく正しい律動を通じて正しい感動をあたへるものであることを了解せよ。

練習のため合掌することは宜しい。正しい合掌は最も平衡を得た姿勢でしなければなりません。正しい合掌姿勢は、兩手を合掌し、肘を肩の高さに上げ、兩中指頭は、眉間の高さに上り、後頭と、肩背と、臀部をつなぐ線は地平に垂直でなければなりません。兩足は重ね合せず、拇指を相接して坐るべきです。眼はかるく閉ぢよ。かくして呼吸をととのへて、無念無想の心狀

に入る時、中心から正しい感動と律動が心快く起つてくるのであります。そしてその律頭は指頭に微動してあらはれてきます。その手掌をこそ患者に當てて下さい。

合掌は感謝反省の心をもつてして下さい。

氣合とは總てに機先を制して、相手の我意を挫くことを云ひます。

蒲生氏郷曰く「強敵には槍薙刀等も及ばぬものなり。其時には短劍を抜き、短兵急に拳にて刺突する心得にて奮戦すべし。」と。これ氣をもつて敵を制する方法であります。

内田良平氏曰く「擊劍、柔術、相撲等、凡て武術は敵を倒さんとして仕掛る業を引き外づさるるか、又は仕掛けんとする出鼻を乗ぜらるる程もろく負けるものはない。是れ全く我が氣の抜ける虚を打たるるからである。此の氣の抜ける刹那に乗ぜらるれば如何なる強者も負くるものである。故に實と見せて虚、虚と見せて實、敵をして豫期に反せしむることが虚實の法である。」と。戦の法は又治療の道にも應用されます。

莊子に曰く「感じて而して後に應じ、迫つて而して後に動く。」と。

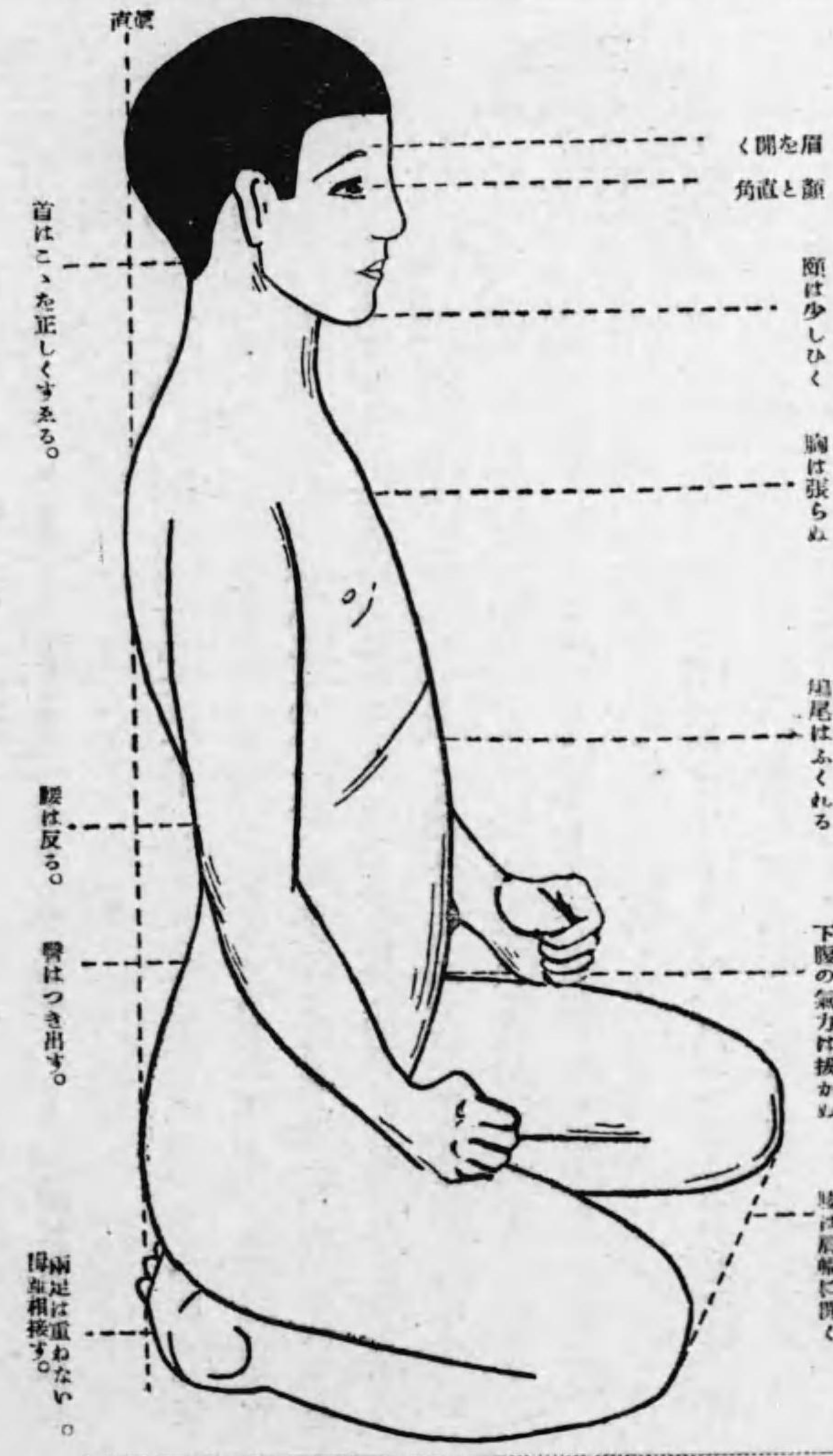
病人の心は我意で一杯であり。我儘で充滿してゐます。これに負け、これに制せられては治

療は出来ません。氣合をもつて病人の我意、我執、迷妄を壓伏制伏してしまはなければ、決して治療は成功しないのであります。

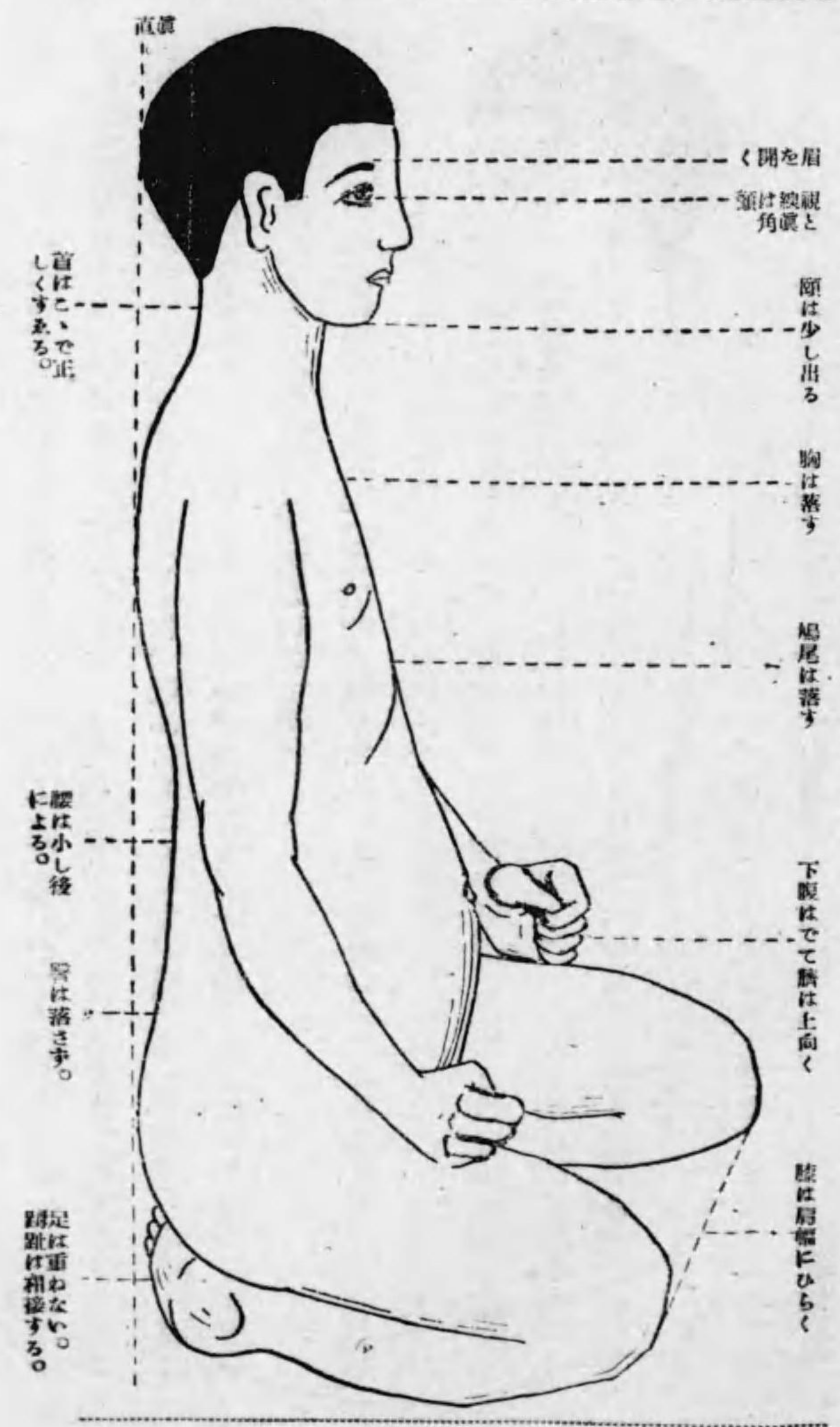
病者のこの我意、我執、我慢を制御するためには、吾に氣力が充ちあふれ、且又、吾が呼吸が病人のそれにくらべて深く長くなければなりません。短い息では機先を制することが出来ないのでです。總て人は呼吸に於て氣合がみちるのですから、病者が息を吸ふ時に、吾が吐いておいてをれば、病者は我が氣合に統御されるのであります。長く深く力強く吐けば吐く程、相手の氣持は、容易統御出来ず。悠々と深く長く呼吸してゐてこそ、相手は、我に服するのです。こちらがいらくして促迫した呼吸をしてゐると、こちらの氣魄は決して向ふに通じないのでです。息吹をして患者に氣合を與へる方法がありますが、深く長い息は、別に患者に吹き懸けなくつても、自然に患者にその氣合を感じさせるものであります。

息を深く長く靜かにする秘訣は、鳩尾と臍の間をふくらませて、息を吸ひこみ、息を吐く時には鳩尾を落し、下腹に氣力を充實する事です。吾々の肺は、肺底になる程、容積が大きく、肺尖になる程容積が少ない。従つて、容積の多い肺底に息を吸ひこめば、息はより多量に入り

平田式呼吸法 (呼時)



平田式呼吸法 (吸時)



ます。肺底をふくらせるには丁度鳩尾をふくらせることになり。而してそのためには第十二胸椎の邊りをうんと前に出さねばなりません。吐く時は鳩尾は落ち、第十二胸椎は稍後方に移ります。しかし此處に注意すべきことは、吸ふにも吐くにも、後頭部と肩背部と臀部と踵は常に一直線にならなければならぬと云ふ事で、この四者が一直線にならないといくら鳩尾を出しても、落しても完全な呼吸は出来ないのです。

息の呼吸の速度は終りになる程加速度的に強くなるのが、氣合の要訣であります。特に吐く息は綿々として長くなければなりません。

道家は吐息を六種類に分けて曰く「吹、嘘、呵、嘻、咽、呼」と。吹とは唇を縮めて、急に、氣を吹き出すもの、嘘とは丹田から暖かに吐き出すもの、呵とはカラ／＼笑ふ時に出るもの、嘻とはクス／＼と笑ふ時出る息、咽とは平常の息。呼とは疲れた時洩れる息を云ひます。

莊子曰く「吹狗呼吸、故を吐き、新を納る」と。

抱朴子曰く「人は氣中にあり。氣は人中にあり。天地萬物、氣を須て生ぜざることなし。鼻中に氣を引き、入ること多く、出すこと少く、閉ぢて之を數へ、九九より八八、七七、六六、

五五にして止む。乃ち微に之を吐き、耳をして聞かしむる勿れ。之を習うて既に熟し、増して十數に至る。是を胎息と爲す」と。

白雲和尚曰く、「我れ常に心をして、腔子の中に充しむ。結を匡し、衆を領し、賓を接し、機に應じ、小參普說、七縱、八横の間をおきて、是を用ひて、盡くる事なし。老來殊に、利益多き事を覺ふ」と。

小止觀に曰く「若し能く、觀想を善用すれば、十二種の息を運作し、能く衆病を治す。一には上息、二には下息、三には滿息、四にも焦息、五には增長息、六には滅壞息、七には暖息、八には冷息、九には衝息、十には持息、十一には和息、十二には補足」と。氣合はこの内の增長息にあたります。

胎息法に曰く「調氣久々なれば神愈々凝り、息愈々微かなり、又久しければ、則ち、鼻中全く呼吸なく、ただ微息あつて臍上に往來するのみ。嬰兒の胎中にあると一般なり。故に之を胎息と云ふ。乃ち神氣大に定まる」と。氣合は只に大聲叱呼する時にのみあらはるるものではありません。神氣内に満ちて息自ら長き時、無言の氣合は人を統御して行くのです。

許俊曰く「氣下焦にあるときは、その息遠く、氣上焦にあるときは其の息促まる。」と。肩先で息をしては氣合は發しないのであります。

三藏法師曰く「鼻息とは、鼻中出入の氣なり。息に四種の不同あり。故に須らく、其の龜なるを撰び、其の細なるを守るべし。一に風、謂はく鼻中の氣、出入して聲ある者を風となす。二に喘、謂はく鼻中の氣、聲なしと雖も、而も結滯して、通せざる者を喘と爲す。三には氣、謂はく鼻中の氣、風喘無しと雖も、而も出入、細ならざるものを氣と爲す。四には息、謂はく、鼻中の氣、前三種の廢相なく、而かも出入綿々として、存するが如く、亡するが如きものを息と爲す。」と。眞の氣合は荒々しい呼氣より發せず、綿々として長く深き眞息より發するのであります。

慧能禪師曰く、「汝若し必要を知らんと欲せば、但だ一切善惡すべて思量すること勿れ。自然に清淨の身體に入ることを得ん。」と。氣合の精神は大死一番これのみ。

百丈禪師曰く、「汝等先づ諸縁を歇め、萬事を休息し、善と不善と、世出世間の一切の說法、皆記憶すること勿れ。身心を放捨して、それをして自在ならしめよ。」と。

佛境界經に曰く「非思量の境界中には、文字あることなし。文字無きが故に、辨説する所なし。辨説する所なきが故に、諸々の言論を絶す。諸々の言論を絶するものはこれ佛の境界なり。」と。眞に人を救ひ、人を愛する氣合はかかる精神から發するのであります。

摩訶止觀に曰く「夫れ色心相依つて息す。譬へば樵火相藉りて、煙あるが如し。煙の清濁を瞻て、樵の燥と濕とを知り、息の張軟を察して、身の健と病とを驗す。」と。病者は治療者の息の長短によつて、その氣合の有無を、自然と本能的に感知するのです。殊に、病者は神經が敏感になつてゐますから、常人よりも餘計によく、これを感じます。

日本の禪でも息を大いに重んじてゐます。その所謂「表伊吹」の法は、先づ口から靜かに、徐ろに、和やかに、長く強く息を吹き出し、次に鼻から、靜かに、徐かに、和かに、長く強く吸ひ入れて、其息を腹中に溜め、腹部を次第に膨脹して、漸次力を入れつつ全身に息の氣力を充つる心で氣海丹田を緊張した後、口から靜かに、徐かに、和やかに、強く、長く吹き出します。これを三度くりかへし、怵へられる丈け息を吸ひ入れ、それから、全身に力を入れて、ウ、ウ、ウ、ウとがすかに、深く口中で發聲し乍ら、息を臍下丹田に疊み込み、吐き出さずに濟ま

せるのですが、「裏伊吹」といふのは、人に知れぬやうに、微かに、穩かに、靜かに、深く呼吸するのであります。

吉田章信氏の「運動生理衛生學」に曰く「運動後に行ふ深呼吸は、體内の炭酸瓦斯を速に有力に排氣せしめ、同時に血液の酸素と結合する率を増し血中の酸性不完全燃焼物質を速に酸化して血液の酸度を低くめることが一の原因であらう。また第二には深吸氣時、肺が強く膨脹するので肺における迷走神経纖維が機械的に刺戟せられて、呼吸中樞の興奮を制限することも一の原因となり得る。強い運動のために呼吸が促進すると、肺内の壓は呼吸毎に甚大の動搖を來すことは明かである。この動搖が心臟を刺戟することも、心悸亢進の若干因子を占めてゐる。然るに深呼吸によつて呼吸が鎮靜すれば、この因子は除かれることとなる。次に深吸氣を行ふと胸内の壓が著しく低くなる。これが爲に心筋を養ふ冠狀動脈の血流も甚だよく、心臓榮養も短時間に恢復し爾後の心搏動を整調せしめる。又深呼吸は一時心臓の搏動量を増大するから、従つて大動脈内の血壓が高まる。そして大動脈にある心動抑制神経を刺戟して、心悸を鎮靜することも一の因子と考へられる。」と。呼吸を深く靜かに強くすることは治療の際の術者の疲勞

回復に役立ちます。而して總て事を行ふに氣合をもつてすることが最も疲勞を少くする所以です。獅子兎を打つに全力をもつてす、とは、蓋し小事にも氣合をもつてこれを行ふのが最も樂であるからです。氣合をもつて事を行つて損をすることはありません。

吉田氏は更に運動による呼吸疲勞に就いて曰く、「急速運動の如き呼吸を著しく促進せしむる運動に於ては、その運動を永く続けるときは、終に著しき呼吸困難（呼吸困難）に陥るのである。殊に胸の構造が不良で呼吸力の小なる者にあつては、呼吸疲勞に陥り易い。呼吸が疲勞して來ると、先づ、補助吸筋（胸鎖乳頭筋、三斜角筋、大胸筋、夾板筋、僧帽筋等）が烈しく緊張して鼻翼が著しく縮張して來る。そして呼吸數が一分六十位にもなると、終に呼吸の整調が亂れて、呼吸に費される時間が短縮し、且つ衝くやうで、吸氣が延長して來る。すると肺は常に吸氣状態にあるやうになり、従つて強く充血し、大循環は貧血し、ために顔色蒼白となつて土色を帯び、胸中に苦悶を感じ、横隔膜に苦痛を起し、顔は仰向けとなり、口を開いて如何にも空氣に餓ゑたやうな觀を呈するに至るのである。かかる現象は長距離競争や強い一般胸力運動に於て屢々見らるるのである。此際運動を中止するか、或は著しく輕減すると、呼吸の調律

は徐々に回復して、數分又は十數分位で呼吸が再び安靜、平等になり、心臟の疲勞も恢復して再び顔に紅を呈して來る。併しながら非常に強い意志力の下に、或は嚴命の下に、なほもかかる強い運動を続けると、著しい過酸症のために呼吸の麻痺を起し、呼吸停止し、又は極めて微弱となり意識を失ひ、終に卒倒して昏睡状態に陥るのである。この昏睡状態の持続時間は、固より其人の體力と運動の強さとに關係あることはいふまでもない。」と。吾々は常々一分間一呼吸を平靜時になしうるやうに練習し、且つ呼吸が吸氣より長くなるやうになすべきです。これは、吸時に鳩尾を張り、呼時に鳩尾を落とすときには極めて容易に實行しうることであつて、これによつて正しい氣合を發し、患者にも亦自然と息を長くし、氣合に感じて、呼吸を整へるやうに導かねばなりません。

深く、靜かな長い、強い呼吸で肺が充分に伸縮すると、肺中に分布してゐる自律神経が刺戟されて、反射的に呼吸中樞が強くなります。

精神療法は、患者の強迫觀念を取り去り、神經質を除き、必ず治癒すると云ふ觀念を暗示する事が必要です。

従つて、説得の言語は確言的であり、説得の理路は整然としてをり、説得の態度は親切であつて、又堂々としてゐなければなりません。

氣合療法、觸手療法等の援助の下に精神療法を施すことは最も有効です。

原榮博士は「肺病豫防療養教則」中に曰く、「先づ他力に倚るの觀念を捨てて、自力に頼れ。

自力的精神療法は、難治肺患に對する、最後の有力なる自然療法なり。」と。

滅茶苦茶に強熱の刺戟をやつて末期の肺結核を癒した例が多數に私の處に報告されてゐますが、これは、理窟から云ふとどうしても不可なのですが、強い癒ると云ふ觀念が働くと、疲勞抗毒素が出來て、過度の刺戟も過度とならないのです。嫌々ながら仕事をするとすぐ疲勞を感じるのは何故かと云ふと、嫌々ながらしようが、喜んでしようが、一定の仕事をした以上は一定の疲勞毒素を生ずることは同様なのですが、喜んでした時は疲勞毒素に對して疲勞抗毒素が出來るために、疲勞に侵されません。ところが嫌々ながらすると疲勞毒素だけが生じて、抗毒素が出來ないからすぐ疲勞を感じるのです。疲勞の實際と疲勞した感じは全く別なのです。懶怠な者は常に疲勞に對して反撥して抗毒素を作る元氣がありませんから、段々疲勞を感じる度

が増すのであります。

原榮氏曰く、「不幸なる結核患者よ。天を怨む勿れ。治癒の動機は、脈々として、既に卿等の體内に満ちつつあるに非ずや。轄然として、茲に一度心眼を開かば、油然として微妙の歡喜、胸に溢るるものあらむ。唯此の一轉機のみ。」と。

フリント博士は胃腸病の患者に向つて、「君は食物に對してどんな注意をするか。」とたづねて、患者に色々答へさせて後、「それがお前の胃腸病の原因だ。」と云ひました。

膽囊の弱い人、内分泌腺に異常のある人は、屢々極めて怒りつほくなります。

腎臓の弱い人は、屢々性的異常興奮を起すか、或は性欲減退し、精神が非常に疲れ易くなり、そして神経衰弱となります。

肺の弱い人、肝臓の弱い人は、屢々極めて頑固になるか、潔癖となります。

心臓の弱い人は、屢々性急となり激し易くなります。

大腸の弱い人は、屢々運動が嫌になり怠惰となります。

小腸の弱い人は、理性が昏迷し、神経質となります。

胃の弱い人は、屢々總ての事に對して消極的となり、極端に氣が弱くなります。

膀胱の弱い人は、屢々極端に病的に笑ふか或は全く笑ひを失つてしまひます。

精神の不安は腰（正しくは腰椎の五）に直ちにひびき、極端に驚くと腰が抜けます。

心配が極まると、股（正しくは膝の上）が強直して歩けなくなります。

クレサスの子は嘔てありましたが、其の父が殺されようとした時、思はず叫び聲をあけて、それからは口が利けるやうになりました。

いざり勝五郎は敵にあつて、足が立ち、澤市は谷間に落ちて目があいたのです。

濱口雄嶽氏や、江間俊一氏が氣合で、手足の動かぬのを癒した等の事實は現代でも傳聞するが、これらは、器質的の疾患は癒えて、只強迫觀念が官能的に、症狀を支配してゐた場合にだけ利くのであつて、決して總ての疾患に利くものではありません。

しかし刺戟療法や、清淨療法、感應療法、整體療法、氣合療法、觸手療法、休養療法を綜合的に用ひる場合には、いかなる病氣にも、精神的に必ず癒ると云ふ觀念を與へる事は可能であり、又有効です。

アドルフビツケルによれば、憤怒、厭惡、恐怖の情が高まると、胃液の分泌量が非常に減少します。

不正不快の感情は、疲勞毒素の形成を促進し、その抗毒素の生成を阻害します。

醫學博士吳秀三氏曰く、「吾人の腦髓は、他人の腦髓より影響を受くる性質がある。この性質は之を推感性——暗示性——と種し、人が病に罹ると、方面に於て甚しく増加するものである。夫れを利用した精神療法は病人の精神を材料とし、精神方法を用ひて之を救治する。故に病人が之れを信用すれば、推感的——暗示的——の効果ある以外、精神的の効果がある。精神と肉體とは、常に相互作用があり、其の精神作用が疾病を喚起し、又是を治癒する事が出来る。」

ジョン・バアチエラーは、靜な密室に這入つて、心を平靜にして、治癒の力は今自己の中に流れてゐる。自分は確かに癒されると觀念することによつて精神療法を行ひました。

肥田春充氏はその「病弱者の力」に於て曰く、「特に言葉を以て『もう大丈夫だ』とか『段々快くなる』とか、暗示を與へることもよいが、施術者の氣力を込めた、施術そのものと、泰然不動なる態度そのものが強大な無言の暗示となるやうにせねばならぬ。」と。全くその通りであ

ります。自分で癒す時も、「良くなる。良くなる。」と思ふのですが、それは正しい姿勢、正しい呼吸、正しい刺戟、正しい休養、正しい運動、正しい中心力養成の結果として「良くなる」と觀念するものでなければなりません。

アラビヤの名醫アビセンナー曰く「患者が醫者を信する時に於てのみ醫者は大なる働をなすことが出来る。」と。

バラセルサス曰く「呪で病氣が癒るのは呪そのものに力があるのでは無い。之れを信する信念そのものに力があるのである。」と。

左傳に曰く「三度肱を折つて、良醫となるを知る。」と。

暗示は理路整然として、語氣莊重親切であつて、患者の肺腑を衝くと共に、心魂に徹するものでなければなりません。暗示を與へる時には術者は姿勢を正し呼吸を整へ、全身どこにも凝なく、眼をバツと開き、斷じて瞬をしてはなりません。術者が瞬をするやうでは暗示は効果がないのです。

眼を見よ。患者の眼を見よ。眼をきよきよと動かす人、瞬多き人、眼くもれる人は必ず

精神は不安動揺してゐます。術者の精神の統一度も總て眼にあらはれて、患者は一々それを見て感じてゐることを忘れてはなりません。

刺戟療法には熱鍼を用ひます。熱鍼は灸の如く痕をつけず、鐵の如く、穿刺せず、専ら、皮膚感覚の心理的刺戟を目的とします。

吾々の皮膚は火傷すれば火傷毒素を作ますから、それに抵抗して抗毒素を生じ、白血球が増加します。さう云ふ習慣がついてゐるから、只熱いといふ刺戟だけ與へて、眞の火傷を與へないでも、血液には變化が起るのです。

吾々の皮膚は穿刺されたり切られたりすると痛いと感じます。又切られた時はそこから細菌が侵入するから白血球は増強してそこに集り、抗毒素が出來ます。さう云ふ習慣がついてゐるから、只痛いといふ刺戟だけを與へて眞に皮膚を切損しないでも、白血球の増加、抗毒素の生成が出来るのです。

熱鍼は眞に焼く事なく、眞に穿することがないから、鍼や灸とは違ひますが、白血球の増加、抗毒素の生成に就いては同様の傾向をとるのです。

刺戟療法には、化學的刺戟、神經刺戟、精神刺戟の別があります。神經刺戟の療法が刺戟療法としては効果が強いのです。神經刺戟の中でも、皮膚感覚の刺戟が最も強く作用します。

一切の皮膚感覚を心理學的に分析し、精密に觀察してその異同を比較して見ると、之を單純感覚と複合感覚に區別することが出來ます。單純感覚には壓、寒、溫、痛の感覚があります。搔痒、搔擦等の感覺原質が他にあるのではないかと研究されてゐますが未だ不明です。さてこれら單純感覚に筋肉感覺、有機感覺等が複合されて皮膚感覚を形成してゐるのであります。

マイスネル氏小體は觸壓の感覺末端器で無毛部に多くフォン・フライ氏によれば遊離せる上皮内神經末端は淺表の痛覺を媒介すると云ひます。又メルケル氏觸細胞も痛覺を媒介すと云ひます。又クラウゼ氏終小體は結膜及び陰莖龜頭にあつて、此處には壓覺は缺如するけれども、寒覺は存在し、又眼の結膜の邊緣部には終小體が特に密在してゐますが、此處には溫覺は缺除して著明の寒覺が起ります。フォン・フライによればルフィニー氏神經末端をもつて溫覺の終末器とします。

マイスネルは觸覺をもつて壓覺以外の獨立の一感覺としたけれどこれには異論があつて、單

純觸覺も壓覺中に分類します。

壓覺については、一、壓覺は遙かに一般神経刺戟の閾値に及ばない微弱の器械的刺戟によつて生じます。故に、壓神経の末端又は其周圍には微弱の器械的刺戟を神経刺戟に變へる装置があると假定されてゐます。二、持續的壓迫は觸器に興奮作用を及ぼすけれど、末梢神経には影響しません。三、稍々強い重さを多少長く皮膚に負はせた後の壓覺は外界刺戟よりも久しく持續します。

有毛皮面の觸器は疲勞し易いけれども、マイスネル氏觸小體よりも鋭敏です。無毛部では、輕微の刺戟柔軟の毛筆、綿片等であるか按撫すれば、觸覺を感じない事があります、有毛體部では明かに感じられます。毛は刺戟物にたて、横杆のやうに働きます。

壓點の配置は、毛の數と略一致してゐます。無毛皮部では壓點の配置が有毛部のやうに整然としてゐません。そして配置は稠密です。身體各部位の稠密度は次の如くです。(一平方厘米にある壓點の數)、下腿(九—一〇)、上腿(一〇—一二)上膊(七—一六)前膊(一〇—二六)、毛腕關節(二—四)、拇指球(二—三)、頭皮(一—三)であつて、頭皮が

番多く壓點の少ない處は、眼の結膜、角膜、龜頭冠、口内齒質、前口蓋弓、鼻粘面の大部分、胃腸膜粘等です。(但し、胃腸粘膜は器械的刺戟によつて興奮する求心神経はありますが、只これは感覺を起しません。)

ウェーベルによれば、「溫覺及び寒覺は皮膚の溫度が變るときに限つて起るけれど、皮膚の溫度が變らないときは起らない、そして皮膚に觸れる物體の溫度が毫も皮膚の溫度を増減せしめないときは、溫覺、寒覺は共に起らない。又皮膚の溫度を増すときは溫覺があり、之を減するときには寒覺がある。」と云ひます。しかし皮膚は通常内方から加温され外方から冷却されま

すから、皮膚諸層の溫度、即ちその中にある末端器の溫度は内方からの加温、外方からの冷却と云ふ二要素が隨時大となり小となるに従つて定まるのです。
ストリユムベルによれば、寒覺の脱出した神経病者の皮膚に冰片を觸れさせると、著明の溫覺があると云ひます。フォン・フライによれば、又溫刺戟によつて寒點が興奮することを告げてゐます。しかし著明の寒覺を起すには、高い溫度、即ち五十度以上を要すと云ひます。(但し、豫め十度の表面溫度を有する物體を皮膚に觸れさせて之を冷却したときは、三十五度位の

低溫でも直に奇異感覺を起すと云ひます。|| タンベルグ。)

痛覺は強い壓に伴つてあらはれることもありますが、頗る尖銳の刺戟を用ひ、壓點の距離が互に遠く隔つてゐる皮膚を選んで、表皮をよく濕濡したのちに試験を施しますと、壓覺を伴はない痛覺を實驗する事が出來ます。フォン・フライヤ、タンベルグの研究によれば、神經を直接に損傷しない微弱の器械的刺戟を溫度的刺戟によつても亦疼痛の感が起ります。

痛覺には刺痛、切痛、壓痛、掣痛、灼痛、鈍痛、叩通等の區別がありますが、この差別は概ね痛神經に由來した感覺の眞の性質に基くものでなく、痛覺は他感覺の混入によつて、色々に複合的感覺を起すのであります。

内部感覺については、以前既にランゲは内部器官の觸接、切斷に對して無感覺な事實から、内部器官の疾患に由來する疼痛は主に反射性、放散性のもので、有痛部には疼痛發作と同時に、又は發作間に感覺過敏が往々發する事を唱へましたが、餘り誰も留意しませんでした。一八八〇年に、ロスは、反射痛の研究を發表し、マツケンチーとヘッドは、皮膚の痛覺過敏について詳しく研究してから漸く注意を引き始めました。ヘッドによれば、内部器官では痛覺は一

切の刺戟によつて起るのではなくて、唯斷裂性、又は張牽性刺戟によつて起ると云ひます。そしてかくして起つた内部感覺は大抵不正に局置され、内臓器官自身も疼痛は感じますけれど、唯鈍く重い痛みがあるだけで、鋭い刺すやうな眞正の疼痛は疾患にかかつてゐる内臓自身に感ぜられるのではなくて、却つて身體表面に感ぜられます。ヘッドの掲げた例によれば、例へば足を刺すときは、通常は刺點部である自己の足部以外何れの處にも疼痛を感じませんけれど、刺點の感覺機が病的に減退した時には、刺點部に痛を感じず、少しく上方の感覺機の健全なる部位に之を感じます。即ち感覺機の微弱な部位に、有痛性の刺戟を施しますと、之と密着した中樞的聯絡のある感覺機の鋭敏な部位では、直接刺戟を施した部位の刺戟よりも強く疼痛を感じます。内部器官に由來する疼痛も亦此法則に従ひます。此器官は皮膚よりも感覺は微弱であつて、その神經は脊髓に於て皮膚神經と密着の中樞的聯絡を有してゐます。ヘッドによれば、内部器官から來る感覺神經は同一脊髓節の皮膚痛神經と密接の聯絡を有してゐるのであります。即ち病にかかつてゐる器官から發する刺戟は、感覺神經道を経て脊髓に到達するときは、その脊髓節に障礙を起すために、他の部分から感覺的刺戟が來ても、同一脊髓節を通るときに

は變化を受けます。即ちこの刺戟は既に官能の障害せられてゐる脊髄に來るからです。故に普通には僅か興奮するだけの刺戟でも頗る有痛性のものとなるのです。ヘッドは、諸種の内臓病に起因する痛覺過敏帶を研究し、この帶が各疾患内臓器官に應じて、皮上に限界を有する事を知り、又帶狀匍行疹のあらはれる皮帶が痛覺過敏帶と一致するを知りました。この皮帶は寧ろ脊髄神經後根の分布に一致します。セルリントンによれば、諸種感覺纖維の錯綜はその根本領域に於て、各自強弱を異にしてゐますが、痛纖維の錯綜は觸纖維に於けるよりも微弱ですから、大體に於て脊髄神經後根の分布に従つて分類して可なるものの如くです。

舟岡英之助博士の「生理學」に曰く「屢々同一の皮部に溫神經と寒神經を同時に刺戟するを得るは注目に値す。寒神經をも奇異的に興奮せしむべき強度の溫刺戟を用ゆれば此目的を達すべし。アルルツツ（一九〇）は此際に生ずる感覺を殊に研究にして、特性を有するものとなし、之を熱覺と名付けた」と。

平田式療術は右手の熱鍼と左手の觸壓によつて痛覺を中心として熱覺（寒、溫點共）、壓覺觸覺の總てを綜合的に刺戟するをもつて、灸又は鍼等とは異なる複合感覺を起すのです。而してこ

れが最も有效なる綜合的感覚刺戟となります。

他に感應療法によつて、内分泌液及び酵素を體內に存養活動せしめて、化學的刺戟となし、精神療法によつて精神的刺戟をあたへ、治療の綜合的完璧を期してゐます。

心療に於ては、右手で熱鍼を用ひ、左手では觸壓を行ひます。これは左右同時に綜合的に手を動かすのです。正しい姿勢、正しい呼吸の下に之れを行ふと非常に愉快です。

最初は、右手の熱鍼のみを行つてゐたのですが、自然に綜合的刺戟の要求から、左手觸壓をやり始めたのですが、その結果が大變良ろしい。

人間と人間との感應作用は、互の直覺力の強さに正比例します。故に、子供や女のやうに直覺力の強い者の方が大人や老人よりも感應受容の力が強いのです。

感應力と云つても特別神祕的な力があつて、精神作用がX光線やラヂオのやうに、光線とか電波となつて相手に傳はるのでは決してありません。只普通の五官以外の有機感覺や筋肉感覺等が最も綜合的に働いて、普通經驗する單純な感覺刺戟とは異つた刺戟を感じ、従つて大脳皮質のみの興奮とは異つて、皮質と大脳幹部、反射中樞、植物性神經節等の綜合的興奮が起る事

を感應作用と云ふのであります。又皮質部のみに就いて言つても、普通吾々がすぐ憶起するやうな事柄の他に、記憶が薄れ、忘却されてゐる事柄があります。それが精神が統一して、直覺作用が顯現して來るに従つて、憶起され、綜合され、統一されてくるものです。そして、又、かかる精神統一の状態にある人に接してゐると、自然と、その姿勢、態度、呼吸の氣合等の感覺から、期せずして自らも、その人と同じやうな精神状態に導入されて行くのです。これが所謂人格の感化です。

直覺力と云ふのも、決して神祕不可思議な特別の力では無いのです。只、吾々の理性が、他の本能的な諸機能と分離的に働かないで、よく本能的な精神作用と共同し、統一的に働く場合に之を直覺力と云ふのであります。従つて理性のみ發達した人には直覺力は働かないが、さりとて理性の發達の純い人の直覺力は淺く且つ狭いのです。犬や猫のやうな動物もよく直覺力が働きますが、彼等の知識は只生存に必要な事に限られてゐるから、その直覺は只本能の遂行に必要なことと、生命の危険の豫知や、自己の利益か不利益かの判別だけに強く働くだけです。しかるに人間の場合は、この直覺力が、發明や發見の重大な要素となるのです。

總て、本能的活動は身體に關係しますから、本能的な精神活動と理性的な精神活動とを綜合して、直覺的精神作用を發現しようとする場合には身體を統一し、呼吸を定める等本能と關係のある方面を纏めるのが便宜です。

特に性慾本能と理性との綜合作用が起る場合には、吾々は最も強い感應力を養ふ事が出來ます。而して之には實驗上姿勢を正しくして、正坐し呼吸を整へるのが一番です。

リップスによれば他人が物事に對して、笑つたり、怒つたり、泣いたりする心持を、吾々が知るのは、自己の感情を、その人の感情の中に移し入れるからです。病者は治療者の正しく深い感情を直覺的に自らの内に移し入れて、そこに一種の感應を起すのです。

タルドによれば、「人は他人の觀念を受け他人にも亦、自己の思想感情を與へて、互に模倣するものである。そして模倣は先づ内部から外部に及ぶものである。例へば他人の所作及び行爲を模倣する前に、先づ内部的觀念を模倣するものである。尙ほそれは、優者から劣者に及ぶのが普通である。」と。

肥田春充氏はその著「病弱者の力」の中で言つてをられます。「無生物に對しては、單に形態

に就て感ずるのみであるけれども、動物に對しては、そのものの形を感ずるばかりでなく、力の強弱、性質の柔剛をも感ずる。殊に直覺的に人の心を衝くものは、形態の大小、外觀の美醜、體力の強弱よりも、そのものの性質の善惡である。動物園へ行つて大きな象を見ても恐ろしい感じは起らないが、小さくても血に餓ゑた牙をむき出して、吠え猛る山犬を見ると、薄氣味が悪い。人にしても、口を開けて居ると、しまりが無い。肩をすほめて居ると不景氣だ。屈んで歩くと、意氣地がなさうだ。崩れた姿勢の人は、見るからに危ぶなさうだ。強慾の人、廉潔の人、傲慢の人、謙遜の人、殘忍の人、慈悲深き人、夫々直覺的に、相當の感じを對者に與ふるものである。殊に最も深く、人の心に沁み渡るものは慈悲の情である。……感應作用は、殊に病弱者に對して、効果がある。そして、彼等が最もよく感ずるのは、剛強と慈悲との二つである。慈悲はその人の品性から出づるものであるけれども、強さはその人の腹力から出たものでなければならぬ。調和しない體力は落ち附いた強い感應作用を、他に及ぼすことが出来ない。圓滿な中心力によつて、安定した姿勢と、それによつて清明爽快になつた精神とがあつて始めて、充分に施術者の力を被術者に及ぼすことが出来るのである。故に施術者は充分に中心力の

養成と精神の統一とに就て、練習を積んで置かねばならぬ。頭痛がしたり、倦怠を覺えたりした時、母親に擦つて貰ふと、春霞に包まれたやうな慈愛を感ずる。父親に擦つて貰ふと大船に乗つたやうな心強さを感じる。これが兄弟だと、親しみはあるけれども、親に對する程の溫情と力強さとを感ずることは出来ない。親戚の者になると、多少の氣兼ねも出来、更に他人が、一片の義理の爲めに擦つて呉れるのであると時に厭な感じもする。他人でも信賴するお醫者様とか、親切な學校の先生になると、有り難さばかり深く感じて我儘が少しも出ないから、精神上却つて大なる効果がある。かう云ふ様に感じさせるのは他の者がするのであるが、感じるのは自分である。いくら感じさせようとした處が、感ずる力のない者には何とも仕様がな。直覺は事物を眺めたり考へたりするのではなくして、それは全體として認識感得するものである。而かも直覺は眞理を捉へる最良の道である。」と。

スマイルスの「自助論」のロベルソンの項に曰く「予曾て路に見すほらしき一貧少女と會せり。惻隱の情覺えず予が胸裡に湧き出でたり。予は心附かざりしがその瞬間、少女の眼底には感涙サツト浮びたりと同行の人は語りぬ。……眞情より出づれば、一顧面なりとも電氣の如く

對者の心に通じて嬉し涙に咽ばしむ。」と。

感應の力を養ふには煉丹れんたんにしくものはありません。煉丹の術は道家の傳へる所でありませんが、清時代の禪師柳華陽りゅうかやうによつて集大統一され、且つ外丹を排して専ら内丹の道を説き、本能と理性の調和を呼吸、精神、姿勢の一致から説いたのである。その著に「金仙證論」があり、伊藤光遠氏の丁寧な解説本があります。今その原文のみを抄録しますと、「大道を修せんと欲せば、理として別の訣けつなし。神氣に非るはなきのみ。先づ須すなはらくその造化を窮め、その清濁を究むべし。則ち精生ず。方に探攝たんさつすべし。次にその呼吸を察し、その節序を明かるときは、則ち神凝つて、方まさに自ら戀吸せん。然して後、施すべく、受くべし。而して精も化すべし。余、世人を見るに、また陽の生ずるを知つて、精の煉つてやまず、金丹成らざるもの、皆その自然にして然るを知らず、以て混探こんたん混煉するの過に因る。且つ古書の喻を作すところを観るに、爐鼎道路と名づくるときは、則ち人、爐鼎道路の所惑を被る。名を鉛汞藥物に喻たとふれば、則ち人々また鉛汞藥物の所誤を被る。故に假道愈々顯れて、眞道愈々晦し。世、喻たとによりて人を惑はし、人を誑たぶらかすもの衆おほし。これに由りてこれを觀れば、智者は師を得て明かに、愚者は師にをし

へられて誤る。皆群書簡易の妙を悟らずして、竟ついに正理を失するに因る。故に予正に詳にして直論せんと欲す。夫れ仙道は先天の神氣に基づく。精を煉れば、則ち氣その中に在り。形を煉れば、則ち神その内にあり。煉時、必ずその火（精神）を明かにす。火を用ふるには必ずその風（呼吸）を兼ね。その誠を存し、その竅けうに入り、その自然に合す。若し能く此の如く時に依つて煉れば、即ち藥物自然に生ず。生じ竟おほればその熟路じゆくろに遊ぶものこれあり。若し火を起して爐に歸せざれば走失さうしつの患を免れがたし。藥物既に爐に歸すれば、また速かに火を起し、逼せまつてその周天を行はしむべし。倘もしその火候かこうの精微せいびを明かにせざれば、藥ありと雖も、藥また丹を成すこと能はず。橐籥たふやく（正式呼吸）の消息を知らず、升降の法度を明かにせず、沐浴の候を知らず、歸根の所を曉さとらす。かくの如くして空煉せば、何ぞその道を成ずることを得ん。大凡機に臨むの時、必ず須すなはらくその神を暢明ちやうめいにし、その志を猛勇にすべし。天心の主宰しゆさいを立定し、輻輳ふくくわうの運轉を徘徊す。内、橐籥の消息を鼓し、外、斗柄とうへいの循環に依る。かくの如く、神氣相依つて行き、相俟つて住すれば、則ち周天の造化、宜しきに合せざることなし。」と云ふ調子で第一章を終り、以下第十二章に到る迄評しく、姿勢と呼吸と精神を統一して、中心力を養成し、本

能と理性の調和統一の方法を説いてゐます。蓋し感應療法の經典です。

中心健康術の治療法では、患者に感應療法を施すには患者を仰臥安静せしめ、室を靜に、清めて、患者の前で只正坐するのです。術者の眼は勿論見開き。無言、無想のまま病者に對すればよいのであります。要るものは只一滴の純愛同情の涙だけです。他のことは皆正しい姿勢、正しい呼吸、正しい態度の力強さ、美しさが、大なる感應力となつて患者に迫つて行つて解決してくれるのであります。

そのためには常々煉丹に心がけ中心正坐法の實行による中心力の養成をつとめねばなりません。

石原保秀氏曰く「埃及羅馬時代に於て、一種特異の養生法の行はれましたことは、フーヘーランドの『長命術』にも載せられてゐますが、彼の地の人は、生命の保続は、胃腑の吐瀉と、身體の發汗とにありました爲め、毎月二回以上吐劑を用ひ、又發汗の必要を認むるの餘り、時候の挨拶にも『近來發汗如何に候や』などと云ふ言葉を用ひたさうであります。……此發汗法は我國は勿論、支那にも極めて古くからありますことと、和漢醫學の治療法は所謂汗吐下の法

者を出でないと言つても差支無い程であります。今日の醫學にしましても、發汗劑、下劑、乃至吐劑の應用が、如何に頻繁であるかに想到しましたならば、蓋し思半ばに過ぐるものが有るでありませう。」と。

・發汗、排便、呼氣の三つが身體的に、反省、懺悔、感謝の三つが精神的に、完全に行はれる時に、心身の眞の清淨があらはれて來るのであります。

しかしいかに毒物が排泄されても、尙排泄し得ざる事がありますから、刺戟療法と精神療法の助けによつて、抗毒素を身體中に作つておく事も亦積極的の清淨療法です。

便秘は頗る心身の清淨を害するものであります。醫學士岩城清士氏は「不老長壽の科學的研究」の内にこの事を詳しく述べてをられる。曰く、……我々人間の腸には十二指腸、小腸、盲腸及大腸の四部分があつて、その内小腸が一番長くて、そして一番生理學上大切の働を營み盲腸はホンの形許りに小さくて何の役もなさず、又大腸が一番太くて長さも可なりにあるが、その生理學上の意味は非常に少いと云ふ様な有様であるに異り。例へば鳥類などに於ては小腸も盲腸も可なりに長くて、そして生理學上共に大切な機能を務めて居り。而してその大腸に到つては

極めて短くて、そして一層生理學上の意味はなく、且つそこには食物残渣を永く停滞させることがなく、サツサト排便してふと云ふ様なことを見るのであります。で一般に申しましたならば地上に悠々自適じてきの生活をして居つて、植物食を多く食うて生活する哺乳動物では、此大腸の發達が甚しいのでありまして、人間も亦實にその群動物に類屬して居るとも云ふ可きものであります。然るに奇なる哉。此の長大なる大腸を所有する動物はその大腸の短い動物に比して皆短命であると云ふ事實が發見せられるのであります。……此大腸は消化の機能を有たず、又營養分の吸収も之をようせない頗る役目の少いものであることが分るのであります。然るに只此糞塊を外に排出するのみに過ぎない様に單純な働きを有する大腸が、何故に哺乳動物には殊に著るしく發育してゐるのであらうか。……此問題に關して面白い説明を下したのが彼の長命論者のメチニコツフ博士であります。則ち氏の申します所によれば、地上に悠々自適して居る動物は屢々外敵（他の動物）の襲撃しゅうげきを受けるので、その時は迅速じんそくに走つて逃げなければならぬ。又己れの餌とする他の小動物を捕へて喰はうと思ふ時もグヅグヅせずに一生懸命駆けなければならぬ。そして地上は狭いので一刻と雖も油斷はならず、又マゴグとして居り得な

い。……その必要上……さう頻回に糞便排出の爲にグヅグマゴツいて居てはならないのであります。則ち成可く永く糞塊ふんがいをば貯藏して置いて安全の時にのみ排出する必要がある。そこで此必要から自然に大腸は大きくなつたのであり、そして人間にも……長大な大腸が今尙残つてゐるのであると云ふのであります。……加之此の長大な大腸が存在しそしてその中に無数の細菌が生息して居ることの爲めに哺乳動物や人間の壽命は甚しく短くされるのであることがわかつたのであります。鳥類はもと空中を飛翔ひしやうせねばならないのであるから一般にその身體は出来るだけ重量の少い様に出来てをるのでありましてそれと同じ様に又糞尿をば成るべく早く排出して了つて身體の重量を増さない様に出来てゐるのであります。……加之其腸内の糞便を調べてみますと、その中に細菌の生息してゐることが非常に少いものであることも見るのであります。……腸内に糞便の永く留るもの程、その中に繁殖生殖する細菌の数が非常に増すのである。……腸内の腐敗菌、醗酵菌がそこで色々な腐敗や醗酵を起させるが爲に、そこに色々な物の價の分解産物が出来てくるのであつて、それが又腸から吸収されるから烈しい中毒の作用を肉體に及し、それが長い年月につもりつてもつて老衰を起さすのだと云ふのであります。……でそ

の一の證據として私は此の腸管内停滯^{ていたい}の爲に起る中毒の實例をまづお話致します。人間の子供の腸管には初めは割合に生息細菌が少いものであります。ですからその吸収力も亦強いものであるに拘らず、平常は割合に此有害作用をうけることが少いのであります。處が此腸の吸収力のよい小供が一度久しきに互る便秘にかかりますと云ふと、その腸管内毒物の吸収が非常に多いが爲に、實に猛烈な中毒症状を起してくるのであります。バスクイエと云ふ醫者の書いた所によりますと、實に次の様になるのであります。『則ちその顔貌は鉛の如くなり、眼球は突出し腫は開き、小鼻は陥没し、又三十九度乃至四十度の熱を起し、脈搏は早く短く、且不正となり、不眠、痙攣^{けいれん}、項部強直^{こうちゆう}、更に甚しきは虚脱^{きよたつ}より往々死に迄云々』と。又小供でなくとも大人でも明に此中毒を認め得る事實もありまして、それは屢々彼の産婦にくるのであります。則ち妊婦又は産婦が此久しい便秘にかかると云ふと、果ては『劇烈な頭痛を訴へ、舌は白くなり、呼吸は悪臭を放ち、三十八度乃至三十九度の熱を發し、口渴、食慾缺乏も烈しくなる』のであります。そして之等の猛烈な苦みも停滯した便を出してやれば、間もなく、拭ふが様に消えるのであります。……則ち……腸内形成毒の中毒は中々烈しい害を及ぼすものであります。……

たとへ平常はこんなに烈しくなくとも、常に少し宛有害作用を及してゐるだらうといふことは先づ確かなものと申さねばならないのであります。』と。

佐々木醫學士によれば、「人間の便中にある細菌の研究は内科醫「ノートナーゲル」の著手^{ちやくしゆ}に初まつてから旺^{さふん}にやられたが、既に一八八八年、スタールと云ふ人は人便中から二十餘種類の細菌を分けた。これでもまだその一部に過ぎない。」と。故に便通をよくすることが心身淨化の一方法であります。

酸素の缺乏も、体内の分解作用は不充分になつて所謂ヒドロリゼ作用が異常に旺^{さふん}となつて、その毒性分解物が生じてきます。又毒性分解物質の中和が出来にくくなります。又物質の同化作用が減じてきます。体内には段々毒がかたまります。故に呼吸を深く長くすることが心身淨化に必要です。

アムモニアガス、亞硫酸ガス、その他の有害瓦斯、煙草の煙等、有害なものが空中には一杯あるから、呼吸には特に注意する必要があります。体内に生ずる岩酸ガスも呼吸不十分のときは排泄がおくれます。

衣服の不良も心身の淨化を害し、キツチリと身につくもの程、皮膚の排泄作用を妨げます。

過度の勞働、勉強は疲勞毒素を蓄積します。岩城醫學士は過度の勞働の結果をあげて曰く、「常に過度な勞働をやる人は瘦せて、その手や足が固くなる。車屋や角力取は却つて短命である。運動が餘り烈しいと息が苦しくなり、心臓が止りさうになる。即ち中毒症狀が明らかに出る。車引の足の後側には弾力を失つて擴張しそして脆くなつた血管が外からウネ／＼とみえてくる。あれは靜脈も似た様なものであつて、所謂老人性變化なる硬化脆化が起つてくる。……之等の過度の勞働と云ふことが永い／＼年月の間續いて起つたならばその害は恰も慢性病の病毒の作用と同じことになる。」と。

精神過勞、感情の激動も著しく疲勞毒素を體內に蓄積します。

酒毒は肝臓に最も強く働いて、その細胞の生活力を奪ひます。メチニコフ博士の所謂大腸菌の發育を甚しくします。従つてその吸収せられることも多くなつて腸内成生毒吸収による自家中毒が非常に烈しく起きます。

田中祐吉氏は糞便停滯の害を擧げて曰く、「一、硬固な糞塊が大腸内に滯ふると之が結果とし

て、腸壁の逆蠕動が起り、大腸内の瓦斯が小腸及び胃の方へ逆昇してくるから、胃及び小腸は擴張せられ、胃痛や疝痛が起り、又横隔膜も上に壓されるから、引いては肺の運動に迄妨害し、則ち呼吸困難となり、又心悸の亢進をも起さす。二、糞塊固くなり盲腸に蓄積し、その粘膜を器械的に傷るから細菌の侵入に便にし盲腸炎の機會を與へる。三、又その器械的刺戟によつて癌の發生が誘因せられる。盲腸直腸などに癌の多いのは此停滯による。四、腸瓦斯の胃内上昇によつて胃擴張を來し、又腹壓の高まることによつて胃粘膜の血行害せられ、之れが持續すると食物の消化吸収は悪くなり従て全身營養の異常をも將來し、甚しくは潰瘍の形成を來たすやうなことさへある。五、又久しく停滯し腸管が壓迫されると、大動脈の血液流行が害せられ心臓の動作が困難になる結果その心室は代償性に肥大してくることさへある。此實例として兵役の免除された一壯丁さへあつたのであつて、それが醫療により腸管が洗れると、消ゆるが如く、健全に復したと云ふことである。六、同じく腹部の内壓の高まりによつて、大動脈内血行が害されると、その影響は續いて腦にも及び、則ち腦の血壓は亢進して精神機能をも障害し、ヒポコンデライ・メランコリー及神經衰弱様の症狀迄も起り、頭痛、頭重等迄も起つてく

る。七、又下大靜脈が壓迫せられると、その結果は腎靜脈、骨盤、靜脈子宮、卵巢、膀胱及直腸の靜脈に鬱血が來ることは云ふ迄もないことで、色々の生殖器の疾患や痔の誘因にもなつて來さへする。」と。

便秘の治療には、發汗度に應じて冷水の飲用をすすめること、(特に朝起後)。腹の熱減、觸壓、下腹部の觸手が有効です。

水の飲用は發汗度少きもの、夜小便に起るもの、小便近きものには、腎臟の負擔を増すから嚴禁です。只刺戟療法によつて發汗が起るに従つて飲用量を多くすべきです。

腎臟の排泄作用を促進するには、合掌するのが宜しい。

精神的には毎日一回は必ず、懺悔反省し、最後に總てに感謝して、心にたまつた毒を排泄せねば、積極的の閉病心があらはれてこないのです。

病者の姿勢を整へるには徐々にせねばなりません。急激にすると病勢を悪化します。

吉田章信博士曰く「脊柱は二十六箇の柱骨と二十三箇の推間軟骨(推間板)とより成り、推間板があるので屈伸捻轉運動が餘程自在である。併し運動が自在であるだけ變形も起り易いわ

けです。

病者の整體には主として指壓を用ひます。指壓は加速度的に力を用ひて、一分間持續するのを標準として、背肩首頭、手足の外側等顔、手足内側、首前面、胸、腹は軽く靜に摩します。

この際氣合と共に指頭に微動が起れば尙宜しい。總て術者自らの姿勢を正し、氣合がこもり、感應力精神力が伴ひ、且つ、操作は徐々に靜かに加速度的になさねばなりません。

素問に曰く「寒氣背俞の脈に寄るときは、即ち脈澁り、血虚して痛み、心に注ぎ、相引いて痛む。之を按ずれば則ち熱氣至つて痛み止む矣。」と。

宮脇仲策の「導引口訣抄」に曰く、「脊骨は督脈の行く處、一身の柱也。是を扱へば、三焦の病悉く治る可し。脊骨の真中に指を掛け、引し動かすべし。又左右より按引し扱ふべし。腹の底堅塊あるは、専ら督脈二行通りを療すべし。此の處に、膏肉邪骨取付き堅塊あるは、痞瘕、其外大病の根本也。上部に有あふは、胸中に妨げ、中部に有は、腸胃に妨げ、下部にあるは、腎膀胱に妨げ有る也。能々心を付、穿議して、或は按摩し、鍼灸し、早く治すべし。龜の尾を専ら扱ふべし。諸病治すべし。虚人は此骨次第に長大に成る也。能々碎くべし。自ら實壯にな



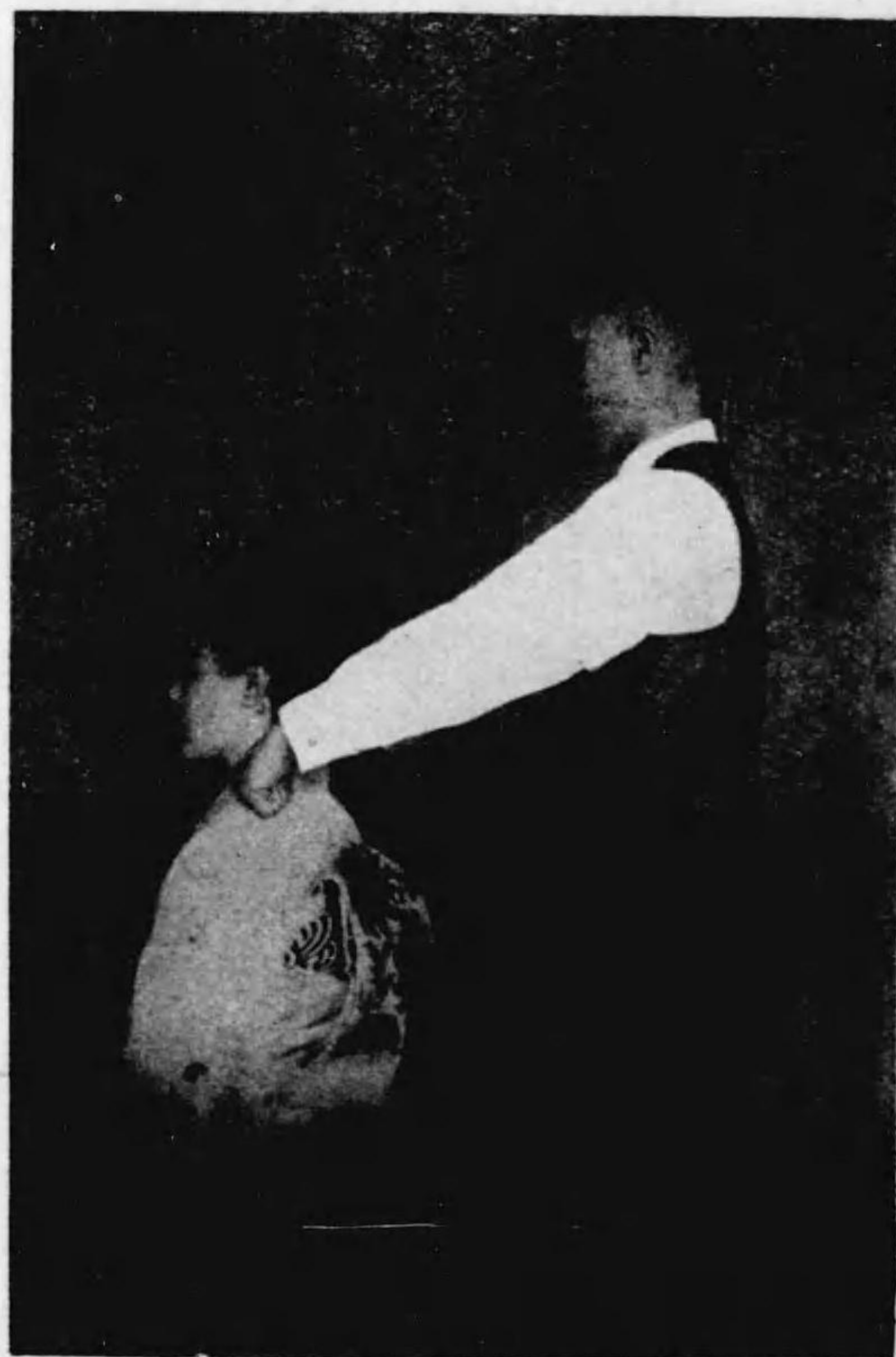
平田式觸壓法

熱鍼が無ければ、看護が出来ないのではありません。その時は赤手をもつて、経絡、經穴、反應帶を選んで指壓をもつて、或は觸摩をもつて、看護して下さい。これも、吾々の示すところの原理に従つてやれば充分の效があるので、この時も姿勢と呼吸を正し、精神氣力を中心にくめることは同一です。



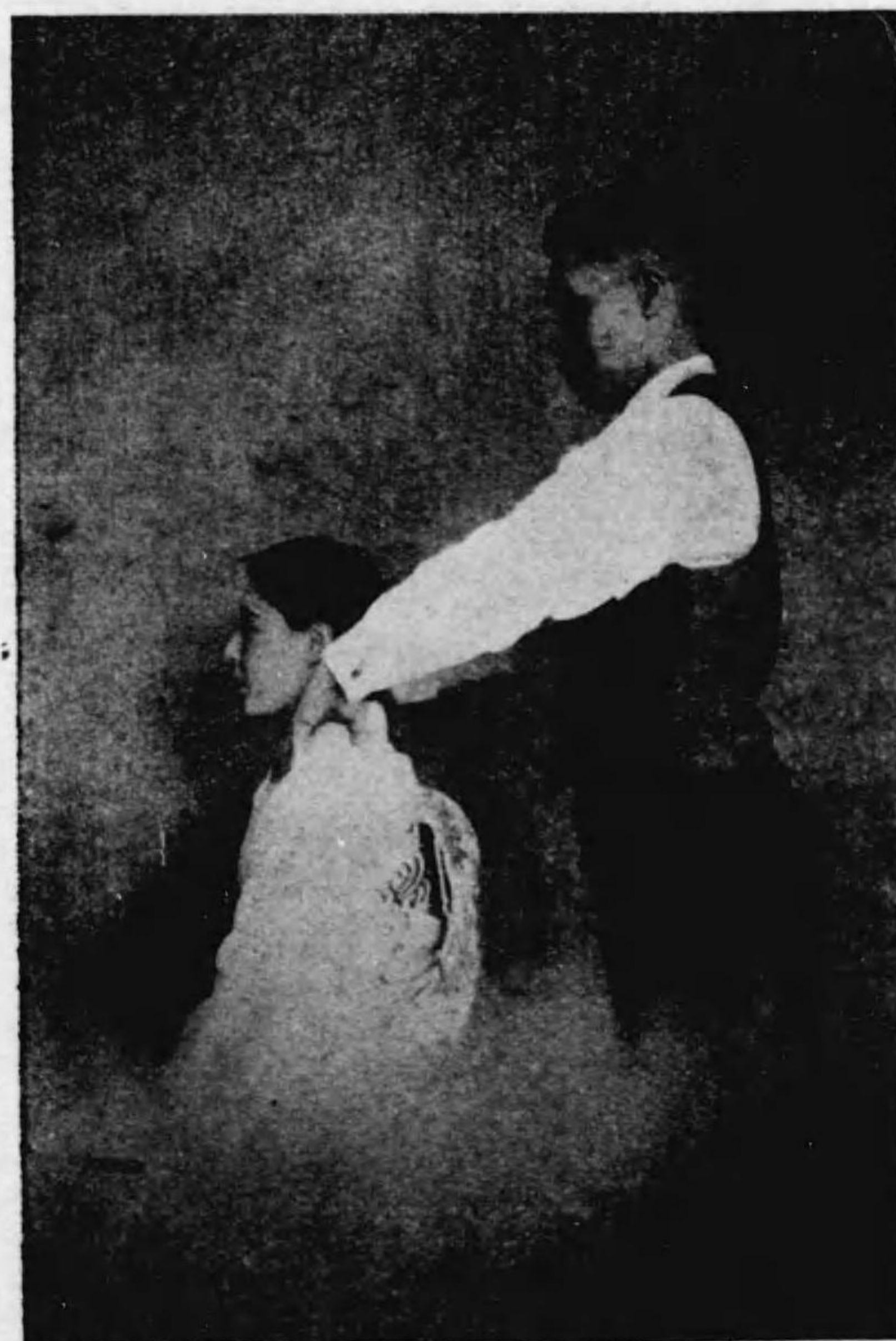
(平田式觸壓法・指頭壓迫法) 呼吸と姿勢を正して行ひます。

拳式觸歴



(平田式觸歴法・拳式觸歴法) 氣合をもつて觸動を與へます。

拇指觸歴



(平田式觸歴法・拇指觸歴法) 力は加速度的に。



平田式整體法・腰部反逆法

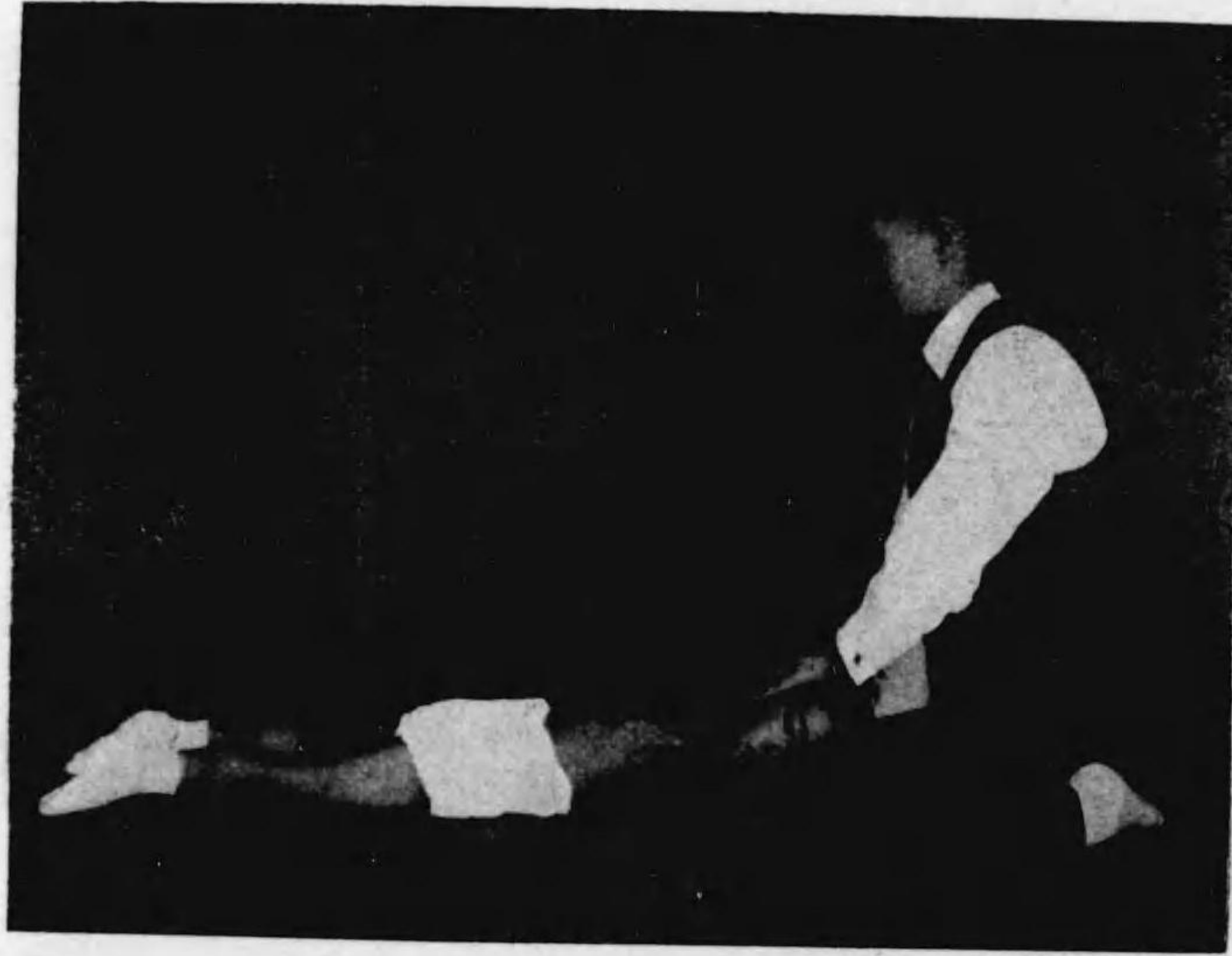
両手を一緒に作用なさい。



(平田式觸壓法・拇指壓迫法)

或は強く或は弱く凝と虚衰の状態に従つて壓します。

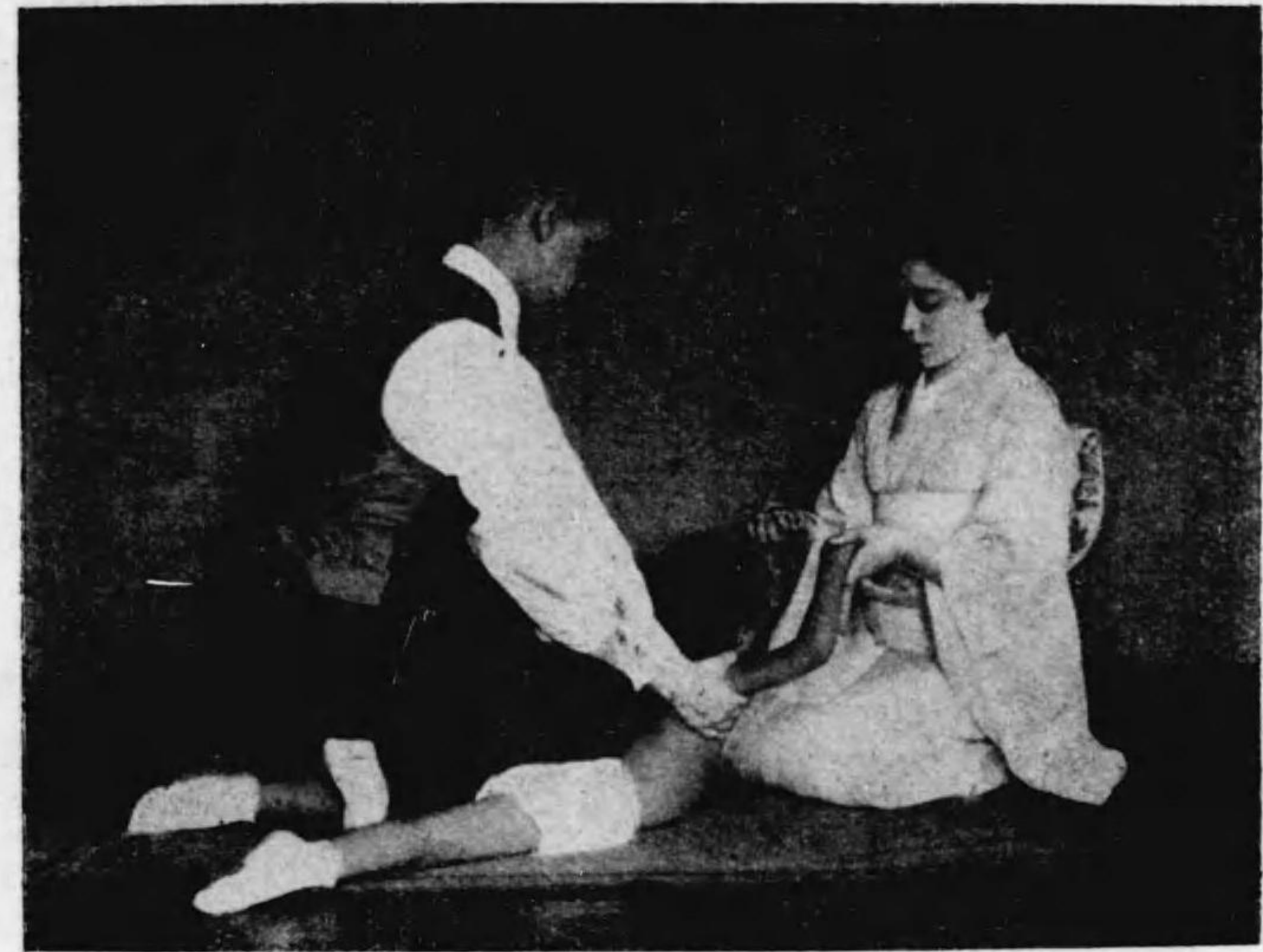
頸椎整正



法正整椎頸・法體整式田平

頸椎は最も副脱臼し易い
のです。
両手を耳にびたりとあて
てぐつと首を横に曲げま
す。

胸椎整正



法正整椎胸・法體整式田平

整體の基は脊柱です。
膝を脊に當ててぐつと反
らせる。手で補助をしま
す。

弾指

式 觸壓彈指



彈指式

觸壓の練習のために彈指運動を致します。これはごく過敏な人を觸壓する時必要な手つきです。小指から順々に手指を動かして指頭で叩くやうに致します。

式 觸壓指壓



左右拇指は自由に動かねばなりません。

拇指と小指の開閉は自由でなければなりません。

拇指は直角に屈せねばなりません。

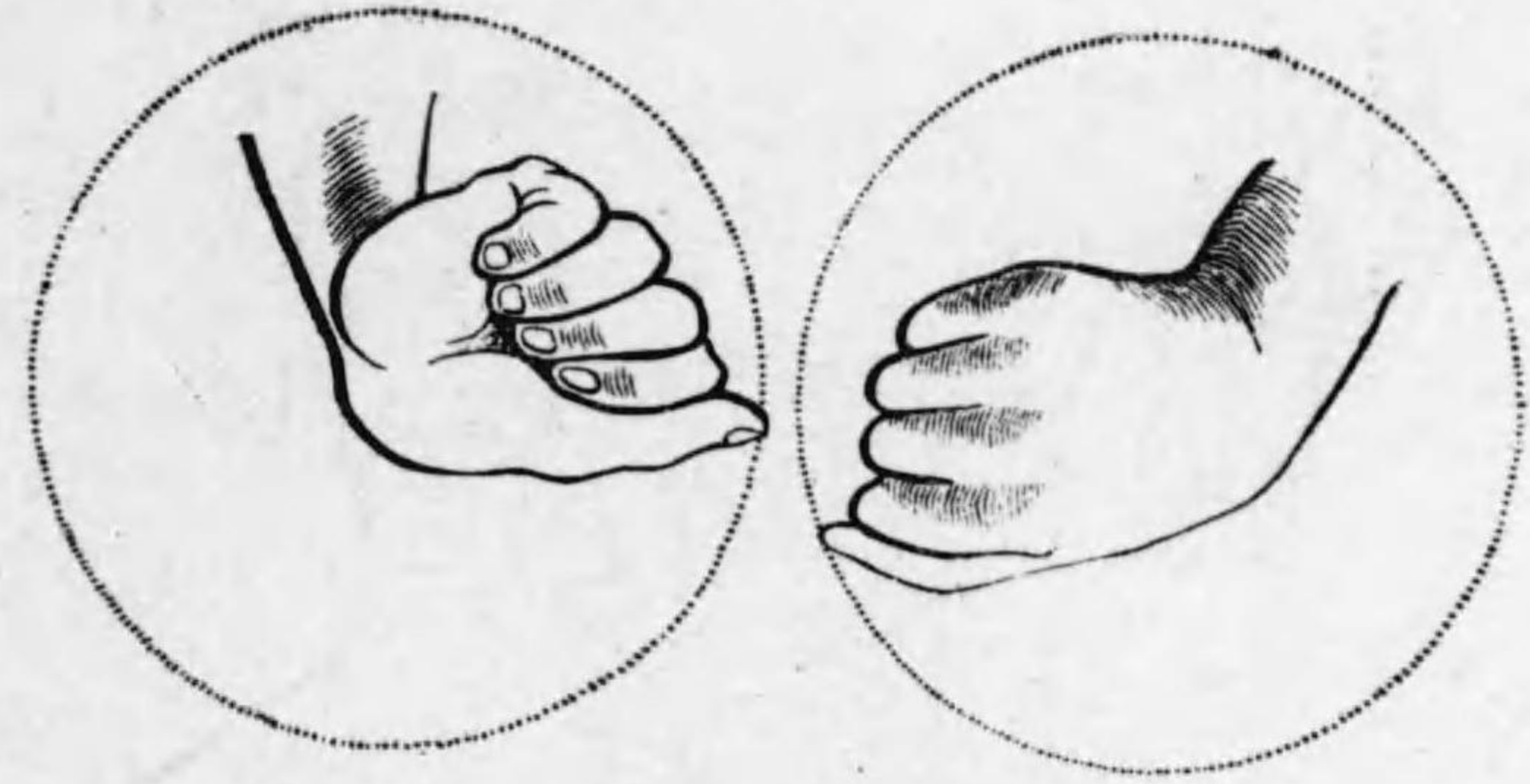
人指指は直角に動かねばなりません。

指の結合は自在に動かねばなりません。

指壓式

拇指での指壓には拇指の各指節がよく屈折してまむしの頭のやうな格構になられば力が入りません。拇指の次には人指指が最も多く用ひられます。

一 腕關節式

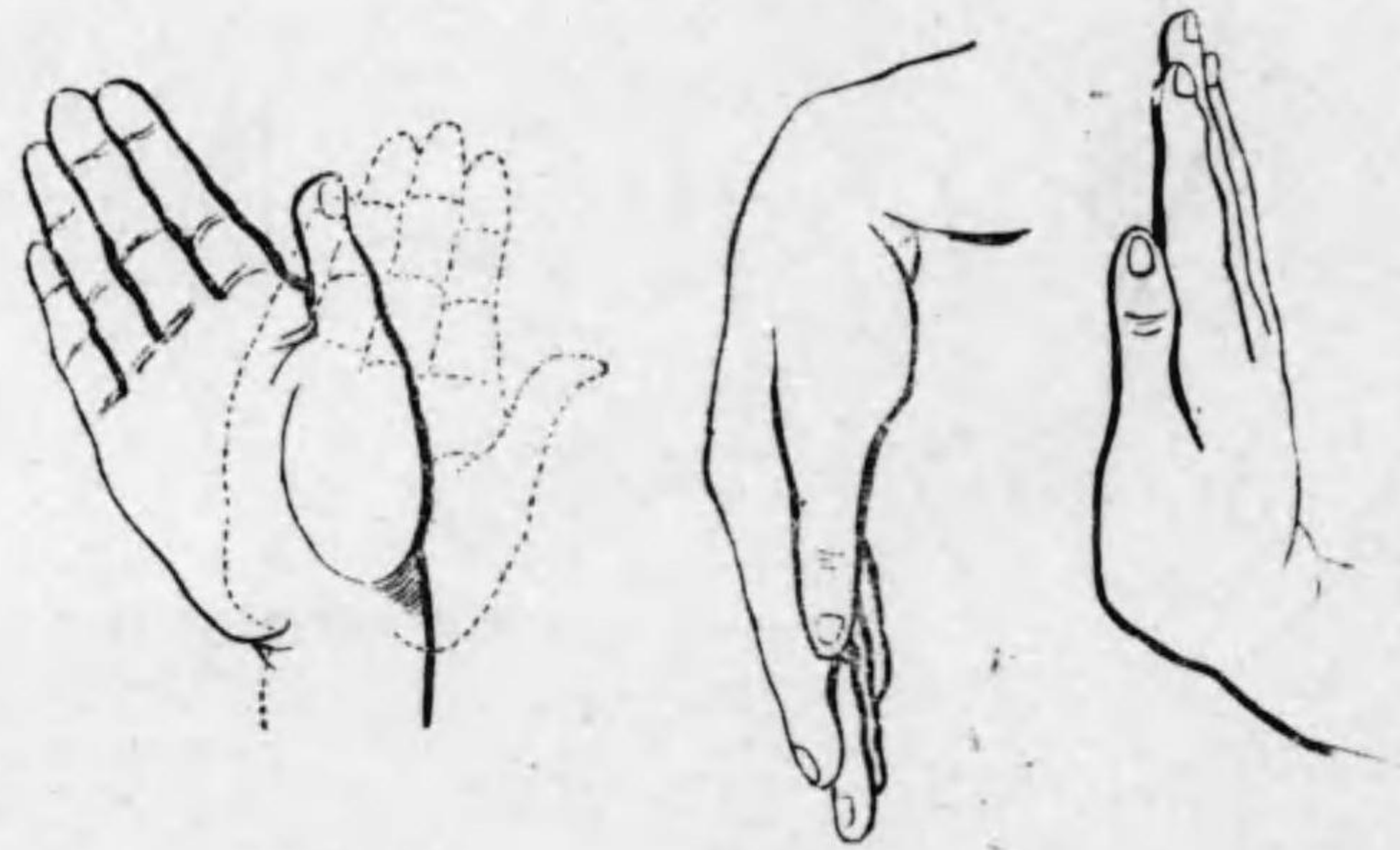


腕關節式 一

背とか腰とか腕とか股とかのやうに筋肉の厚いとこの觸壓には手首の處を中心に、手の腹、手の甲で壓する必要があります。左右共腕關節の運動が必要です。

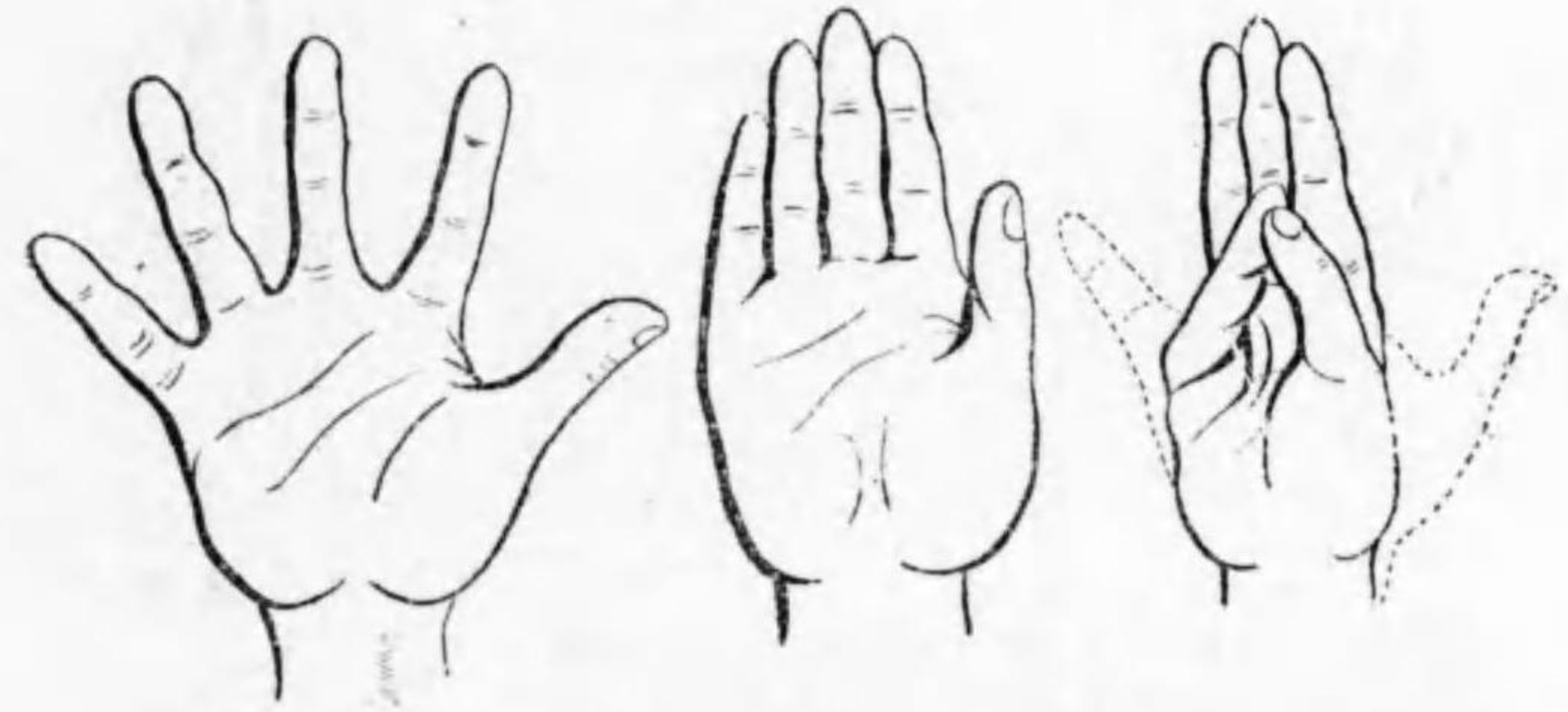


二 腕關節式



腕關節式 二

更に振動的に觸壓する時には圖の形です。



開閉指式

顔面首の前、胸の上部等のやうに筋肉の薄い
處の觸壓には指を開閉して指頭で軽く操作し
ます。



拳式

肩とか腰の凝凝の強い時には指頭では足りない故、拳を作つてその角で
壓します。更に強くするときは寫眞のやうに握ります。即ち食指と中指
とを曲げて、その前に拇指を折つて寄せつけ、それを第四指と第五指で
おさへます。握つた拳はなる丈固くなるやうにし掌にはなる丈隙をこし
らへぬやうにします。



るべし。大椎は一切の骨病是にて療すべし。大椎の上に骨あるは邪骨なり。定まりたる骨と思ふは非也。髮際、肩背の結肉、邪骨碎去る可し。」と。

貝原益軒の「頤生輯要」に曰く「凡一日に一度、わが首より足に至るまで、惣身のこらす、殊につがひの節ある所、ことごとく人に撫でさすり押さしむること、各所十遍ならしむべし。先百會の穴、次に頭の四方のめぐり、次に兩眉の外、次に眉じり、又鼻ばしらのわき、耳の内、耳のうしろを皆按すべし。次に風池、次に項の左右を揉む。左には右手、右には左手を用ふ。次に兩の肩、次に臂骨のつがひ、次に臂、次に手の十指をひねらしむ。次に脊を押へ打ち動かすべし。次に腰及び腎堂を撫でさする。次に胸、兩乳、次に腹を多くなづる。次に兩股、次に兩膝、次に脛の表裏、次に足の踝、足の甲、次に足の十指、次に足の心、皆兩手にて撫でひねらしむ。我手にて自らするもよし。」と。

醫師グリヒンは十九世紀の初に「脊柱の狂ひは萬病の根元である。」と唱へた。

ゴールドスウェイト氏は曰く、「眞直に立ち、平易に歩き若くは動き、身體の各部が完全に調整せられ、容易に均衡がとられ、効果がよく達せられるやうにしておくことは、美容上よりも

寧ろ重要な理由から望ましいことである。即ちそれは完全な健康を保ち、最も經濟的に且つ最大の効率をあげるために必要なのである。それは、正しい姿勢を保ちながら身體を使用するならば、摩擦を最も少くし、従つて最も多量の精力を得ることが出来るからである。」と。

スマイレー及びゴールドは、肩が前方に彎曲し、脊が中高となり下腹のつき出し来るやうな姿勢について曰く「第一、腹筋が弛緩し、腹圧が低下する。その結果として便秘を生ずる。第二、腎臓内に靜脈血が鬱積する結果として蛋白質尿を生ずる。第三、體重を背筋肉群に均等に配分せぬ結果背痛を起す。第四、前腹壁が正常よりも水平に保たれてゐるため、鼠蹊の腹輪上に加へられる腹圧が増す結果、脱腸が増してくる。」と。

首を眞直にせよ。「全世界をまともに見よ。」しからは精神は自ら覺醒します。犬も悲めば首をたれます。

ゴールドスウェイトは曰く「正しい姿勢とは爪先立ちせず、身體が出来ただけ伸ばされるやうに體を支へることである。」と。

井上なか子刀自曰く、「大黒柱に狂が來ると、戸や障子の開閉が不自由になり、之れを削つた

り、添木をしたりせねばならぬことになりませうがな。そして日の立つ中には、削つても削つても、添木をしても、添木をしても、益々、戸障子の具合が悪くなりませうがな。丁度そのやうに、人の軀も、その大黒柱たる脊梁骨が歪みますと、胃にも腸にも、肺にも心臓にも、一切の處に狂ひが来る。之れが、脊梁骨が筋むと諸病が起つてくる。」と。

腰椎の故障は精力を損し、頸椎の故障は腦力を損し、胸椎の故障は氣力を損じます。

峨山禪師、井上仲子氏の指壓整體の妙を贊して曰く、「但馬の婆子、筋を按じ骨を摩するの術を善くす各遠近に聞ゆ。其の言に曰ふ。病は只筋骨の整はざるに因る。筋骨整へば病則ち無し。其の筋骨を整ふ、先づ腹部に於てすと。余其の言の本を捨てて、末に奔らざることを奇とし、治を受くる旬餘、忽ち效驗を見る。」と。

肥田春充氏曰く、「病人は體が痛んだり、疲れたりしてゐるので、自然と姿勢が崩れ易い。殊に立つたり坐つたりした場合には、直ぐ怠儀になつて、體を前に屈めたり、横に捻つたりする。さうすると、何處かに、窮屈不自然な處が出来、従つて、何處かが壓迫され機關の働が、一層不完全となり、病勢を進める。進ませないまでも、回復力を鈍くする。然し、立つてゐる時、

正しい姿勢を執ることは或は困難かも知れないから、せめて寝た時だけは、正しい、そして楽な姿勢、則ち純自然體を執つて、機關の働を良くすると同時に、充分の休養を與へるやうにせねばならぬ。」と。

術者は、患者の身體の凝結をといて樂に自然體がとれるやうに導いてやらねばなりません。衰弱し切つた患者には只觸手靜養のみをさせます。

第六章 平田式中心呼吸法

中心力

闘病の道が、結局は患者自身の道である以上、病者自身の絶え間ない反省と、一切を放下した静養とが、却つて何人の看護よりも有効であるのです。私は、只病者に多少でも力づけとなり、参考となる事を信じてのみ、現在の私の確信を書きつづります。私は如何なる病氣も只一つの中心力で癒える事を確信してゐます。中心力で癒せない病氣は天命です。自他共に諦める事が出来る場合です。中心力をめぐつて、機械醫學と觀念醫學が對立してゐます。醫學はその生れた當初から、その觀念主義と機械主義が對立してゐたのです。西洋醫學の鼻祖たるヒポクラテスに於ても、その箴言にあらはれてゐるやうな觀念主義がその機械的、經驗的、自然科学的な萌芽としての精密記述と對立してゐます。漢方醫學に於ても、素問や靈樞の觀念主義の内に、既に張仲景等によつて開發される實證的、機械的方向をも含んでゐます。勿論張仲景の思想の内には多分の觀念主義が含まれてゐるのです。機械的な近代醫學に於きましても、ドリーシユ等の新生氣論と呼應して、色々な觀念主義が入りこんでゐます。ビールの如きはかくの如

科學

く言つてゐます。——自然科学は醫學の召使たるに過ぎぬ。醫學は一つの藝術である。そして藝術に於ては直觀が極めて大なる役割を演ずる。自然科学は醫學に對しては或る役割を演ずるが、醫學そのものは精密科學ではない。——と。チューリツヒの醫師ムラルトも言つてゐます。——科學は現代人にとつて疑問となつた。——人々はしばしば、頑迷な科學的氣分によつつかる。科學は或る乾燥無味な、死んだものと感ぜられる。人々は、科學は眞の認識を媒介し得ない。科學は、そのみが本質なものの中に入り得るところの直觀を缺いてゐる。と云つて科學を批判する。人々はまた科學を合理論的、因果論的であると言つて罵倒する。人々はまた科學は人間に對して何等の世界觀をも打ち立て得ないと苦情を言ふ。そこで人々は科學から離れて、神祕説、祕密教、神智學の腕の中へ飛び込むのである。——自然科学は自然を説明せんとする要求を掲げる。それは現象の原因を研究し、その推進力を見出し、そして因果的研究たらんとする。科學的觀識は精神の三つの認識力、即ち感覺、直感及び理性の調和的協同によつて得られる。初めの二つの機能は事實、即ち科學の材料を供給し、その材料は理性によつて整理され、統一的、一般的體系に造り上げられる。しかし感覺もまた認識すべき對象の外觀を吾々に媒介

するにすぎない。そこで吾々は更に對象の本質自體の中へ入り込む他の認識機能、精神的同化、即ち直観を使用する。——直観は精神の他のすべての機能と同様に過誤のない機能ではない。それは誤を犯すことがあり得る。即ち根本的には直観ではなくて、單に自己の空想の投射にすぎない或るものを直観と見做すといふやうなことが容易に起る。それ故に直観的に得られた洞察には合理的な再検討が加へられねばならぬ。この再検討の方法によれば、直観の機能そのものを訓練することも可能である。——良き實際家は彼の診断が彼の合理的研究方法よりは寧ろ直観的把握に負ふ場合が非常に屢々ある事を、常に知つてゐる。——と。ムラルトは醫學の根柢に直観的觀念主義を置かうとしてゐるのである。これは機械的方向に進むべき現代醫學の破壊です。しかも此傾向は益々強くなつてくるのです。A・シュトラッセルも言つてゐます。若し吾々が科學の進化とその社會への滲透を追求せんとするならば、科學的論證を承認せんとする意向が極度に動搖してゐること、教養が高くなるにつれて、空想を活潑に働かせることもまた優れてゐるやうな人民層が、正に奇蹟的現象を信じようとする大なる傾向を持つてゐること、また少し以前或はずつと以前に不可能とされてゐた無數の事物が後に眞實となつたといふ事實

によつてこの立脚地を理由づけようとする傾向を持つてゐることを、吾々は確認せねばならぬ。——と。これが神祕的民間療法が知識階級の人によつて、却つて求められてゐる理由です。醫學は、機械主義を根據に置かうとすれば、資本家を基礎として組上げられた、現代の醫師組織を崩壊するし、現代醫師組織を守らうとすると、神祕的觀念主義に逃避せねばならぬ状態におかれてゐるのです。しかしながら、私らの立場はどこ迄も、醫學の根本原理として、觀念でもなく、機械でもない、一の意志的事實を得なければならぬのです。觀念的醫學の根本原理は自然治癒の概念です。總ての民間療法は多少共に自然治癒の觀念によつてのみその成立が可能なのです。機械醫學の根本原理は、機械的處置の概念です。理化學的處置の理化學的完成のみが科學的治癒を完成すると云ふ確信は機械醫學の金科玉條です。私らの立場から申しますと、癒さんとする意志、生きんとする呼吸の自覺が、醫學の根本原理となるのであります。従つて心理的には意志を強くする治療、生理的には神經を強くする治療が、あらゆる治療を統合してゐなければなりません。吾々は精神療法や、又それに對立する處置療法を認めれば認める程、患者の自發的意志を中心とする中心的療法を守らなければならぬのです。而して意志は絶對

的な命令的な一つの力によつて統合されるのです。それは人格的な力であり、機械的立場と観念的立場を統合的に含んでゐるのです。個人的には呼吸がかかる統合作用を表してゐます。呼吸は一方に於ては精神を統一する意味で観念的であり、一方では神経を覚醒し血液の循環をよくし、身體的安静を與へる意味では機械的です。呼吸だけが、心身両面に作用しうる唯一の作用です。呼吸の自覺が總ての醫學、醫術の根本であります。病める人が一度呼吸に目覺めるならば、天命ならざる限り、既に回復の契機をつかんだのです。診断にあつても、呼吸の状態が最後のな意味をもつてゐます。呼吸は疾病の状態や、姿勢の採り方で、直ちに變化をして來まして、それに従つて精神状態に變化が起ります。又精神状態が變化するに従つて亦呼吸が變化して來ます。呼吸が精神と肉體を綜合する唯一の作用者です。呼吸に生きる事が、病氣回復の第一歩です。呼吸には先づ八つの作用があります。第一は呼吸の精力作用です。これは正しい中心を守る呼吸作用によつて吾々の體内の分泌物が、自然に醇化統一されて、臍下丹田の中心に集つてくるのです。これが吾々には精力として自覺されてくるのです。吾々の分泌液は、精妙たぐひなき靈藥でありまして、如何なる人工的な藥にも優つてゐます。甲状腺ホルモンは營

養の藥であり、大脳下垂體のホルモンは精力劑であります。松果腺ホルモンも營養劑であり、胸腺ホルモンも、迷走神経の興奮劑です。副腎ホルモンは交感神経の興奮劑であり、膵臓ホルモンは糖分の調節劑であります。睾丸、卵巣ホルモンは精力劑であり、唾液や、胃液、胆汁、腸液は如何なる高價な藥にも優る消化劑です。吾々の體内から出るこれらの藥は、總て深く長く靜かに、臍下丹田の中心に向ふ呼吸と共に、直接には横隔膜のマッサージ的壓力によつて、間接には血液循環の促進によつて増加し統一されるのです。更に、淋巴系統の統一によつて白血球が増強し、オプソニン、補體等が強化され、免疫質が出來て來るのです。かく血液や組織中に多くの藥が出る事は、疾病の回復に絶對必要であるのみならず、平時に於て、精力が増進し、精神的には愛情の増加となるのです。呼吸の第二の作用は新陳代謝作用の増強です。呼吸は、常に新しい酸素を體内に取り入れ、舊い炭酸瓦斯を體外に排出するのみならず、横隔膜のマッサージ的作用によつて、常に肝臓の硬變を防ぎ、従つて、肝臓が門脈から腹部内臓の古い血液を容れた場合の排毒、除毒の作用を促進し、又その古血球破壊作用を促進し、脾臓に働いては血球生成作用を促進し、腎臟膀胱に働いては、尿の排泄を促進し、深く長い呼吸と共に

に、皮膚の汗腺を開いて、汗の分泌を促し、又皮膚呼吸を促進し、腸に作用してはその吸收排泄作用を促進します。總て全身的新陳代謝の作用を促進するのであります。精神的には、分類整理等の場合に働く心性の活動は全くかかる新陳代謝作用と相應じてゐます。總て秩序を與へる作用、義理を重んずる心理はこれに相應じてゐます。總てよきものをどこ迄も留めて、悪いものを斥ける作用が新陳代謝の意味で、單なる交替作用は新陳代謝でありませぬ。呼吸の第3の作用は、血液循環作用の促進です。吸時に鳩尾をはり、呼時に鳩尾を落して、下腹に氣力を込めるやうな正しい中心的呼吸は、常に心臓を安泰ならしめますから血液循環作用を助けるのは申す迄ありませんが、更に横隔膜の緊張による腹壓の増加は、全身血液の二分の一を保つ有する腹部内臓の鬱血を散逸し、心臓への靜脈血の還流を助けますから、正しい呼吸は全身を非常にあたかにし、且つ心臓の搏動を極めて正確ならしめます。一方正しい呼吸は精神を統一して植物性神経の活動を活潑にしますから、自然と全身血管の伸縮運動を圓滑ならしめ、全身的に血液の循環をよくするのであります。正しい呼吸は如何なる温浴にも優つて吾々の身體に温かみを與へます。心理的には、氣魄を強くし氣合を與へるのであります。氣分を爽快にし

元氣を鼓舞するのであります。吾々が氣合を入れる時には自然と深い息をなし、殊に呼吸に力を入れて一時的に血液の循環をよくするのであります。呼吸の第四の作用は、活動力の増進であります。正しい呼吸は、吾々の體の屈伸を伴ひ、體の屈伸を漸次自由に致しますから、従つて全身的に筋肉の屈伸力が増進し、種々なる運動が極めて自在となつて参ります。總て自由自在な活潑な運動には正しく中心的な呼吸が大切でありまして、運動にはすべて呼吸があるなど申すのも、この間の消息をつたへてゐるのであります。正しい呼吸は丁度第十二胸椎の處を中心に、常に脊柱全體を動かしてゐますから、脊柱の弾力性が増進しまして、自然手足の關節も従つて自在になり、活潑な運動に最も適した體勢が自然に作られて來るのであります。如何に坐して動かぬ時も、正しい呼吸では脊柱だけは常に前後に動いてゐるのであります。心理的には宣傳傳道の力が増進致します。呼吸の第五の作用は、精神統一作用であります。昔から呼吸法が精神統一の助けに利用されたことはよく知られてゐますが、正しい呼吸で、血液の分配が統一されて來ますと、必要以上の血液が頭に上つたり、頭の鬱血が長く止る事はありません。常に新鮮な血液が頭に送られますから、頭の混亂が防がれます。吾々が考へがまとまらぬ時は必ず

息がつかまつてゐます。深く長く呼出す息と共に頭腦の爽快を感じます。惱める時の溜息はかかる作用が反射的に起る現象です。勿論吾々が心に何かの觀念を抱いて精神を統一する方法もあります。念佛とか題目によつて精神の統一を計り、或は公案によつて精神の統一を打開し、或は思索によつて統一を試み、或は無念無想とならうと努力することも宜しからうし、或は他からの暗示や説得を受けて精神統一に入つたり、或は瀧に打たれたり、斷食したり、難行苦行する方法もあるでせうし、武道の鍛錬によつて自然に精神統一に到るもよいでせうが、これらは何れも精神が肉體のどちらかに偏してゐます。吾々の求むる精神統一は肉體と精神に同時に統一を與へつつ、しかも、如何なる仕事をなす場合にも出来、難行苦行にならず、しかも枯木寒巖にもならず、簡易にしかも徹底的に精神統一が出来る方法でなければなりません。正しい呼吸の自覺は此點では理想的な精神統一法であります。呼吸の自覺は勉強をするときも、働く時も、遊ぶ時も、一寸もそれらを妨げず、むしろそのそれ々の動作を最も樂に、愉快に、有効になさしめるのに役立つのです。吾々は觀念的立場と唯物的立場の統合を、呼吸の自覺によつて體驗する事が出来るのであります。呼吸の第六の作用は、その沈静休養作用です。吾々

の活動力の根原としての呼吸の作用に就いては云ふ迄もありませんが、呼吸は、精神を統一すると共に、肉體を安靜ならしめ、營養の攝取を促進します。正しい呼吸は平安靜養のシンボルです。心の平和、肉體の平和は、自然と呼吸を穩かにしますが、反對におだやかな呼吸は心身を平靜に導くのです。正しい呼吸は疲勞の回復を速かならしめ、神經の力を最も早く回復するのであります。眠られぬ夜は、呼吸を正しく深くして、その自覺に安んずると自然に吸つてしまひます。眠れた時は仰臥して、靜かな呼吸に總てを任せると最も早く疲勞を回復致します。何事をするにも總てを呼吸に任せ、正しい息吹の道に於てするならば、最も疲勞が少いのです。特に病者は、何よりも正しい呼吸に總てを任せ切らねばなりません。呼吸の第七の作用は淨化作用です。正しい呼吸は心身を潔めます。正しい呼吸は炭酸瓦斯を出し汗を出し、全身的に排泄作用を促進します。精神的には懺悔反省の心を促進します。疲れや惱があれば涙となり、感激感謝の喜が身に充ちて來るのであります。神道のみそぎは實際水をあびるのですが、正しい呼吸は、その時々のみそぎです。心身共に清まつて行くのであります。たえざるみそぎこそ息吹の道であります。吾々は息吹の道に於て、常に反省し懺悔し、心身を潔めて行く事が出来

るのであります。病める人が正しい呼吸の道に入りますと、最初は皮膚から毒が分泌される結果、大變皮膚が臭くなります。肺の悪い人は息が臭くなります。腎臟膀胱の悪い人は特に小便が臭くなります。胃腸の悪い人は大便が臭くなります。眼の悪い人は涙や目やにがたくさん出て來ます。鼻の悪い人は臭い鼻汁がどん／＼出て來ます。耳の悪い人は、耳だれが出て來ます。頭の悪い人はあくびが出ます。神經衰弱の人が癒り始めると無暗と笑ひ出します。元氣の無かつた人も話好きになります。中毒した人は嘔吐します。悪人は懺悔し、我儘な人は反省を始めます。膽囊の悪い人はあつさりしたものが好きになつて來ます。全て正しい呼吸によつて心身が淨化される結果であります。呼吸の第八の作用はその意志の統率作用の増進です。正しい呼吸は以上の如くあらゆる心身の機能を統一する結果、吾々の意志の作用、神經の作用を増強するのであります。吾々の意志の作用は呼吸と共に發現します。強固なる意志必はず強い呼吸を伴ひます。弱い意志はいかに心で燃えてゐても肉體的表現との統一が執れません。正しい呼吸を伴はない意志は即ち單なる慾望となります。慾望と精力を統一し、志向と實現を綜合する働は正しい呼吸によつて現はれて來るのであります。而して呼吸の意志統率の作用が、總ての呼

吸の作用を統一するのであります。吾々を統一し、吾々をして直に生活せしめるものは、正しい呼吸による、正しい意志の發現であります。病める者にとつては、最も弱るのは意志力であり、神經力であります。この意志、神經を強めるのに最も役立つのは正しい呼吸であります。單なる肉體の緊張によつても意志力は出て來ません。單なる精神の力でも意志力は出て來ません。意志力は、精神と肉體を統合する正しい呼吸の内から創造されるのです。吾々の正しい意志は即ち正しい呼吸であると言つても良ろしいのであります。かくの如く正しい呼吸は吾々の意志の發動に缺く事が出來ないものでありますから、病める人は何よりも先づ呼吸を正す事に專一にならねばなりません。呼吸を正す事が出來ましたなら、或は少く共呼吸を正しくしようと努力しますならば、或は又只呼吸の正しさを意識しましたならば、既に回復の第一歩に向つたものであります。中心健康術の治療術におきましては、感應療法も整體療法も、氣合療法も、觸手療法も精神療法も、靜養療法も、淨化療法も、刺戟療法も、皆盡く一の正しい呼吸を求め、るための手段であります。中心健康術の八方法、即ち、正坐法、整體法、氣合法、運動法、觀念法、休養法、淨化法、刺戟法も、皆正しい呼吸を求め、る手段であります。正しい呼吸が、總

ての中心であります。更に中心生活法の八精神、即ち、忠愛、忠勇、忠信、忠敬、忠恕、忠節、忠誠も、貫くものは正しい強い中心的意志、即ち正しい中心呼吸であります。中心的な正しい呼吸とは中心の生理的言表なのであります。何卒貴方がかかる根本的な息吹の道に、中心健康術、中心治療術、中心生活法の八方法、八精神を統合されて、空間的には法の世界、時間的には神の世界を、時空一如の一息の内に統合されて、神即法、法即神の體驗の下に一切法、一切宗、一切教を、現實中心日本人の意識の内に、新しい生命の希望を確保して下さい。さうすれば、一息毎に、病者の惱はなくなるでせう。何となれば彼には大いなる中心がある故に、又立ち上つて下さい。立ち上つて下さい。吾々には息吹の大道がある。中心の道がある。日本教がある。吾等の任は重く道は遠いのです。病者が病床にさよならを告げる時、病者は立つて中心健康術の八方法、中心治療術の八法則、中心生活法の八精神をひつさけて、日本教の傳道に従つてもらはねばならないのです。私は病める人々に、絶對の希望と信を贈ります。病者は健康にならねばならないし、健康になり得るのです。どうか、熱誠を正しく用ひ、排泄に注意し、休養を忘れず、精神を統一し、合掌をおこたらず氣魄をたもちを姿勢に注意し、さうして精力

を守つて中心に統一して下さい。それには息吹の道が即ち一もつて貫く大道なることを忘れて下さい。そしてこれこそ新しい醫學の唯一眞道である事を知つて下さい。

第七章 平田式中心闘病法

病者は現代の醫學に就いて色々懷疑の氣持を持つに到る事があるやうですけれど、現代の醫學は長い年月の辛慘の結果自然に築き上げられたもので、人智の限りを盡し人力の精を集めたもので機械的には立派なものだと私は思ひます。それにも拘らず私は、單に懷疑に止らず、徹底的に現代醫學を否定するのは何故でありませうか。それは現代の西洋醫學と云ふものが、自然科學の立場に立つ時、言ひかへれば自然科學に興味を有するものにとつてのみ信頼し得る醫學であり、従つてその醫療の方法が専ら理化學的方法によつて病氣を癒さうとする爲に、經濟的に餘裕のある人以外には徹底的にその方法を採用出來ないと云ふ點を不満に思ふからであります。ですから、現代の醫學や醫者を信すれば信する程、現代の醫學は利用出來ない醫學なの

現代醫學
の否定

一つの別
問題

です。子宮癌の手術をしたい。しかし三百圓の手術料が要る。そして三百圓の金が無い。その時には現代の醫學を信するものこそ絶大の不幸ではありませんか。これは子供に菓子を見せびらかして、遂に菓子と與へないのと同様です。醫者は聲を大にして民間治療の如きものは總て迷信であると云つて攻撃します。しかし醫學がその絶大の効果を宣傳し乍ら、その利用を大衆に拒んでゐる限り、彼等の所謂迷信は根絶する事がないでせう。現代の醫學を信する事と現代の醫學を利用することとは、大衆にとつては全くの別問題なのです。しかしかかる經濟上の問題は醫學が國營にでもなれば或程度迄は解決するでせう。だがもつと根本的な問題は、現代の醫學は、その根柢の立場が機械的、觀念的である事です。しかし現代の醫學に於ても、神經病者に對しては、暗示とか精神分析とか、色々精神的な方法を用ひてゐるでないか、又醫師はその人格を修養して、大いに精神的な方面に注意をしてゐるではないかと云ふ人がありませう。だが、現代の醫師の用ひてゐる精神療法は、有閑婦人の慈善事業のやうなものです。物質的根柢に築き上げられた醫學の殿堂の單なる修飾として精神的方法を僅か許り利用してゐるに過ぎないので。決して辯證的方法を根本として物質力を利用すると云ふ人間的態度を採つてゐるの

では無いのです。現代の醫師は、人間の心性の根本に就いて、醫者の根本的態度に就いて徹底的の反省をしてゐるものは一人だつて無いのです。若しあれば現代の醫學を捨てる筈です。自然科學的醫學は、現代の醫師にとつては、寧ろ一つの信仰です。ですからその信仰に合しないものは總て彼等にとつては迷信なのです。かかる醫術への信仰が現代の數限りない悲惨な生活問題の一つの原因になつてゐるのです。又病氣を根本的に癒せない一つの原因になつてゐるのです。私らの治療に對する立場は、實踐的立場です。實踐的立場に立つて現代の醫學を利用して行かうとしてゐるのです。民間治療は、實踐的立場に立つ以外には、何らの意義も無いのです。民間治療が機械的立場を採る限り、それはどこ迄も醫學の奴婢です。奴婢的醫術に對しては大衆は何らの信頼も拂はなくなるのは當然です。だから民間治療はたとへ物理的方法を利用してゐるものでも、實踐的立場に置らねばならないのです。この立場を失へば最早如何に精巧な治療器を用ひても、その効果は減じます。鍼や灸や按摩のやうな漢方醫術が、その實踐的立場を失ふと共に、たちまち西洋醫學に蹂躪されたのは當然です。漢方醫學の機械的條件は、實踐的立場から利用されてゐる物質であつて、鍼も灸も藥も、皆實踐的に使役され綜合されて

その意味があるのです。故にこの立場が滅却すると共に、漢方醫學に於ける鍼灸按湯藥の意味は、實に僅少なものとなつてしまふのです。

私が色々申上げることも結局は此ための一つ暗示に過ぎないのです。説得に過ぎないのです。しかし私は、讀者が、私の誠意を信じ、私の與へる正しい暗示を受けて下さることを信じて私の信念を述べたいと思ひます。私は、精神が統一された状態を治療の根本として出發する醫學が唯一の正しい醫學である事を確信致します。しかし病者の心理は、一般に精神不統一の状態にあるのですから、精神不統一の状態を、精神統一の状態に導く道が考へられねばなりません。そのために宗教家は様々の苦心を致しました。念佛するものもその一つの道でせう。しかし諏訪二教氏によれば——如來の呼び聲は、先手の聲と云はれてをりますが、是れは空間的に、外の方で呼んでゐるものではありません。衆生の救濟主として、先驗的にある聲であります。それは其儘衆生の信心であり、廻向されたる佛心であります。其内には衆生を攝取してをります。大無量壽經は、それを現はしてをるのでありますから、阿彌陀如來とは、法身の光輪きはまりなき相であり、方便法身であり、客觀的には、歸命盡十方無碍光如來であり、南無不可思議光佛

であり、主観的には、衆生の信心であり、現實的には、法藏菩薩の本願であり、理想的には、報佛報土であります。だから、五劫思案も、永劫の修業も、單なる昔、何處かにあつたと云ふ様な、昔話ではありませぬ。私の樂な所へ行く手段として捉へる事の出來ぬものであります。それを知らずに、外的に手段として捉へて、その力に依つて、樂な所へ參れるが如くに信するならば、それは明らかに迷信であります。——従つて念佛の場合の佛も、結局は自己の意識の内に發見する他は無いのです。題目を稱へる時も同様です。法華經は即ち我心身也と覺した處に——南無妙法蓮華經——の題目を唱へる事に意味があるのです。題目を唱へたら病氣が癒る。病氣を癒す爲に題目を稱へるのではないのです。一念の内に三千世界を攝し、三千世界に一念を徹し、正法の國に佛教を擴めると云ふやうな立場からでなければ題目も亦無意味になります。基督教における神の信仰でも同様です。唯一在天の神に對して、基督の御名によつて祈れば如何なる病氣も癒ると信じて、神に祈るのは迷信です。既に印度にも、自在天と云ふ神に對する迷信があつて、此神には運命を支配する力があると信じ、これを恐れたり、これに祈つたりしたのであります。基督教の信仰も、自己の慾望を充す對象として取扱はれるならば

迷信になります。坐禪の如きものに到つては徹底的自己放棄の懸命の修業であります。坐禪で病氣を癒さう等と考へる事は、怪しからぬ外道の見とされてゐます。従つて吾々は病氣になつた時に、病氣を癒すために特にその手段として用ひ得べき宗教は一つも無いのであります。若しありとすれば迷信です。日本の神道の神に就いても同様です。此に病氣の治癒を祈願する如きは迷信であるのみならず、神を汚すものです。宮本武藏の如きも判然と——神佛を敬してこれに頼まず——と申してをります。しからば吾々が病める時に、頼り、祈り、總てを托して迷信にならず、しかも病氣を癒すと云ふ現實的效果をもたらす所のものは、この世界に一つも無いかと云ふと、さうではありません。只一つでございます。それは何かと云ふと、吾々の呼吸であります。吾々の呼吸は斷末魔の刹那迄、生きる限りは離れる事の出來ないものであります。勿論心臓の鼓動も死の刹那迄つづきます。しかし心臓の鼓動は吾々の意志とは直接は關係なく動いてゐるのです。息も無意識的にも出來ますが、心臓等と異つて、意志でその長短を支配し得るものです。少く共息を長くしよう、靜かにしようと努力する事は何人にも可能な事なのです。そして息を長く靜かに、深かするに従つて、吾々の精神は自然に統一して來

るのであります。精神が統一するに従つて、息は更に深く、長く、靜かにする事が容易となります。この二者は相據り相助けてゐるのです。吾々はこの息に頼り、息に任せて、専心一意、それが長く、靜かに、深く、身體の中心に迄徹る氣持で努めてゐると精神も身體も次第に安靜になつて來るのです。しかし吾々は之を苦行としてなさんとするものではありません。特に貴方が、一つの修行、苦行として息を考へるなら百害あつて一利なき結果に達するであらませう。吾々は、吾々の慾望や惱や苦痛を一つとして無視したくないのです。只之を統一し之を鎮める最も自然で安樂な方法として息に總てを任せてしまふのです。息は吾々が苦しむ時も惱む時もしなければならぬものです。ですから苦や惱へふり向ける意識を息に向けるだけなのです。その時苦や惱は最小限度に止るに到るのです。吾々の慾望は、あるが儘に自然に統一して來るのです。その時こそ、念佛の意味も分れば、題目の意義も感ぜられ、祈の氣持も湧き、懺悔感謝の體感が顯れて來るのであります。息こそ吾々の生命の代表者なのです。息だけが身體を精神に結び、精神を身體に連ねる中心者です。罪も惱も息に任せる事が最も近い解決法です。我が精神を統一し、我が身體を回復し、我一脈の氣合を與へるものは即ち息です。息に生きる時に始

めて心は統一し、感謝と懺悔の感は自然に湧き、家族への愛と懺悔、社會、國家への愛と誓、天皇陛下に對する忠愛と忠節の感激が湧いて來ます。ここに自己の重責を感じ生命の意義を見出し、進んで神への貞愛、法への信愛の情も亦湧然として顯はれて來ます。かくて利用される醫學は最早冷い物質的條件ではなくなるのです。息に生きる事こそ闢病眞道たるのみならず、生命眞道であります。念佛を選ぶべきか、題目を選ぶべきか、祈るべきか、考へるべきか等の迷は一切消えて親鸞が自分のための念佛よりも國家のために念佛することが喜しいと言つた意味や、日蓮がわれ日本の柱石とならんと云つた意味や、白隱が病床をもつて禪の大道場と云つた意味や、基督が——御心の天に成る如く地にもならせ給へ——と云つた意味が有難く分つて來るのです。神道の眞の道の體驗も病床に於て初めて分つて來るのです。一切の宗教の語録や先哲の言を讀んでも、それは最早吾々を強迫觀念に引き入れる材料とはならずして、無限の安心を與へて呉れる糧となるのです。吾々は病床に於て、徳を樂しみ、忠愛と忠義と忠勇と忠信と忠敬と忠恕と忠節と忠誠を一切のものに捧げることが出来るやうになるのです。そして又、忠愛の心は吾々の性慾を晶華し、醇化し、淨化し、精力を徐々に増進してくれま

は吾々の姿勢を自ら正しくし、病床を整へ、威力を與へてくれます。忠勇の心は吾々に氣合を充たしめ、心臟の力を増してくれます。忠信の心は吾々に活動力を與へ、營養をよくしてくれます。忠敬の心は吾々の精神を整へ、益々強迫觀念を除去して呉れます。忠恕の心は吾々に愈徹底的の休養を與へ、消化作用を促進してくれます。忠節の心は懺悔の心に通じ、懺悔の心は吾々の排泄作用を促して、涙や汗や、大小便を通じ、心身の毒を體外に出してくれます。吾々の口からは喜と感謝の言葉を出してくれます。忠誠の心は吾々の意志を強くし、神經を覺醒し、刺戟を受ける力を與へてくれます。そして之等の力は總て一つの中心に纏つて來ます。この中心は、正しい呼吸と共に益々判然と顯れて來るものです。吾々の身體の中心は臍下丹田にあります。正しい呼吸は吸ふ時には鳩尾と臍の間をふくらませ、吐く時はこの部を落して下腹に氣力を満たしてくれます。貴方のやうに衰弱の甚しい人は、最初からかかる正しい呼吸は出來ないと思ひますが、息を愛し、息に生きる氣持になつて、何をするにも息に注意し、息に任せてゐますと、自然に呼吸が中心にまとまつて來ます。自然に肩先で息する事を止めて、肺底で息するやうになります。肺は丁度ふいごのやうな形をしてゐますから、丁度ふいごを動

かすやうに、底の方を開いたり縮めたりするのが、一番多く空氣を入れ、一番多く炭酸瓦斯を出す事が出来るわけです。鳩尾の處を吸ふ時に張るのは肺底を擴げるためです。呼時に鳩尾を落すのは肺底を縮めるためです。しかし最初は吐く時に下腹に力を入れないで宜しいのです。下腹の力は貴方が回復するに従つて自然には入つて來ます。無理に下腹に力を入れて、息を止める事は大變いけない事です。總て自然に徐々に進んで行くのが一番宜しい。エマソンは——自然の緩慢——と云ふ事を言ひましたね。吾々は急いではいけないのです。急ぐよりは息に任せ、只々息を長く、深く、靜かに、止めずにする事に努力すれば善いのです。努力と云ふのが誤解されるなら、只息を念じ、息を意識すればよいのです。息が總てを解決してくれます。貴方は自然に枕なしに仰臥し、兩手を左右に開き、兩足先を左右に倒し、頤を少し上にあけて所謂自然體の寢方が一番樂である事を發見して來るでせう。しかし之も無理になさつてはいけません。自然にさうなつて來ると申すのです。息が長く深くなるに従つて、貴方の肩の凝が取れ、手足の冷えるのが癒えて來るでせう。そして或は少し汗をかいてくるのです。その時乾はいたタオルでよく拭き取つて下さい。汗から貴方の病毒が出て行くのです。大小便が良く出る

やうになり、便は色が黒く著しく臭氣を帯びて来るでせう。これも病毒が排泄されるのです。熱は下つてくるでせう。かうなつては益々貴方は息を愛してくるに違ひありません。そして幾らかの刺戟を手足に與へてもよいやうになり、關節を靜かに動かす位の運動をしても差支へないやうになるでせう。しかし急いではありません。益々息を深くし長くして、規則正しい生活に入つて下さい。さうすれば貴方には必ず治ると云ふ確信がきつと持てるやうになります。それのみでなく、貴方は病氣になつた事を却つて感謝する事が出来るのです。息と云ふ現實の内に一方には精神の無限の世界に於て、神と法との世界を見出し、唯一の天帝と、それから連綿とつづいた生命の連続、別して、その中心が連続した日本の天皇陛下の現神の意味が分つてくるでせう。——大君の御楯とならむ身にあれば鍛へざらめや磨かざらめや——と言つた乃木さんの心持が分つてくるでせう。そして更に、唯一中心の神とその連続としての現神を中心として展開する法の世界の莊嚴に驚き且つ喜ぶ事が出来るに違ひありません。この法の世界を弱い哀れな人々の總てに迄展開した法然や親鸞の深い愛、この法の世界を、中心神とその連続としての現神の國、日本に、しつかりと判然と結びつけてくれた日蓮の明智とその行爲力に魂を

打たれ、そして又唯一中心神の深い意味を身を棄てて明かにしてくれた基督の愛に涙し、又その法の體驗を傳へ傳へた禪宗の祖師達の自己内省、自己開發の驚嘆すべき努力が、ひしと貴方自身が息に生きる努力の内に連り、釋迦が言つた法の不滅が無言の内に貴方の心身に相續されて行くのを體驗出来るでせう。そして貴方が六尺の病床の内にあつて、忠愛、忠義、忠勇、忠信、忠敬、忠恕、忠節、忠誠を一切に捧げる事が可能であり、孔子の修身齊家、治國平天下の理想が無幻的體驗でない事が分るでせう。綿々たる息の内に、貴方の智慧は自然に開けて、眞理に殉じたソクラテス、理想國を觀じたプラトリーの心が、書物とは違つてひしと心の内に握手をするでせう。病者はその時こそ最も痛切に、切實に日本の尊い國民である事を感じ、感謝と驚喜との統一された感じに満されるでせう。神は時間を通じて空間の法に擴がり法は空間を通じて神に連り、自己は時空を絶して只息に生きる事を覺して、吾々は病床に於て生甲斐を見出します。此息の自覺の體驗は、私自らが病床に於てしなければならなかつたものです。それだから、これこそ貴方の魂に、最も強く響く事を私は知つてゐるのです。でも、一方では性慾の惱、義理の苦、憤激の心、宣傳慾、哲學的懷疑、消極退嬰の弱い心、歡樂を追ふ惰心、剛情

我慢の心も亦負けずおとらす湧き起るでせう。それでも貴方が息に生きる事を忘れなかつたならば、醜い心の様々な姿が、易のあらゆる卦、あらゆる象のやうに、整然と整理分類されて、その煩惱がその儘に、中心へ中心へと統一されて行くでせう。その時の心境は一點老莊の無に通じた氣持でもあるでせう。そしてその時息に生きる事は王陽明の所謂——安靜の工夫として働いて來ます。——山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し——心腸の冠を掃蕩し、以て廓清平定の功を收めば之れ誠に大丈夫不出世の偉績なり——と彼自らも言つてゐます。煩惱のあらはれる事は、心が澄むに従つて判然して來ます。そして益々息に徹すると、益々それは涙となつて流れて行くのです。潜然たる涙の有難さは息に生きる時に分るのです。息に生きる時にこそ、古今の聖賢は一所に融合相和して、その一言一句は吾々の心身の滋養となり、又心身の鞭となり、心は益々安く、身は益々力づいて來るのです。文字にあらはれた處に執すると、空しく吾々を強迫し、却つて吾々の迷の種となる諸種雑多と見える思想、哲學、宗教は息の一念、生きる一念に、整然と統一され、燦然と光り輝き、總ての煩惱を具備した吾々の心身の内を貫いて、吾々が悪ければ悪い程、弱ければ弱い程、一層美しく、一層痛切に吾々を包むので

す。息、これをこそ吾々は否定出來ませぬ。息、これをこそ吾々は離れることが出來ぬのです。息こそ、吾々の醜い現實的慾望を満しつつ、却つて精神の統一を來し、無限の法神を、吾が中心に示してくれるのです。吾々はここにこそ、物質と精神を共に満足せしめるやうに見せかけつつ、遂に吾々を精神界に入れ終るものを觀るのです。私は世の病者が私の荒々しく到らない敘述の内に、それでも只一つの言ひたい事は悟つて下さつたと思ひます。私は病者の回復を祈ると云ふよりも信じてゐるのです。しかしその回復は必ずしも肉體の回復ではありません。肉體のみを回復しようとしても、それは人間には絶對に出來ぬことです。病者が人間である限り出來ぬ事です。どうか病める朋よ、醫者の奴婢となる前に醫者をこそ貴方の奴婢として下さい。

第八章 平田式中心靜養法

彼が眠に就く時は、

この一切を藏せる世界より原素を採取して、

自己の光輝により、自己の光明により

自らこれを破壊し

自らこれを建設しつつ眠れり、

かかる時はこの我は、

自己の光に依て存在せるものなり。(ウバニシヤド)

病める人々にとつては、如何にしても疾病を癒し、如何にしても病苦を耐へ、如何にして病に打勝つて己が本務を果し、如何にして病を機縁きえんとして道に進むべきかと云ふことが最も實切なる現實の問題です。而してこれには兩方面から答へる事が出来ます。機械的方面から言へば、

苦痛の忍
受

科學的諸
療法

此際は迷ふ事なく、最新科學の示す處の科學的治療法を受けるが宜しい。最新醫學は、只に自然科學的立場に於てのみならず、心理學的立場から言へば尙更、刺戟療法をもつて、最も新しい治療法と認めてゐます。而してかかる刺戟療法の一つとしてあらはれたのが、熱鍼療法です。熱鍼療法は最も新しい科學の尖端に於て、最も新しい醫學として其任務を盡してゐます。しかも醫學の進歩の極は、その方法は簡單を極めて、總ての家庭で行へるやうになつたのです。この事は、醫學に寄生して生活してゐる現代の醫商に對する痛手ですが、それと反對に大衆にとつては福音でありました。だがこれは、刺戟療法たる限り、その効果には、一定の限界があり又、疾病治癒の途みちの一面に止ります。心的方面から見ると、患者自身の精神一到による靜養内觀ないくわんがなければ、完全なる成果は期し得ないのみならず、刺戟療法の限界を超えた患者に對しては、治療の道が無いことになります。又刺戟療法の限界内に於ける患者であつても、内に徹透てうてうした精神の一到と、内觀靜養が無ければ、刺戟療法の成果を擧げる事が出来ません。即ち刺戟は只安靜といふ條件があつて、始めて成立するものであるからです。さて靜養内觀の道は、特に東洋で古來から發達してゐるものです。佛教における坐禪、儒教に於ける靜坐、武道に於け

る自然體は、かかる内観静養と相通する點が多いのであります。以下少しく、これら各方面の文獻を抄出し乍ら、内観静養の道を學びたいと思ひます。醫學博士田澤鏞二氏は、その「結核豫防對策」に於て曰く「結核患者は凡ての患者の中で最も取扱ひの六かしいものと思ひます。其の理由の一、二を申しますと、第一には治療の上から言つても、其の方法の一定して居る病氣とは違つて、各般の技術方法に通曉してゐて、患者々々に従つて適當に考慮せねばなりません。其の第一として精神、身體の安靜が必要であります。安靜と一口に言へばそれまでであります。實際に其の仕事に當つて成績を挙げようと思へば、随分これだけでも六かしい仕事であります。人に精神、身體の安靜を與へるためには、自分はどんな状態の時でも氣持良く最善の努力をせねばなりません。」と。又氏は「……講習會とでも言へば是非力を盡さねばならぬ項目の一つは精神教育であります。殊に看護婦に於てはさうであります。」とも言つてをられます。只に肺結核に止らず總ての病氣に就いて、この注意が必要です。そして静養には必ず内観を伴ひ内観には正しい姿勢と正しい呼吸を伴ふべきものであることを繰り返して言つておきたいのです。内観と呼吸の關係は、古代印度における瑜伽に於ても觀られます。瑜伽では Prānyāna 即

ち調息を重んじました。ヨーガ・チューダーマニ・ウバニシヤドの一〇三節に曰く、「呼吸の動搖するかぎり、點識また動搖す。呼吸靜止せば、點識また靜止せん。」と。瑜伽によれば呼吸には三つの相があります。滿相(吸滿相、Puraka)虚相(呼出相、Recaka)、瓶相(止息法相 Kumhaka)です。この三相を貫くものを聖音オーム(Om)と考へました。即ち曰く「かの唵なるものあり。而して調息はそれより成れりと謂はる。」と。又曰く、「それ等は有節音の性質を有す。それ故に調息法こそプラナヅ(Prāṇava、聖音なり)と。更に呼吸と精神の關係を述べて曰く、「かく調息は罪のものゆることを停むる淨化なり。」(ヨーガ・チューダーマニ・ウバニシヤド)と。又正しい姿勢に就いては、「坐法は確乎として安靜なるを要す。」(ヨーガ・スートラ、第二品、四六)と述べ、坐を整へ、息を整へ、意を制し了つて、純粹瑜伽行に入ると信じました。そして「内面的最高眞理に對して靜慮を行ふとき、未開展の智慧は開展の状態に達する。」(マイトラヤナ・ウバニシヤド)のです。かくの如く呼吸と精神統一との關係を認めたのは、只に印度だけでなく、支那の道教にも此思想がありました。黃庭經には「呼吸元氣以て仙を求む。」と云つてゐます。覺元子は「務めて神を凝らし、息を調へ、橐籥をして風を鼓せしむるを要す。」と言つてゐます。又

姿勢を正すことに就いては禪に於ても第一に之を説いてゐます。正法眼藏坐禪儀に曰く、「正身端坐すべし、左へそばたち、右へ傾き、前にくまうしろに仰ぐことなかれ。必ず耳と肩と對し、鼻と臍と對すべし。舌はかみの脛にかくべし。息は鼻より通すべし。唇齒あひつくべし。目は開すべし。不張不微なるべし。此の如く心身をととのへて缺氣一息あるべし。兀々と坐定して、思量箇不思量底なり。不思量底如何思量。これ非思量なり。これ即ち坐禪の法術なり。坐禪は習禪にあらず。大安樂の法門なり。不染汚の修證なり。」と。又指月禪師(享保元文頃)は曰く、「總て動く事なく、聲を立てず、鼻を鳴さず、口を鳴らし動かさず、寂然として龍の蟠りたるが如く、唯だ靜かなるを善しとす。時に於て心に一切を思はず、兀々として總て不生不死の境界に入り、不思議なるべし。正坐禪の大方に傳へて正義とするは是なり。坐禪は他の道路すべてなし。此の生死の人にして生死の關を超え、寂靜の形にして寂靜に沈まず、世にあれども、三世の分別なし。若し能く此處を知る時は萬衆のうち獨露身といふべし。」と。かく精神統一と呼吸と姿勢は、密接なる關係あるものと觀られてゐたのですが、其他にも呼吸と姿勢を正すことを縁とした精神統一法が色々な形に於て傳へられてゐます。天台の繫緣内觀といふのも、

又一種の調氣法です。小止觀に曰く「若し能く觀想を善用すれば、十二種の息を運作し、能く衆病を治す。一には上息、二には下息、三には滿息、四には焦息、五には增長息、六には滅壞息、七には煖息、八には冷息、九には衝息、十には持息、十一には和息、十二には補息。」と。そしてかかる止觀の効果として傳へられる處によると、次のやうな話があります。支那の隨の世の、仙人張果が、陳箴の容貌を相して、斯年ならずして死することを豫言しました。陳箴は憂へて、弟である天台山の智顛禪師に諮りました。禪師は「お前の耳目口鼻の外慾を絶つて、食、眠、體、息、心の五事を調和し、行住坐臥に止觀の法を修せよ。然らば壽命を延し得ん。」と云つたのです。陳箴は大に悦んで、これを實行しました。數月の後、張果が彼に會つて、再びその容貌を見て驚いて曰く、「不思議だ。天壽の相は消えて、長壽の相となつてゐる。」と。隣箴は以後十五年生きのびて端坐の儘、病無くして歿したと云ひます。壽世保元の「呼吸靜功妙訣」に曰く、「……靜室の中に於て、厚褥を榻上に鋪き、盤脚大坐し、目を瞑き、臍を視、綿を以て肉を塞ぎ、心に念慮を絶ち、意を以て呼吸に隨ひ、一往一來心腎の間に上下し、亟かにすることなかれ、徐かにすることなかれ。其の自然に任せよ。坐ること一炷香の後、口鼻の氣出

入なきに似たるを覺得せん。然して後、緩かに脚を伸べ、目を開き、耳の寒きを去り、榻を下りて行くこと數歩し、又榻上に偃臥し、少く睡り、片時に起き來て淡粥半碗を啜る。勞を作し惱怒して以て靜功を損すべからず。毎日能く心を専らにし、法に依て之を行はば、兩月の後自ら功效を見ん」と。道家の「攝生調氣法」に曰く、「……先づ氣を閉すことを習へ。鼻を以て吸入し、漸々に腹に滿て、乃ち之を閉せ。久うして忍ぶべからざれば、乃ち口より細かに吐出し一呼して即ち盡すべからず、氣定まつて復た前の如く之れを閉づ。始めて十息或は二十息。忍ぶべからざるも、漸く熟して漸く多し。但だ能く閉づること七八十息以上に到れば、則ち臟腑、胸隔の間皆清氣の布護あらん。純熟するに至ては、其の氣閉づるの時に當つて、鼻中惟だ短息一寸餘あり、閉づる所の氣中に在ること、火の肺宮を蒸し潤ほすが如し、一たび縦てば、則ち身は委悅することけん。神身外に在りて、其の快其の美言ふべからざるの狀あらん。蓋し一氣流通して表裏上下徹澤するが故なり。其の閉づる所の氣漸く消ゆれば、則ち恍然として舊に復る。此の道多きを以て貴しと爲し、久しきを以て功となす。但だ能く日夜の間に於て、此の一兩度を得れば、久々に耳目聰明、精神完固に、體健かに身軽くして百病消滅せん」と。又「蘇

氏養生訣」に曰く、「……息を閉ち想心す。炎光光明洞徹して下、丹田に入ること爲す。腹滿ち氣極るを待ちて、則ち徐く氣を出せ。耳をして聞かしむることを得ざれ」と。和神導氣の法に曰く、「……心氣を胸隔の中に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて、動かざる事、三百息を経て、耳聞く所なく、目見る所なく、斯の如くなるときは、寒暑も侵す事能はず、蜂蟻も毒すること能はず。……」と。蘇内翰曰く「……此身兀然として此の心寂然たる事虚空と等し。此の如くなる事久くして一息おのづから止まり出でず、入らざる時、此息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此時人に尋ねて路頭を指すことを用ゐず。只要す、尋常言語を省略して、爾の元氣を長養せんことを。是の故に云ふ。目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に黙す」と。

又佐藤一齋は、靜坐の功を言つて曰く「靜坐の功は定氣凝神以て小學一段の工夫を補ふにあり。要は須らく氣容肅、口容止、頭容直、手容恭、神を背に接せしめ、儼然として敬を持し、就て自から胸中多少の雜念、客慮、貨色、名利等、病根の伏藏を擯出し、以て之を掃蕩すべし。

然らずんば徒爾のみ。兀坐瞑目、頑空を養成するが如きは、定氣凝神に似たりといへども抑々
 竟に何の養かあらん。」と。宗某曰く「無事省縁、靜坐體究す。」と。しかし朱无、徳に答ふる書
 中には坐禪との差違を云つて曰く、「明道は人を教へて靜坐せしむ。蓋し是の時諸人相従うて只
 だ學中に在て甚の外事なきが爲に、故に之を教ふることに此の如し。今若し無事なれば、固より
 是れ只た靜坐を得よ。若し特地に靜坐を以て一件の工夫と做すときは、則ち却て是れ釋氏が坐
 禪のみ。但だ只だ一の敬字を着けて動靜を通貫すれば、自ら間斷なし。此の如く分別するを須
 ひざるなり。」と。しかし眞の禪も亦必ずして坐禪を習禪するものでない。坐禪必ずしも山水を
 用ひずして、行住坐臥を問はず動靜の別を立てないのです。周子曰く「欲なし。故に靜。」と。活
 動も遊戯三昧に入れば亦靜です。陸象山曰く「精神は全く内に在ることを要す。外に在ること
 を要せず。若し外に在れば、一生是なる處なし。人の精神外にあれば、死に至り、また勞擾す。
 須らく收拾して主宰と作さしむべし。精神を收得して内に在る時は、當さに惻隱すべくば即ち
 惻隱すべし。當さに羞惡すべくば即ち羞惡す。誰か憫を欺き得ん。誰か憫を瞞し得ん。端的を
 見得して後、常に涵養する。是れ甚の次第ぞや。」と。傳習錄に曰く「九川問ふ。近年泛濫の學

を厭ふに因て、毎に靜坐して念慮を屏息するを求むるを要す。唯だに能はざるのみにあらず。
 愈々擾々を覺ゆ。如何。先生曰く、念、如何ぞ息むべけん。只だ是れ正なるを要す。曰く、當
 さに自ら念なきの時あるべきや否や。先生曰く、實に念なきの時なし。曰く、此の如くば、却
 て如何か靜を言ふ。曰く、靜は未だ嘗て靜ならずんばあらず。動は未だ嘗て靜ならずんばあ
 らず。戒謹恐懼即ち是れ念。何ぞ動靜を分たん。曰く、周子何を以て之を定むるに、中正仁義を
 以て靜を主とすると言ふか。曰く、欲なし。故に靜と。是れ靜も亦定。動も亦定の定子は其
 の本體を主とする也。戒懼の念。是れ活潑々地。之れ是の天機息まざる處、所謂、惟れ天の命
 於穆として已まざるのみ。一たび息めば便ち是れ死。本體の念にあらず。即ち是れ私念なり。
 と。これ即ち眞の安靜は形態の動靜を次とし、本態寂然として一切の形を通ずるを云ふのです。
 易經に曰く、「易は思ふこと无きなり。爲すこと无きなり。寂然として動かす。感じて遂に天下
 の故に通ず。」と。これ即ち靜の大極です。しかもこの靜は無限の展開と活動を中に含む處の靜
 です。故に老子第五章に曰く、「天地の間は其れ猶ほ橐籥の如きか。虚にして屈せず、動いて愈
 愈出づ。多く言へば數々窮す。中を守るに如かず。」と。「大學」に於てもその卷頭に於て、靜は

静のための静ならざるを明らかにして曰く、「……止るを知りて后定まる有り。定まりて后能く静に、静にして后能く安し。安くして后能く慮る。慮りて后能く得。物に本末あり。事に終始あり。先後する所を知れば則ち道に近し。」と。しかも此の道たるや病を癒さんが爲に、苦痛を逃れんがためにと云ふやうな、局限された目的意識で求むべきものではありません。中庸に曰く、「天の命する之れを性と謂ひ、性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを教と謂ふ。道なる者は、須臾も離る可からず。離る可きは道に非ざるなり。」と。中庸には又曰く「喜怒哀樂の未だ發せざるを之中と謂ひ、發して皆節に中る之を和と謂ふ。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。」と。即ち姿勢を正し呼吸を正して中心に心身を統一して行けば期せずして、無限の展開が起るのです。かくて易の下傳第五章には曰く、「天下何をか思ひ、何をか慮らん。」と。總ての物は正しい呼吸と正しい姿勢によつて皆中心に還り又中心から發して行く。老子第十五章に曰く、「夫れ物芸芸たるも各其の根に歸ると。」又易の上傳第一章に曰く、「易簡にして天下の理を得べし。」と。しかもこの境たるや老子の所謂「惟恍惟惚。」です。遊戯三昧です。擴ぐれば六合にあまねく、藏れば、一に入るの

であります。易の上傳第六章に曰く、「夫れ易は廣く大なり。以て遠きを言ふときは即ち禦がず。以て邇きを言ふときは則ち靜にして正し。以て天地の間を言ふときは則ち備る。」と。老子第三十二章にも曰く、「道は常に無爲にして爲さざるなし。」と。平野元良は天保の醫師ですが、彼も此の道を述べて曰く、「體容を正して後に氣息を調和せよといふは、周身の氣息を臍下充實して、其の四肢を輕虚にし、頭面肩背、胸、腹、四肢に毫も氣の凝滯る所なく、物を提ぐるにも、事を行ふにも、すべて臍下の力を用ゐるやうにせんとの教なり。この臍輪以下丹田の地は、人身の正中にて、肢體を運用する所の樞紐なり。上は鼻と相應じて天地間の大氣を鼻よりして吐調し、その外氣を此の丹田より周身へ普達せしめて、内外一貫になりて、生命を有つところの根本なればなり。故に婦人の懷孕するも、又その種子をここに生育す。又兒の子宮中に住るや、……被膜裏より母の丹田と通應し、おのづから外氣を感得す。これ天賦の妙機なり。それ日月星辰の中天に繋るも、地界の萬物を載せて重しとせざるも、悉く皆その樞軸の運轉あるによつてなり。人も亦かくの如く、身體を運轉すべき大氣を、この中心の丹田より輸びて、上下左右平等にして周遍きときには自ら天賦の機關に合ふが故に、求めずして不可思議の妙用を具へ、

變化自在の徳を有つにも至るべし。若し然るときには、心に憂愁憤怒の惱みもなく、樂境に係りて樂に着せず、かかるを天地と其の徳を同くし、日月と其の明を合するものといふべきなり。……今近く人身の中心は臍より下、膀胱より上、腰膠と小腹の間、所謂丹田の地にあることを験せんに、假令ば背に重きを負へば、體は必ず前に屈み、前に物を提ぐれば、背は必ず後へ仰ぐ。右に挈くれば左に傾き、左に提ぐれば右に傾く。この抵對は、必ずその物の輕重に従ひ、前後左右の重力に任せて、其の中心を擗ゆること、たとへば、稱錘を以て秤衡を平等にするが如く其の身體の仆れざるやうに、心なくして、おのづから、かくするは、地界の中心より人身の中心をさし貫きたる直線を外づることなきやうにとの天賦の妙機に由つてなり。今體容呼吸を調ふるは、偏にこの中心を身體の樞軸になして、上下前後左右平等に一氣の命令よく行渡りて、動靜云爲、自ら過不及の差なから過不及の差なからしめんが爲なり。然るを若し之に反きて身體に偏倚なる所あれば、其の偏倚に従て病苦となる也。今之は衆人に試むるに、小腹臍下充實し、大腹に支結痞癥なき者は、無病なるのみならず、精神よく安定して仁義の道を志し、決斷必ずよきものなり。又胸脇支癥、心下中脘の邊、壅塞り、臍下に力なきものは、必ず宿疾あり

りて且つ治し難く、其の思慮定らまず、愚癡蒙昧にして毎事依樣模倣、動もすれば耳目の慾に惑ひ易く、飲食も又停滯がちにて、多くは天壽を全うすること能はず。たとへ偶々壽を得たるも、老耄して事用に立ち難き者多し。と。彼は更に進んで心身の統一を計り又これをもつて豫防醫學として用ひることに意を注いで曰く、「……續いて心を調ふることを學ぶべし。これ放散する氣を收めて身内に充實せしめ、心意和靜安定して、妄りに外物の爲に昧まされ、轉倒することなからしめんが爲なり。總て人の體は上部輕清に、下部寛裕なれば、必ず壯健にして病なく、假令外襲邪毒の侵却ありとも、多く大患に至らずして平治すべき分なれども、平素この心の攝録がたく、轉倒するによりて、漸に胸腹を上のかたへ導引して諸臟の位置あしくなり、固癥を結成し、拘急を作發し、經脉上部に逆流し易きが故に、藥石の力及ばざるにもいたるなり。……抑々この心を轉倒せしむる起源は、かの貧欲の念相續いで止まず、求るに苦み、得るときに怖れ、失へば瞋り、一切心を惱ましむるにあらざるものなく、日を逐ひ、年を経るに従ひて昏闇になりゆき、調和せざるに至れば、漸に飲食の消化を礙け、氣血の運輸遲慢となるが故に吾が一身を主宰する所の元氣其の職を失ひ、内の守固からず、外を防ぐ力微くなりて、外襲邪

毒その隙を伺ひ易し。加之悞熱、曠沮、執拗、疎放、相繼ぎて斷えざるに至れば、之を己が性格なりと自ら裁量して、放肆なるが故に、癩癖、失治、疾痼、其根を固くして、いかなる治術も效を奏することなきに至るなり。」と。靜養の眞義は、體、息、心の一致にあるのです。而して體と心をつなぐものが氣であり、氣を統一するものが息です。佚齋樗山曰く、「夫れ心を載せて形を御するものは氣なり。故に一身の用は全く氣之を掌どる。氣の靈之を心といふ。天理を具へて此氣に主たるものなり。心體もと形聲色臭なし。氣に乗じて用をなすものなり。上下に通する者は氣なり。思惟往來する、之を念といふ。心感のままにうごいて、自性の天則に率ふときは、靈明始終を貫いて、氣の妄動なし。たとへば、舟の流れに従ひて下るが如し。動といへども舟靜かにして動の跡なし。之を動いて動なしといふ。凡人は生死の迷根いまだ斷せず。常に隱伏して靈明の蓋となるが故に、喜怒哀樂未發の時は、頑空にして濁水を湛へたるが如し。一念僅かに動く時は、かの隱伏の者起り、情慾妄動して、我が良心に迫る。洪水に逆上つて舟を棹すが如し。波あらく舟動いて、内安きことなし。氣妄動する時は應用自在ならず。」と。名醫曲直瀬道三曰く、「浩然の氣。氣をウツカリ持つは氣拔の元ちやぞ。天の行くこと健なり。其

氣をうけて居る人間。ウツカリとせぬものぢや。老人は猶以てぢやぞ。これは氣を張ることではない。張ればあとが抜け殻になり、草臥れるなり。氣のつかへぬやうにすることぢや。欲心あるゆる氣がつかゆるじ。能く工夫すべし。浩然の氣を養ふといふこと肝要ぢや。是は恥かしといふことをせぬことぢや。恥づることあれば、氣がじて浩然とならぬなり。浩然なれば頭上より手足のさきまで、一倍に氣が満ちてあるなり。」と。彼は又英氣を養ふ道を示して曰く、「殿中、途中にて寒暑にあはば、まけぬやうにすべし。いかにも氣を張りかけ、丹田へおさめ、必ずすくむべからず。肩をゆるりともちて、腰に力を入れて、踵をふみつけ寒風など靜かに歩むべし。少しもまくと、氣かじて暑にも寒にもあたる。」と。又曰く「閉居歩行も、心を舉丸の内に收め、氣を舉丸の蓋にする」と修し習ふべし。歩むにも是なり。さて腰と足のかかたにて歩むべし。足にてありくべからず。シャン／＼と爪先をうけて歩むべし。」と。彼は又不眠症の人のために説いて曰く、「臥すときは寢入る三昧になるべし。修すればなるなり。難念雜慮はいふに及ばず、善事をも寢て思ふは悪し。寢られずば、息をかぞへならふべし。一より十、又一より十と數へる。もし強くねられずば、起きて居るべし。ウツラ／＼とするより、

寝ぬ方くすりなり。」と。又雑念を拂ふ方法を説いて曰く、「閑居の時、雑念雑慮を拂ふべし。さいへばウカリとする。ウカリとするは氣ぬけてあし。調息三昧か。詩歌三昧か。佛名三昧か。何ぞ箇やうの事あるべし。兩居士(柳生及び梅窓居士)の劍道工夫、武學工夫、此三昧よし。向後雑念を混へめされな。」と。享保の學者佚齋橋山の「收氣の術」といふのも矢張姿勢と呼吸の整正から靜養内觀の道を説いてゐます。曰く「先づ仰のけに寝て、肩を崩し、胸と肩とを左右へ開き、手足を心のままに伸べ、手を臍の邊り虚缺の所に置き、悠々として萬慮を忘れ、とやかくと心を用ゐることなく、氣の滞りを解き、氣を引き下げ、指の先までも氣の往わたるやうに氣を總身に充たしめ、禪家の數息觀の如く、呼吸の息を數へ居るに、初の内は呼吸あらしきのなり。漸くに呼吸平かになる時、氣を活して天地に充つるが如くすべし。息をつめ氣を張るにはあらず。氣を内に充たしめて活するなり。此時に積聚の病ある者は、胸腹の間、其病のある所必ずしだるく、氣味あしきものなり。これ即ちあつまり凝りたる氣の融和せんと欲して動するなり。腹のうち鳴るものなり。此時多くは腹の内の氣味あしきに驚きて止むものなり。此時は、猶ほ初めて開きて充ちたる氣を改めず、掌を以て柔かに抑ゆべし。強くひねるときは、

彼の動する邪氣にさからひ、却て鎮まらざるものなり。甚だ突き上ぐる時は格別なり。惣じて腹の上、一處に久しく手を置くときは、氣其處へあつまる者なり。故に實したる所に手を置かずして虚なる所に手を置くこと習ひなり。亦脊に病ある者は必ずせなか、しだるくなるものなり。只だ氣のこらざるやうにすべし。肩と胸とを開くこと習ひなり。兩の肩をぬき出すやうにひらく時は氣伸ぶるものなり。これ形を以て氣を開くの術なり。氣滞ふる時は心滞る。心とどこほる時は、氣とどこほる。心氣は一體なり。此の術はまづ氣の滞りを解きて、倚る所を平かにするの術なり。」と。ここには觸手の方法にも觸れてゐます。彼は進んで、心氣の一體を論じて曰く、「心氣もと一體なり。氣は形の内を運つて、心の用をなす。心は靈なり。形なくして此氣に主たるものなり。氣を修する時は心おのづから安し。此氣妄動する時は心困しむ。……初學の手を下す所、先づ氣の滞りを解いて心を平かにし、氣を活して、心の自在を爲すべし。……寝て散亂するの氣を收め、倚る氣を解いて平かにするの術なり。此の如くする事五七日、或は十日二十日のうち修してみづから快きことを覺ゆべし。快き時は猶々此術を行ふべし。氣收まりたらば、氣を活すべし。惰氣にひかるべからず。外惣身にみつるが如く、わづかに心を

活すれば氣活するものなり。又晝は起きて形を正うし、氣を活して總身にみたしめ、正三派の二王坐禪の如く、しばらくの内、坐して氣を收むべし。必ずしも線香を立て時を定め結伽趺坐するにも及ばず。常の如く坐して、形を正しくし、氣を活するのみ。暫くの内、かくの如くして、一日に幾度も間暇の時に修すべし。かくの如くすれば、筋骨の束ね合ひ、血脉流行して滞りなく、氣實して病おのづから生ぜず、形正しからざれば氣倚る所あり。立て修するも同じ。人に向ひ坐し、或は物に對し、又は事を務むる時も同じ。胸と肩とを開きて氣のかたよることなく滞ることなく、總身指の先きまでも氣の充ちわたるやうに心掛くべし。歌謡して聲を發する時も、飯を喫し茶を飲むときも、路をありく時も、常にかくの如く氣をつくる時は、後は不斷の事になりて、自然に氣活するものなり。不斷此の如くなる時は、不意の變に應ずること速かなり。惰する時は死氣になつて、用に應ずること遅きものなり。落付きたると油斷と似て異なるものなり。みづから試みて知るべし。と。特に時を定めず、處を定めず到る處に精神統一と、内觀存養を試みんとする點が實に愉快です。因にこゝに所謂仁王坐禪と云ふのは果眼坐禪とも云ひ、徳川初世の三河の武士鈴木正三、後了心庵と言つた人の唱へたものです。正三去る

武士に示して曰く、「侍の役儀なる間、果し眼坐禪を仕習はるべし。我も様々修せし中に、餘り我執盡きざる間、色々修行をもし見れど、是では今の用に立たず、使はれぬぞと覺えて果し眼坐禪を用る習うて、慥かに禪定の機を知るなり。然る間各々も六具をしめ、大小をも十文字に指働し、八幡といふてねぢ廻し、睨めつけて坐禪を仕習ひめされよ。……若し我が法に入らんと思ふ人は、機をひつ立て、眼をすゑ、仁王不動惡魔降伏の形像の機を受け、仁王心を守て、惡業煩惱を滅すべし。」と。眼をくわつと見開き、動靜の間をとはず精神統一を行つて行くと云ふのです。大いに中心正坐の主旨と相通じてゐます。古方派の祖とも云ふべき名醫永田徳本は曰く、「息を臍下に充實せしめ、心を虚空自然の地に任ずるときには、心中一點の念慮もなく、病人なく我れなき所より、其の境致にあつて診察上に手を下すときには自然に得る所あり。」と。平野革谿は、かかる境地を總ての技藝に迄及ぼして言つてゐます。曰く、「鼓。普は革にあらず、指にあらず。指と革と相搏つ顫動を、風氣に傳へて耳に送るなれば、今臍下の氣息を外氣に和することを得ば、おのづから、人をして感ぜしむるの妙所に到るべし。書道。胸肋より手腕に至る間は、すべて空洞にして物なきが如く、たゞ臍下の氣力を筆尖に貫通し、筆よく手を忘れ、

手より筆を忘るる境に到らば、運轉自在の妙を得べきなり。茶道。己が頭面を臍下に没入するの觀を爲して、丹田と水注との正中を心以て相對せしめ、その高低を自然にまかせ、手脚を忘れて選び出すなり。馭法。馭馬の法は丹田の氣力を充實て、支體を虚無にならしむれば、精神自然と兩驥四蹄を透貫りて、鞍上に入なく、鞍下に馬なきの機を自得し、四技(鞍、轡、鐙、鞭)三術(合節、知機、處分)學ばずして、おのづから其の妙に到るべし。弓術。勁弓を彎きて、よく中ることを得るの力は、臂腕にあらず。指頭にあらず。唯だ身體の正中なる丹田の樞軸より發せし一氣を以て、發たぬ先に的を貫くなり。唐の太宗の本心正しからざれば、脉理皆邪なりといへるは、未だ盡さざる所あり。これも亦、其の胸肩臂指を虚にして、ただ臍下に氣息をはりつめ、その心を以て的にむかひ、眼を以て視ることを戒むべし。と。佚齋樗山も亦曰く、「茶の湯、蹴鞠一切の小藝、舞、踊の類までも、氣かたよりて、生活せざるときは、形の動靜手足の續き美しからず、應用の所作も滯るものなり。常には情氣になりて何の心もなく、器を執る事ある時ばかり、俄かに思ひ出して修せんとする時は、氣改り形に心をとられ、所作に意を住むる故に、氣動搖して、不意の用に應じ難し。常に心を用ゐて修する時は、事ある時に無心に

して應ずるのなり。只だ常に氣を生活して情るべからず。情氣は死氣なり。死氣は靈なし。故に用をなさざるのみにあらず。物に驚き怖るること多し。氣總身にみちて心と共に生活する時は、おどろくこともなく、おそるゝこともなく、不意の變にも應じやすし。但だ浮氣は根なし。生活にはあらず。似て異なり。猿樂の收氣。鞠を蹴る者の身づかひ。足づかひも同じ。上手の太夫の舞ふ所を後ろより突くに蹴きたほるゝことなし。これ氣活して總身に充つ。下は定まつておもく、上は軽く動いてかたよる所なく、臍下より呼吸して聲を出す故なり。下手の舞ふ所へは少し碍りても、つまづき倒れるものなり。これ下軽くして定まらず、氣かたよりて生活せず、胸より上にて呼吸し、上つりになりて、下虚缺なる故なり。謡曲と收氣。又上手の謡物は聲を呂へ落す時、臍下大にふくるものなり。是等の事は常に試みて知るべし。歩行と收氣。すべて人の歩行するに下軽く上つりなる者は、早く疲るるものなり。之等の事に限らず、耳目の觸るる所に心をつけて試みる時は、天地の間の物みな工夫の種となり、天下皆我が師にあらずといふことなし。我が主あつて是を求むるが故なり。と。兩者の言は符節を合する如くです。何事をなすにもかく、精神の一到が必要であり、精神の一到には内觀靜養の根據がなければな

りません。特に病める者にとつては、一面には治療刺戟による鞭撻べんたつが必要ですが、他面には常に、かかる精神一到の心理過程が内觀によつてあらはれなければならないのです。日本醫學に於て常にいはれる養生の秘訣には食養や衛生と共にこの點が力説されてゐます。貝原益軒は、その著「養生訓」に於て曰く、「養生の道は内慾をこらふるを以て本とす。養生の術は、先づわが身をそこなふものを去るべし。身をそこなふものとは、内慾と外邪となり。」と。名醫中神琴溪は曰く、「福の裏は禍、富の裏は貧、樂の裏は苦、雷は落ちるもの、船に乗れば溺るもの、盜は這入るもの、水火の難は出會事あるもの、逢ふは別れ、生は死、花咲けば散るものと云ふ道理を以て、精神を充滿させ置かば、之に過ぎたる大養生は無きなり。」と。平野革谿は、「方今の人、ただ富貴榮華えいがを慕ひ、名聲功利を競逐ひて、飽足することを知らざるが故に、其の心志を外にのみ馳せて、内に守るものなく、その外物を攝取する所の耳、目、口、鼻の竅の方へ、一身の血氣と共に、胸腹諸臟を、上へくと勾引し、もし腔内筋膜の繋着が無くば臟腑は悉く頭面裡めんのうちに引込もしつべき状態れば、身體は徒に所謂將棊倒しとやらんになり、臍下空洞にて物無きが如く、大氣の合行届あひあひかず、下元の力虚乏して腰脚に力なく、腸胃漸々に狹隘きょうがいなり。日々の

飲食停滯敗壞はいがいして、血液の運輸怠慢となるなり。」と。伊豫の名醫水野擇齋たくさいも亦心の養生に就いて曰く、「心の養生とは、常に怒と慾とを堪へ、心に恥しと思ふことを爲さざることなり。心は清淨にして形なし。故に之を養ふも、食を以て養ふこと能はず、義は宜なり。時の宜を得て心を辱めざるを義といふ。心を養ふ時は、愧無くして樂深し。」と。ヒポクラテス亦警句をもつて示して曰く、「疾病は晴天の霹靂へきれきに非ずして、寧ろ日常に於ける小なる破綻はたんの累積、即ち非衛生の一團が恰も雷電の如く、愚者の頭上に破裂するに依つて生ず。」と。メチニコフも亦その養生の秘訣の内に「忿怒ふんぬを避くべし。」と云ひ、リチャードソンも百歳長壽法の内に「機嫌きげんを能くして決して慾心を起すべからず。」と云つてゐます。エヂソンはその精力養成の秘訣を語つて曰く「常に快活なるにあり。余が誕生以來、一日として疾病に冒されたること無きは、常に樂天的にして快活なるに因る。人を殺すものは、勞作ろうさくに非ずして煩悶はんもんなり。」と。英國の諺にも曰く、「快活の心は終りまで行くも、悲しみの心は一哩にて疲る。」と。明治大帝の御製にも、「常に身の養ひ草を、つみてこそ、ひとの齡は延ぶべかりけれ」と云ふ尊い御示しがあります。マーデンは云つてゐます。「力のある生命を與へ、殊に活氣を吹き込む、我が心中の大なる力に比ぶれば、

薬物の力は眞に微弱なものである。我等を創造し、我等を改造し、我等を活気づけ、我等を強健にし、我等を元氣にする、生きたる創造の力と、蘇生の力とに我等を詰んとするものは、此心中の大なる力である。」と。又曰く、「世人は多く其體内に結核菌を持つて居るが、健康の思想を自ら把持し、病氣に抵抗する強き力を養成するならば、かかる細菌は發育しないのである。病菌は體内の破壊した組織から栄養をとる。病菌は街路に於ける掃除屋の如きもので、健全なる體組織や健全なる食物によつて、露命をつなぐことができ無いのである。乃ち體組織が恐怖心の爲に壊れ始め、病氣に抵抗する力が、之と同時に衰頹を開始し、身體が所謂健康線以下に沈衰した時に、今まで機會を待ちかまへてゐた掃除屋や、人類に敵對行爲を取る病菌が、此破壊された體組織に喰つてかかるのだ。そして血液は次第衰にへ、病氣は實に人體を其の犠牲として握つてしまふのである。各器關の疾病が、先づ中央局即ち腦から傳へられる失望的報告に起因するものであることは、些の疑ひをも入るべき餘地無く、腦細胞の落膽は延て身體全部の細胞をして、是れまでに爲し來つた奮闘を中止せしめるに至るのである。心臓の鼓動が靜止し、最後の呼吸を引き取つたかと思はるとき、氣を取り直さしめる様な、力の強い言葉を聞

き、爲に己に失はんとしてゐた細胞中の確信が復活されて、とつくに死んでしまつたかと思へた體に、生命を取り留めたといふ如き例は屢々ある。」と。心理學は、吾々が疲勞を感じ、疾病を感じ、苦惱を感じる心理的度合と、その原因となる生理的度合とは正比例してゐない事を示してゐます。勿論精神作用のみをもつて、全身の細胞の實質的變化を左右することは出来ないが、生理的障害の度合以上に苦しんだり、病者に對して抗毒素が生じてくるのを止めたり、疲勞毒素に對して疲勞抵抗物質が産生されるのを妨けたりする不都合は充分精神作用で止められるのみならず、更に精神一到が深くなると、今迄理性との平衡を失つてゐた直覺が働き、今迄感情との平衡を失つてゐた治癒本能が活潑に働いて來るのです。これが精神一到が治病に働く積極的方面です。かかる精神一到は小兒の場合には自然に備はつてゐる事が多いのです。基督は「幼兒の如くならずんば天國に入るに能はず」と云はれました。鎌田柳弘は無心と放心とを説いて曰く、「無心とは木石の如くなるの謂にあらず。心、外境にも著せず、又身内にも住せず、總て住著する處なくして虚照する者なり。故に目前の外境常に歴々分明にして、一毫を遺失せずして、内實に湛然不動なり。故に己れを失はず、又物を失はず、心常に明靈にして

昏昏せず。靜定にして躁動せず。元來心は著する所あれば躁にして昏く、著する所なければ、靜にして明らかなり。故に其本を究むれば、放心は物に著するものなり。無心は物に著せざるものなり。然るに心若し著する所なくとも、懈怠して沈着すれば、又昏暗して無記となる。是亦放心の類なり。常に惺々として昏沈すべからず。則ち無心の道に合ふべし。」と。かかる精神一到の過程は、坐禪や靜坐に於ても同一であると思ひますが、坐禪も習禪となれば却つて死にます。陣東筥はかゝる習禪的坐禪を排して曰く「儒の説く所の靜字は、禪學の靜を説くと、辭は同じくして意は異なり、儒は無欲にして靜なるを主とす。禪學は無事にして靜なるを主とす。故に曰く、心は一事に泊すべからず。……之れ陸學の無事にして靜なるを主とするなり。大極圖説に曰く、無欲なるが故に靜なりと。通書に曰く、一なる者は無欲なり。無欲にして靜なれば則ち即、敬と爲し誠と爲す。無事にして靜なれば、則ち空虚に入り、寂滅に流る。之れ正に所謂毫釐を差て千里を謬る。所謂句々同じく、事々合ふ。然れども同じからず。」と。しかし同じく禪と言つても習禪を却け行住坐臥に活禪を現するものに到つては斷じて靜坐と違背しません。又儒にして、靜坐するとも、活々たる氣合のその中心を貫くものがなければ此死坐のみ、僞坐

のみ。坐禪を批判する處の騒ぎではありません。とに角、吾々の精神を一到し、内觀靜養するこゝとは、總ての行動をして活動たらしめる根據です。又病者に於ては、治療刺戟を最も有効に受容するために、絶對に必要な條件です。精神統一なき處には刺戟は益々統一を亂すか、無効となる事が多いのです。しかしてかかる統一的心理過程は寧ろ宗教の立場なのであるが、現代の宗教家は餘りに病者に對して無理解です。更に進んで迷信的統一を強ひるに到つては容せません。森田正馬博士も此點を慨して言つてをられます。少し長文であるが引用しませう。「各個人の素質、及び一般心理的内因は、詰り迷信發生の素地、即ち畑若くは土壤であり、更に此上に誘因即ち種を播きつける機會といふものがあつて、ここに初めて迷が成立、發育するのである。素因誘因との關係は、誘因は如何に強くても、素質が良ければ、迷信も發育しないのである。例へば彼のベツテンコフエル、エンメリツヒ、メチニコフ其他の學者が、自ら實驗的に、コレラ菌の純培養を呑んで、而かもコレラに罹らなかつたといふ事は有名なる事件であるが、之は其體質即ち素地の如何によつては、コレラ菌も之を侵す事が出来ぬ、といふ事を證するものであつて、一體には體質の薄弱なものは容易に病毒に侵されるものである。之と同様に迷信

もその人の素質が悪かつた時には、容易に種々の迷信に暗示され侵害されるものである、といふ事を知る事が出来る。此誘因に就いては、先づ人の感動を起すべき事件、即ち疾病不幸、不慮の災難等の如きは、多く迷信發生の機會となるものである。病は人生の悲惨事であるから、昔も今も病に對する迷信は甚だ多い。昔は傳染病の時は、西洋でも日本でも、之を惡魔又は疫病神の祟りと考へて、種々の禁厭や祈禱をして、人々か將棋の駒の様に斃れた事は多くの人の知る處である。今日文明の世にさへも、或る心靈治療法を鼓吹する人は、此傳染病も吾人の精神から起るといつて、醫學の微菌説を攻撃するといふ様な特殊の人さへもある。精神病に關する迷信も、西洋には、Hexen Process (ヘクセンプロセス)といふ面白い歴史があつて、精神病は惡鬼又は惡靈の憑いたものと考へ、中世紀頃、特に是等精神病者に對して、極めて殘酷なる虐待をした事が長く續いたのである。十八世紀の終り頃になつても、尙學者の間に罪業説といつて、精神病は罪業から起るものである、などと唱へられた事もある。是等傳染病や精神病の歴史を見れば、世に迷信といふものが、如何に恐るべく、悲惨なものであるか、といふ事を痛感せぬ人はないであらう。又極めて普通の病でも、其或る症狀を、俗人の迷信的の眼を以て見

るとき、故らに之を不可思議視して、迷信の動機となる事が多い、中には、子宮病、心臟病、ロイマチスなどさへあるが、特に神經痛の病には、迷信の誘因となるものが甚だ多い。例へば或る犬神憑の女は、犬神が身體中をめぐり廻り、身體の處々に饅頭ほどの腫れが出たり消えたりするといふ。聞いて見れば益々奇怪である。行つて實地に見れば何でもない。即ちこれは醫學的にいへば、身體の衰弱の時等に起る筋肉の搐搦、若くは纖維性搐搦と稱するものである。又或病が思ひ掛なく治つたといふ様な動機から、屢々迷信を起すことがある。其適例は、天理教祖と金光大神などの類である。特に天理教を信するに至る動機は、病に關係した事が最も多い。某法學博士が同教を信するに至つたのも、其神經衰弱症が治つたからである。昔から『鰯の頭も信心』といひ或は『只信ぜよ信するものは救はれん。』などと唱へるが、此信念は、狭い意味でいへば、一つの暗示作用で、病が治ると思へば、或る治るべき病は治る。然し乍ら、たとへ病は治つても、鰯の頭は矢張り鰯の頭である。同じくば今日催眠術や諸種精神治療法の理論も次第に明かになつた世の中に、鰯の頭を信じて病を治す必要はない。凡そ病を治するに、藥物といふものは常に毒物であるが、只其最も害毒の少ないものを用ひる。時として種々の迷

信をも、方便として用ふべき事もあらう。但し之を用ふるに、その最も害毒の少なきものを用ひなければならぬといふ事は、醫者も精神療法者も、共に研究を怠つてはならない處である。其他火災、洪水等不慮の災難、彗星の出現等、不時の出來事は、人の感動を起す事が多くて、屢々迷信の動機となるものである。又結婚後、或は轉居後、病人、不運等、打續く時、或は旅行先の災難の時、恐怖の感情に制せらるると共に、前に述べた如く、人の心は、斯様な時に、其原因を外部に求めんとする傾向のあるもので、ここに初めて易や方位や九星判断を信する様になるのである。しかし、精神統一を迷信的事項に求めても、そこに一時統一現象があらはれることがあるが、理性が發動する時にそこに第二次の不安が起つてきます。故に科學の任務は、古來の迷信的事項に親切丁寧な解釋を與へてやる事と、單に宗教的醫療行為に迷信的なものがあるとか、在來の易解釋が迷信であるとか、家相、方位、姓名判断等は迷信であるとか言つて、その迷信的方面のみの證明に没頭しないで、積極的に、宗教を正しく醫療の根據とするにはどうすればよいか。易を正しく人生の指標とするには如何に解釋すれば良いか。家相方位を科學的には如何にして成立させうるか。姓名判断は科學的に如何なる方法を探るべきかと云

ふ方面を説明し證明し、更に大衆に教へて行かないと、この食物は悪いから止せと言つて取り上げて、代りに何にも與へないと同じで、大衆は常に不満です。民間治療は迷信だ。病人は皆高い金を出して醫者にかかれと言つても大衆は聞かないのです。民間治療に迷はず、正しい醫學の知識から云へばかうだから、家庭でかくく治療せよとか、かくくの方法をとれば病氣にかからないでもすむとか、醫者自身が大衆の利益の方を中心に働きかけたならば迷信的民間療法は、たちまち影をひそめるでせう。迷信の除去には、常に、迷信の根據を明らかにすると共に、その迷信にかはる正しい信仰を與へねばなりません。代るべきものを正當に與へないで所謂迷信のみを除去せんとする事は正しい方法ではないのです。現代の醫學は、未だ觸手療法の如きものを只迷信として、その効果のある學理的理由の研究をつとめません。従つて、民間治療家が勝手な臆説を作つて益々迷信化してゐるのです。又精神療法に就いても、色々説明を加へてはゐますが、醫師自ら精神を一到し、内觀靜養する體驗をしないから、その本當の説明が出來ません。醫師の行ふ精神療法は複雑な方法を用ひて、却つて効果が舉りません。これは醫學の罪でなくて、醫師が自ら體驗修養しない罪です。精神的體驗は單に理論研究だけでは出

來ません。同時に正しい理論がなければ正しい精神的體驗も出来ない事を注意せねばなりません。要するに現代の醫師も宗教家も共に足らない點がある事だけは事實です。吾々は何よりも先づ科學を尊敬すると共に、深く精神一到の體驗を自ら積まねばなりません。それには先づ姿勢と呼吸を正さねばなりません。しかし姿勢とか呼吸は身全體の要所々々が相合して、始めて渾然として正されるものです。又姿勢を中心に纏め、呼吸を中心に纏めると云ふのも、自然にさうなるので、一寸でも中心に固着すれば中心の意味が無くなつてしまひます。全身到る處に氣滿ち意到つて、自ら中心が顯れて來るのです。特に中心に意識が傾くのでありません。この間の消息は澤庵の「不動智神妙錄」に詳しく示されてゐます。曰く「不動とはうごかずといふ文字にて候。向ふへも左へも十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、卒度も止まらぬ心を不動智と申し候。……物一目見てその心を止めぬを不動と申し候。なぜなれば物に心が止り候へば、いろ／＼の分別が胸に候間、胸のうちいろ／＼に動き候。止れば止る心は動きてもうごかぬにて候。たとへば十人して一太刀づつ我へ太刀を入るるも、一太刀をうけ流して、跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候はば、十人ながらへ働を缺かぬにて候。十人十度心は働け共

一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は缺け申す間敷候。若し又一人の前に心が止り候はば、一人の打太刀をば打流すべけれど、二人めの時手前の働抜可申候。……心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるるなり。人の構に心を置けば、人の構に心を取らるるなり。兎角心の置所はないと言ふ。或人問ふ。我が心を兎角餘所へやれば、心の行所に心を取止めて敵に負るほどに、我が心を臍の下に押込めて、餘所へやらぬと云ふは段が卑くし。向上にあらず。修行稽古の時の位なり。敬の字の位なり。又は孟子は放心を求めよと云ひたる位なり。上りたる向上の段にてはなし。敬の字の心持なり。……臍の下に押込んで餘所へやるまじきとすれば、やるまじと思ふに心に心を取られて先の用かけ、殊の外不自由になるなり。或一人問うて云ふは心を臍の下に押込めて働かぬも不自由にして用が缺ければ、我が身の内にて何處にか心を置く可きぞや。答て曰く、右の手に置かば右の手に取られて身の用缺るなり。心を眼に置けば、眼に取られて身の用缺け申し候。右の足に心を置けば、右の心を取られて身の用缺るなり。何處なりとも一所に心を置

けば、餘の方の用は皆缺るなり。然らば則ち心を何處に置くべきぞ。我答曰く、何處にも置かねば我が身に一ばいに行きわたりて、全體に延びひろがりてある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入る時は足の用を叶へ、目の入る時は目の用を叶へ、其の入る所々に行きわたりてある程に、其の入る所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり。思案すれば、思案に取らるる程に、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨て置き、所々に止めずして其の所々に在て用を外さず叶ふべし。心を一所に置けば、偏に落ると云ふなり。偏とは一方に片付きたる事を云ふなり。正とは何處へも行き渡つたる事なり。正心とは總身へ心を伸べて一方へ付かぬを言ふなり。心の一處へ片付きて一方は缺るを偏心と申す也。偏を嫌ひ申し候。萬事に堅まつたるは偏に落るとて道に嫌ひ申す事なり。何處に置かうとて、思なければ、心は全體に伸びひろがりて行き渡りて、有るものなり。心をば何處にも置かずして、敵の働によりて當位々々心を其の所々に用ふべき歟。……本心と申すは一所に留らず、全身全體に延び廣がりたる心にて候。妄心とは何ぞ思ひつめて、一所に固まり候心にて、本心が一所に固まり集りて妄心と申すものに成り申し候。本心は失ひ候と所々の用

が缺ける程に、失はぬ様にするが本心なり。たとへば本心は水の如く、一所に留らず。妄心は氷の如くにて、氷にては手も頭も洗はれ不申候。氷を解かして水となし、何處へも流れるやうにして手足をも何をも洗ふべし。心一所に固まり一事に留まり候へば、氷かたまりて自由に使はれ申さず。……心を溶かして、總身へ水の延びるやうに用る、其の所に遣りたきままに遣りて使ひ候。是れを本心と申し候。……ここには自然體と、靜養の本義が實に判然と記されてゐます。中心に氣力を統一すると云ふも、凝り固つては、澁滯が起る丈であつて統一は起りません。煩悶のある時は、その轉換策としての凝念が必要であり、觀念が必要ですが一度統一が得られた後は、凝念は不要です。只々姿勢を正し、呼吸を正してをれば氣力は全身に行き渡るので。正しい呼吸は常に腹力充實の意識を伴ひますが、これは自然の意識であつて、時にそのやうに努力するものではありません。無暗にうん／＼と腹に力を入れると却つて息をつまらして悪結果を起すことがあります。氣は止るのが最悪です。止つては靜養内觀の道ではなく、又精神の一到が出来ません。精神の一到の根基には、常に悠々たる自然體がなければならず、同時に精神一到して進むところに自然に靜養の典型としての自然體が得られるのです。始めは、幾分

努力的に中心を求めて行つてゐても、遂には所謂全身に氣が行き渡つて滯らぬやうになるので、佚齋橋山の「天狗藝術論」に曰く、「何をか水月と云ふ。曰く流義によりて色々義理を付けていへども、畢竟無心自然の應用を、水と月と相うつる所にたとへたる者也。廣澤の池には、仙洞の御製に、「うつるとも月もおもはずうつすとも水もおもはぬ廣澤の池」此御歌の心にて、無心自然の應用を悟るべし。又一輪の明月天にかかつて萬川各一月を具ふるがごとし。光を分て水にあたふるにはあらず。水なければ影なし。亦水を得てはじめて月に影あるごとし。光を分て水にあたふるにはあらず。水なければ影なし。亦水を得てはじめて月に影あるにあらず。萬川にうつる時も、一水に移らざるときも、月において加損なし。又水の大小をえらぶことなし。是を以て心體の妙用を悟るべし。水の清濁を以て悟るは末なり。然れども月は形色あり。心には形色なし。其形色ありて見やすき者をかりて形色なきもの譬とす。一切のたとへみなしかり。譬に執して心を鑿することなかれ。」と。又曰く「問ふ。何をか動いてうごくことなく、靜にしてしづかなることなしといふ。曰、人は動物なり。うごかざること能はず。日用人事の應用多端なりといへども、此心物のために動かされず。無慾無我の心體は泰にして忙しきこと

なく、形しづかにしてうごくことなし。外より見ては、馬と人をつくり付けたるがごとし。ただかれが邪氣をおさへたるのみにて、馬の性に悖ふことなし。故に人鞍の上に跨りて馬に主たりといへども、馬是に従つて困しむことなく、自得して往く。馬は人をわすれ、人は馬を忘れて、精神一體にして相はなれず。是を鞍上に入なく鞍下に馬なしと云ふべし。是動てうごくことなきのかたちにはあらはれて見易きものなり。……何をか靜にしてしづかなることなしといふ。喜怒哀樂未發の時、心體空々として一物の蓄へなく、至靜無慾の中より、物來るにしたがつて動かざるものは心の體なり。動て物に應ずる者は心の用なり。體はしづかにして、衆理を具へて靈明なり。用は動いて天則に従ひて萬事に應ず。體用は一源なり。是を動いてうごくことなく、靜にしてしづかなることなしと云ふ。」と。吾々が精神一到して事に従事するときには、理性と直覺、感情と本能がよく平衡を得て渾然として調和されるのです。しかし病める者にとつては、健康者とは異つて、已に内に病と云ふ特定の刺戟が存在して、たえず心身の統一を破つてゐるのです。従つて其處にはあらはれてくる精神一到の心理過程は健康者の場合とは違つてきます。即ちこの場合の精神一到は全く消極的な忍受の立場です。苦痛をどこ迄も正視して物質

的苦痛の實際量以上に精神を動亂させないと云ふ心境が唯一の容される状態です。その時起る病苦に對する消極的努力が闘病心です。此闘病心を誘起するものが暗示です。暗示は催眠術の名で呼ばれた事があるが、植松七九郎博士は之に就いて曰く、「所謂名醫と云はれる人々は自然とこれを應用して居るのである。事實信賴してゐる醫者が見えただけで病人は良くなつて了ふ。催眠術の術式こそ用ひないが、その際起る心理作用はこれと全く同一である。されば醫者の學識、人格、態度が勝れて居れば、催眠術を用ひずとも暗示はいつでも奏效する。暗示が奏效すれば催眠術を用ひたと同様である。それに就いて私は面白い實驗をもつて居る。或患者が催眠術者にかかつて頭がだん／＼振れて來ると云ふ暗示を與へられた。患者は催眠から覺めたが頭の振れが止らない。で結局何とかならぬかと云ふ相談である。私は患者を丁寧に診察した後で『この藥は絶対に有效である。明朝迄に必ず振れが止まる』と云つて重曹の一包を渡してやつた。後で聞けば果して翌朝は癒つて了つたと云ふ事である。兎角病人と云ふものは暗示感應性が強いものである。だから昔の如く殊更に催眠術を應用せずとも、覺醒時の暗示で十分奏效するものであり、これが現に吾々がヒステリーその他の神經症に用ひて居る方法である。……人

間は催眠術に限らず、兎角神祕を信じたがる。しかも神祕の源が己の心に存するを思はざるはかへすがへすも遺憾の事に思はれる。されば迷信の徒は神を天國に求め、極樂を西方十萬億里に望むも焉んぞ知らん。神は己の心にあり。極樂は現世にのみ存するのである。」と。宗教家は醫者よりももつと強く暗示をしてゐるのですが、神とか天國とか、阿彌陀佛とか、淨土とかいふ暗示を、そのままにあたへつづけると、これらの概念はともすれば、大衆自身から概念的に遊離したものと易いのです。「念佛はまことに淨土にむまるたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかせまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」(歎異抄)と云ふやうな強烈な信念に接すると、この信念の本源に徹する以前に、已に偶像的にその云ふ處の事を對象的に信じてしまふやうな弱點を人間は持つ。クリストのやうに、「我に従へ」と云ふ確信には大衆は思はず引かれてしまふ。そして無意識の内に、クリストにすがりついて、自己の内にクリストの心を見出し、眞にクリストに従つて行くところの中心的努力を忘れてしまふ事がある。更に下つては、教會とか寺院の暗示に感應して、漸次内なる宗教を忘れてしまふこと

があります。醫者に對する場合も同様で盲目的に醫者を信じて、自ら鬪病しよう、家族の病氣は自ら救つて行かうと云ふやうな積極的精神を失つてしまふことがあります。反省や思索を伴はない妄信程恐ろしいものはありません。種々なる民間療法も亦、大衆のかかる被暗示性を利用してその宣傳をつとめて行きます。しかし現代の大衆には漸次、迷信的暗示に對する批判性が高まりつつあります。故に宗教にせよ、醫術にせよ、大衆に暗示を與へるに當つては、出来る限り、大衆が大衆自らの力に宗教を、そして醫術を正しく見出しうるやうに暗示すべきでせう。それには先づ、自らが精神を一到し、内觀反省して、理由なき暗示は迷信として排撃し正當なる理由ある事實のみを、中心の滋養分として攝取して行かねばなりません。吾々が吾々自らをかく訓練することによつて、正しい信仰、正しい生命力が内から湧いて來るのです。特に病める人は、暗示にかかり易く迷ひ易いのですから、特に心して、色々と他人の言説に迷はぬやうに心掛け、全ては眞劍な自己反省によつて、苦痛を忍受し、他をたよる前に、自己の強い生命力、不死の生命力を信じなければなりません。自ら信ずる事の出來ないものが、如何にして基督を信ずる事が出來ませう。如何にして念佛申すことが出來ませう。自ら信じ得ないか

ら、基督を信ずる、念佛申すと云ふのでは、それは形式だけの祈であり、念佛です。宗教の本質は同一ですが、その暗示形式が種々様々なのです。暗示形式を通じて本質に到ると考へられるのは只概念の上でのだけの事で、事實は常に本質から發して形式に發展するものです。光を見ねばパウロは終に生涯基督の敵であつたでせう。エックハルトは何らの方法なくして神を解せよと云ひました。精神の一到は奇術ではありません。呼吸を正し、姿勢を正すことは形式だけではありません。吾々が自然を求めるときは自からしかかなり、又しかく呼吸と、姿勢を正す時に、そこに、何らの方法なくして神は顯れ給ふのであります。只安樂の法門を求めなさい。難行苦行の代償としてあらはれるものは只疲勞毒素のみです。行亦禪、坐亦禪、語默動靜、體安然。禪も習禪となれば邪に入り、正坐も規則となれば亦不可です。そこには靜養の意義も内觀の意味も無くなつてしまふ。又病める時には所謂體安然たるを得ないではないかと云ふ疑問もあらうが、病める時は病める時で、安臥靜養して、比較的安泰を保つ他はないのです。更に苦痛の加はつてゐる時の安靜法は、積極的に意思力を發揮し、所謂仁王坐禪の心組で、苦痛を忍受し、苦痛と闘ひ抜くのが最も靜養の道に合するのです。たとへ苦痛に直面しても精神を一到して苦痛を

忍受する時と、精神を散亂して、苦痛に加へるに苦惱をもつてするとは大きな違である。苦痛は之を忍受さへすれば、必ず苦痛に對する抵抗素が出来るが、苦痛に耐へないで苦惱となれば最早苦痛に對する抵抗物質の産生は期待出来ないのです。小兒の場合には直接の苦惱はないが側についてゐる父母が苦惱苦悶すると、敏感にそれに感應するから、小兒の病の時、その父母及び看護者の精神統一が頗る必要です。小兒は最も暗示にかかり易いものですから、父母が確信をもつて看病すると不思議にその経過が良くなる場合があります。しかし大抵の場合、子供が病氣になると親の方が周章狼狽して愛兒を殺してしまふ事が頗る多いのです。故に精神一到の修養は常に之を心掛けて健全健をとはず、常に姿勢呼吸を整へて、病者に對してそなへ、非常の時の準備をなさねばなりません。しかも醫術は之を常に行ふべきものであつて、已に病發して騒ぐのは下の下なるものであるから、殊に精神一到と、内觀靜養の習慣をもつて、病を防ぎ、能率をあげ、藝道に達し、本務を完全に遂行すると云ふことが必要です。醫學も亦この意味に於て、所謂治療學的研究に、その歩を進めつつあることは何と云つても嬉しい事です。板倉博士は日本醫事新報に於て云つて曰く「醫學の重要な目的は、人類の生命の維持發展を圖

ることであり、而して此目的に副はんが爲には(一)病氣にならぬやうにすること、(二)病氣を癒すこと、(三)病氣が悪くなるのを防ぐこと、(四)病苦を軽くすること等を力めてゐるのであります。即ち醫學の最高の目的は治療であります。然るに治療を完全に行ひます爲には、病氣の本體は何者であるか。何故病氣になるか、病氣を見分けるには如何にしたらよいかと云ふやうなことを研究する必要が起つたのであります。……併し吾々人間の注意は、偏し易い傾を持つて居りまして、一つの方面だけを觀て、夫れに專念し、却つて實際を離れることがあります。我國の醫學も斯う云ふ傾向を示し、動物實驗に專念し、病氣に關する理論的方面に走り、之等は非常に進歩したのでありますが、目前の病人を治療するには、如何にしたら最もよいかと云ふ實際問題を輕んずるやうな傾向が起つて參つたのであります。……今日の吾國の醫學は知識を求め理想に走り、百年後の治療の基礎となるやうな事に重きを置き、學問の爲の學問に偏り、目前の治療を如何にすべきかに就ては、充分に研究して居らないのであります。之は我國の博士論文の標題を見ても、思ひ半ばに過ぐることと思ひます。又内科集說會と云ふ會合がありました、醫學に關する會合の中で、最も實際的のものであります、其演說に於てすらも

未だ治療に關して報告せられたことが無いのであります。勿論例外はありますが、例外は例外に過ぎませぬ。

従つて我國の醫育にも、其影響が現れて、生物の生活が如何にして保たれて居るかとか云ふやうな理論とか、病原菌とか、病氣の本體とか、病名の診断とか、解剖したら如何なつて居るかとか云ふやうな事に就ては、極めて細かい點までも注意して教育して居るのでありますが、病人に對する實際の治療に就ては、充分に教育して居ないのであります。……以上で我國の醫育に重大な缺陷があり、眼前の病人を救ふ最良の方法たる治療醫學研究の必要なる所以が、能く御分りになつたことと思ひます。否治療醫學の如き學問は決して新らしき問題でなく、我國の古代醫學の殆ど全部は、即ち治療學に外ならぬので、殊に傷寒論しやうかんろんの如きは、世界に於ける治療學の代表的名著だと思ひます。私が曩さかに歐米各國に於て治療學を研究して、探しあてたものは、古くから日本に在つたものだと思ひました。遠くに求めて歸つて見ますれば、日本で忘れて居つた自分の首であつた感が致します。

治療學は我國にもあつたと同様に、古い文化を持つ國には、昔から存在して居ります。醫學

の實際的方面を尊重する十數ヶ國は此例であります。而して之等の國では、「醫學を研究するに拘からず、治療學を等閑とうかんに附する國家、例へば過去の獨逸（現在の獨逸は既に之に對する施設を實現してあります。）又は現在の日本の如きもの存するは不可解である。」と。怪んでゐるのであります。」と。而してかかる治療醫學は一方には治療刺戟の研究に進み、一方には刺戟をして治療刺戟たらしめる最も重要な根據たる靜養の問題の研究に進んでゐるのです。

療術行爲取締規則と平田式療術

近時大阪市、名古屋市等にも療術行爲取締規則が發布されましたので、参考のためこれと平田式との關係を申しのべます。

先づ東京における警視廳の取締規則が全国的に模範となると思ひますからその全文をあげます。民間療法の勃興に伴ひ、内務省では、醫業類似行爲取締規則と云ふやうなものを制定して、全国的に之を取締らうとしましたが、色々の都合で、時期尙早の名の下に、一時見合せとなつたやうであります。併し其代り地方の状況に應じ、各地方廳をして之を取締らしめることゝなりましたものと見えて、昭和五年十一月二十九日、東京では警視廳令第四十三號を以て、左記の規則が發布せられ、同十二月五日から實施されることゝなりました。勿論之は、該行爲を業とする者に對する取締規則ですから、各家庭で御施行になるのには、關係はありません。各府縣でも、本規則と大同小異のものが公布、施行されつゝありますから参考の爲に記して置きます。

警視廳令第四十三號

療術行爲ニ關スル取締規則左ノ通り定ム

昭和五年十一月二十九日

警視總監 丸 山 鶴 吉

療術行爲ニ關スル取締規則

第一條 本令ニ於テ療術行爲ト稱スルハ他ノ法令ニ於テ認メラレタル資格ヲ有シ其範圍内ニ於テ爲ス診療又

ハ施術ヲ除クノ外、疾病ノ治療又ハ保護ノ目的ヲ以テ光、熱、器械、器具、其他ノ物ヲ使用シ、若ハ應用シ又ハ四肢ヲ運用シテ他人ニ施術ヲ爲スヲ謂フ

第二條 未成年者、禁治産者、準禁治産者、精神病患者及傳染性疾患アル者ハ療術行爲ヲ業ト爲スコトヲ得ス

第三條 療術行爲ヲ業ト爲サムトスル者ハ左ノ事項ヲ具シタル届書正副二通ヲ業務所所在地業務所ノ設ケナ

キモノニ在リテハ住所所在地所轄警察署(以下單ニ所轄警察署ト稱ス)ニ提出スヘシ

一、本籍、住所、氏名、生年月日

二、業務所ノ所在地

三、療術行爲ノ名稱及施行方法ノ詳細

四、業務所ノ構造(各室ノ面積及用途ヲ記入シタル平面)

五、料金額(料金額ノ定メナキモノニ在リテハ其ノ旨)

六、精神病及傳染性疾患ナキコトヲ證明シタル醫師ノ診斷書

七、履歷書

前項第一號乃至第五號ノ事項ヲ變更シタルトキ又ハ其ノ業務ヲ廢止シタルトキハ七日内ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ但シ業務所(又ハ住所)ヲ移轉シタル場合ニ於テ所轄警察署ヲ異ニスルニ至リタルトキハ前項ノ規定ニ依ルヘシ

第四條 療術行爲ヲ業ト爲ス者家族雇人其他ノ者ヲシテ其業務ニ從事セシメントスルトキハ本人ノ本籍、住所、氏名生年月日ヲ記シ所轄警察署ニ届出ツヘシ

療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ前項ノ從業者從業セサルニ至リタルトキ

又ハ其ノ届出事項ニ異動アリタルトキハ七日内ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ

第五條 療術行爲ニ關スル廣告又ハ看板ニハ左ノ事項ヲ表示スルコトヲ得ス

一、施術ニ關スル證明若ハ謝狀又ハ施術ノ效果ニ關スル實例

二、他ノ診療若ハ施術ヲ誹謗シ又ハ之ヲ妨クルカ如キ字句及圖畫

三、施術者ノ技能及經歷

四、病院、醫院、診療所又ハ之ニ紛ハシキ名稱

第六條 療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ左ノ事項ヲ遵守スヘシ

一、學位、稱號、其他法令ノ規定ニ依リ診療又ハ施術ヲ爲ス者ニ紛ハシキ稱號ヲ使用セサルコト

二、他ノ法令ノ規定ニ依リテ爲ス診療又ハ施術ヲ妨グルカ如キ言動ヲ爲ササルコト

三、講演其ノ他ノ方法ニ依リ其ノ業務ニ關シ虚偽又ハ誇大ノ言動ヲ爲ササルコト

四、身體ト被服ハ常ニ清潔ニ保持シ手指ハ施術前之ヲ消毒スルコト

五、施術ニ用フル器械器具其ノ他ノ物ニシテ被施術者ノ身體ニ直接接觸スル物ハ一人毎ニ之ヲ消毒スルコト

六、施術室ハ常ニ清潔ニ保持スルコト

七、被施術者ニ供スル椅子、蒲團其ノ他ノ物件ハ清潔ナルモノヲ用キ時々日光ニ曝スコト

八、施術料金ハ業務所内略易キ場所ニ掲示スルコト但シ定ナキモノハ其ノ旨掲示スルコト

九、料金額ノ定ナキモノハ被施術者ニ之ヲ請求セサルコト

第七條 前條第四號及第五號ノ消毒ハ左ノ各號ノ藥物ノ一ヲ以テ洗滌又ハ拭掃スヘシ

- 一、石炭酸水（防疫用石炭酸三分水九十七分）
 - 二、「クレゾール」水（クレゾール）石鹼液三分水九十七分）
 - 三、昇汞水（昇汞一分普通食鹽一分水千分）
 - 四、酒精（百分中五十分乃至七十分ノ酒精ヲ含ムモノ）
- 第八條 療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ當該吏員ノ臨檢ヲ拒ムコトヲ得ス
- 第九條 警視廳又ハ所轄警察署ハ本令ニ定ムルモノノ外取締上必要ナル事項ヲ命スルコトアルヘシ
- 第十條 療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ業務ヲ停止シ又ハ禁止スルコトアルヘシ
- 一、本令又ハ本令ニ基キテ發スル命令ニ違反シ若ハ其ノ業務ニ關シ他ノ法令ニ違反シタルトキ
 - 二、施術カ無效又ハ衛生上有害ナリト認メタルトキ
 - 三、公安ヲ害シ又ハ風俗ヲ紊ス虞アリト認メタルトキ
 - 四、素行不其ノ他業者トシテ不適當ト認ムル行爲アリタルトキ
- 第十一條 療術行爲ヲ業ト爲ス者死亡シタルトキハ戶籍法第十七條ノ届出義務者ヨリ十日内ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ
- 第十二條 療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ三十日以上所在不明トナリタルトキハ廢業シタルモノト看做ス
- 第十三條 第二條乃至第八條若ハ第十一條ノ規定ニ違反シ又ハ第九條ノ規定ニ基キテ發スル命令若ハ第十條ノ規定ニ依ル處分ニ違反シタルトキハ拘留又ハ科料ニ屬ス
- 第十四條 療術行爲ヲ業ト爲ス者ハ其ノ戶主家族、雇人、同居者又ハ從業者カ其ノ業務ニ關シ本令又ハ本令

ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第十五條 本令ノ規定ハ精神療法ヲ業ト爲ス者ニ之ヲ準用ス

附 則

第十六條 本令ハ昭和五年十二月五日ヨリ之ヲ施行ス

第十七條 本令施行ノ際現ニ療術行爲ヲ業トセル者ハ本令施行ノ日ヨリ三十日内ニ第三條ノ規定ニ依リ届出ツヘシ

平田式療術は鍼の如く穿入せず、又皮膚を傷けず、只痛覺のみを起し、灸の如く皮膚を燒かず、只熱覺のみを起して、心理的に、疾病箇所の神經の興奮を鎮め、心理的に血液の性質を醇化し、又血液の循環を良くし、適宜に、精神療法、觸手療法、指壓療法を併用し、且靜養を重んじ、醫者の處置を妨げず、鍼灸按摩を受療せるものには施術を避けるものから、醫師法、鍼灸按摩取締規則の何れにも觸れず、全く、右療術行爲取締規則に該當するものから何卒この點をよく監督官廳にお説明下さい。東京、横濱其他の各地で既に三年來、その届出は皆受納されてゐるので、新に規則の出来る處ではよくその旨をお合みの上、それぞれ所轄警察署衛生課の御了解を求めて下さい。萬一これを鍼灸と誤る方があるなら全く認識不足なので、すから、出来れば小生の著書を御呈示の上、よくこの點を御説明下さい。

但し小生の講習を受けず、勝手に本文讀んで、直ちに職業化し、鍼灸類似の廣告などをしてゐる人もあるさうですが、さう云ふ方が誤解されるのは當然の事です。職業化せんとする人は必ず講習を受けて下されば困ります。講習會費は十五圓。期間は十日です。大東盟舎に申込まれると日を知らせませす。慢性病の治療を家庭でやりになるには著書丈でも充分です。

届出の際方法を記するには、電熱或は白金綿を利用して、尖端小にして燒度のおそれなき熱鍼器を加熱し、極少時間（一秒の三分の一位）、皮膚の疾患の反應のあらはれたる部分を刺戟する點を實際に説明されたし。書式左の如し。

施術方法ノ詳細

(用紙美濃紙)

皇法學會平田式療術ハ東京市牛込區若松町七十二番地皇法學會會長平田内藏吉氏ノ創始ニヨルモノニシテ其ノ施術方法ハ圖ノ如キ電氣熱鍼器(ハポルト以下ニ變壓セルモノニ付危險ノ患ヒナキ療器)又ハアルコール用熱鍼器(空洞内ノ石綿ニ數滴ノアルコールヲ注ギ點火シ療器ヲ熱シテ用フ)ノ先端ヲ夫々ノ熱源ニヨリテ熱シコレニテ施術者ノ所謂病氣ニ對シ病症ニ適應セル刺戟部位(ヘッド氏等ノ所謂過敏帶、過敏線、過敏點)ヲ選定シ其ノ部位又ハ病症ノ如何ニヨリ點狀或ハ輪狀等適當ノ方法ヲ以テ皮膚面ニ輕ク接觸シテ治療刺戟ヲ與ヘテ治療ニ至ラシム右ノ方法ハ從來行ハレ居ル鍼術ノ如ク皮膚ノ深部ヲ刺戟スルコトナク又灸術ノ如ク施術後皮膚面ニ深キ印痕ヲ殘サズ絕對ニ化膿等スルコトナシ

尙右ノ刺戟部位ニ對シ左手ヲモツテ指壓觸手刺戟ヲ併用スルモノナリ。(器械ノ圖ハ本書中ノ圖ニヨルベシ)皇法學會平田式療術ハ洋方醫學ノ理化學的長所ト漢方醫學ノ眞髓タル體験の特長トヲ統一綜合シタルモノニシテ治療刺戟ノ反應效果左ノ如シ

一、血液ヲ淨化シ循環ヲ良クスルコト

- 二、白血球ヲ増シ體內ノ食菌作用ヲ旺盛ナラシム
- 三、分泌排泄機能ヲ促進シ毒素ヲ體外ニ排泄スルコト
- 四、胃腸ノ活動ヲ良クシ體內細包ノ營養ヲ可良ニスルコト
- 五、體內ニ抗體ヲ發生シ諸病菌ニ對シテノ免疫性ヲ附與スルコト
- 六、神經及ビ筋肉ノ凝結ヲトリ虚衰ヲ復シ疾病感ヲ消散スルコト
- 七、生體自然ノ力ノ活動ヲ助ケ上下氣血ノ運行ヲ平均スルコト
- 八、心身ノ疲勞ヲトリ心身ヲ休養安靜ニミチビクコト

療術行爲御届

- 一、本籍地
- 一、現住所

(氏名)

年

月

日生

- 二、業務所ノ所在地
- 三、療術行爲ノ名稱及施術方法ノ詳細
- イ、名稱 皇法學會平田式心療術
- ロ、施術方法ノ詳細 別紙ノ通

- 四、業務所ノ構造 別圖ノ通
 - 五、料 金 額 壹回ノ治料代
 - 六、醫師ノ診断書 別紙ノ通
 - 七、履 歴 書 別紙ノ通 (講習終了年月日明記ノコト)
- 右療術行爲開始及御届候也

昭和 年 月 日

右

氏

名 印

實はこの熱鍼を營業に行ふ方が、大分増加して來ました。要するに效くからなんて有難いことなっていますが、仲には随分無茶な人がゐまして、療術行爲取締規則といふのがあつた。處て届も出さずに人の治療をする。とがめられてから、實は研究的にやつてゐるんです。傳道的にやつてゐるんです。料金はとつてないんです。と辯解しても取締規則がある以上は之では通らないんです。必ず警察に届を出す事。又取締規則が出來てない處でも警察の了解は得ておかねばなりません。誇大廣告。病名を列擧して在來の醫者の眞似をしてみたい、病理學的診断の眞似をしたり、感謝状や治験例をあくだい廣告ビラを並べたり、凡そ在來の山師連中のしつとした眞似をしたり、何とかしてお醫者さん風に見せたいために、何々醫院なんか云ふ看板を出して叱られたり、或は何式、何式と五つも六つも看板を並べて見たり、中身は保證しかれる大きな電氣の器械を部屋一杯に取りつけて見たり、實に色々な詐術をしかも頗る下手に用ゐる人があるやうです。やれ警

察から文句を言つて來たと云つて手紙をよこす人なんか、よく調べて見ると矢張當人が無茶をやつてゐるんです。先日も大阪から二三の人が何か言つて來ましたが、大阪は大體療術行爲取締規則が未だ無いんだし、熱鍼は鍼灸師取締規則に觸れない事は警視廳でも判然言明してをられるんだから、眞面目にやつてをれば何も問題は無いんですが、第一、完成した熱鍼の方法は知らず、昔の方法(それは大體家庭的な療法の目的で普及したんです)を一寸も研究勉強せず、料金は人並、いや人並以上に取らうとするんだから蟲が良すぎます。大阪で古くからこれをやつてゐる人なんか、治療費一回三圓、出張十圓(交通費は別)と云ふんだから驚く。僕だつて一回、三十分乃至一時間(色々方法をかへるため)やつて五十錢なんです。大阪と云ふ處はそれでなくてはいかんのださうですが、實際ひどいと思ふ。こんなのは止められた方が僕の治療のためにも良いと思ふ。僕も眞面目な大阪の會員には氣の毒だけど、行くのが嫌になつて此處一年は關西に行かないんです。否一日や二日の一時的講習なんか何處だつて嫌になつてどこにも行かんです。思はず脱線しましたが、次に器械もです。最初アルコールを筒から出す形の特許をとつたやつは今全然使つてないのですがその後電熱治療器は昭和七年九月七日附て實用新案登録第一六八七一四號に登録し、又意匠登録は同三月二十二日第五五二四四號に登録したんですが、勝手に作り、勝手に賣つて、治療は止めて今度は器械でもうけようと思ふんです。それも宜しからうと黙つてゐると、きまつて却つて損をしてしまふ。同時に僕に對してはさすがに氣まづくなつて熱鍼から離れてしまふ。會も色々出來ましたが皆つぶれてしまつたのです。清々して却つていいと思ひますが實際この四年間に随分嫌な事があつたのです。先達つても警視廳の衛生課の方が見えられての話によれば、大阪からの照會によると、大分山師的な誇大な不眞面目なやり方をしてゐる人があるさうです。そんな人は止められても止むを得ません。序でに云つときますが、ずつと前岐卓縣では

アルコールを用ひて火をつけた儘用ひる原始的の器械は治療には禁じられましたが、之なんかも當然です。家庭で用ゐる目的で又は實驗用として無料添附した器械で人を治療して料金をとるなんかいふのは全く間違つておます。講習だつてさうです。五圓出して三日間の家庭講習を受けて、直ちに開業するなんか、やつて行けないのが當然です。相手は考へても見て下さい。病人です。そんな輕率に取扱はれてはたまつたものでないです。もつとも之は僕の普及方法が悪かつたので今では全く改めてかなり慎重に教へておます。しかしますます慎重にやるつもりです。どうかせめて「療術醫典」の讀者諸子丈は益々元氣、益々愉快に、そして眞面目に、興味をもつて此の療法を研究し、人に行ふ前に、先づ自分に家族に行つて、しかる後慎重な態度で人に施して下さい。では今度はこれで。(一九三四、八、十一、平田内藏吉)

皇法學會規約

- 一、皇法學會は毎月二回宛研究會を開く。
- 二、適時傳道講習會を開く。
- 三、皇法學會支部は「月刊中心」誌を毎月五十部以上一年分前納せる者にして本會の、精神をよく解せらるる方のもとに置く。希望者は金二十五圓を前納して申込むこと。
- 四、皇法學會支部は「月刊中心」誌を毎月十部以上一年分前納せる者にして本會の精神を理解せらるる方のもとに置く。希望者は金六圓を前納して申込む事。
- 五、支部長及枝舎長には時々特別研究録を無代進呈す。
- 六、皇法學會は一年數回特別講習會を行ふ。
- 七、皇法學會及び大東盟舎の表面の事業は國民健康運動と國民生活安定運動なるも、同志は相集りて、進ん

て中心愛の傳道に従事す。

八、皇法學會は適時三日間、大東盟舎に於て家庭講習會を開く。

特別講習會規約

- 一、期間 十日間。
- 二、課目 平田式療術の原理及び實習。
- 三、會費 十日間十五圓。
- 四、修業證 十日間皆出席者に授與する。缺席或は不熱心の者には次回迄保留する。
- 五、申込 隨時。
- 六、會場 東京市牛込區若松町七二、大東盟舎。
(毎月發行の機關紙「月刊中心」は醫學宗教の兩面から「中心」に觸れて行くもの。一年六十六錢。大東盟舎内、南明學會發行。)

皇法學會本部

大東盟舎

東京市牛込區若松町七二
(電車ハ若松町下車スレバ西へ
一丁半、余丁町下車スレバ東へ
一丁。北側小路入口。)

熱鍼中心療器使法の説明

- 一、最新型中心療器は圓錐形の外筐と、白金綿を盛る内筐と、針金の附いた白金綿押へと、はりつきた鍼附蓋と、はりなしきた鍼無蓋から出来てゐます。
- 二、普通は鍼附蓋を箝め、外筐の尖端と、蓋の方の鍼とて治療をするのですが、蓋の方の鍼は熱が高いから主として外筐の尖端を使用し、必要に応じて（例へば過敏點に特に強い刺戟を與へたい時又は感じの鈍い部位を刺戟する時等）蓋の方の鍼を使用して下さい。
- 三、鍼無蓋は、過敏帯一面に熱刺戟を與へる時、又は熱鍼の刺戟を嫌ふ人等に使用するのです。
- 四、外筐の中には、長さ一分位づつに切つた燈心に、脱脂綿を極く少しづつ混ぜ合せ、燈心が綿の纖維でつながつて、一と塊になつたのを、軽く押へて、中筐の底につかない程度に入れ、水筆の軸を適宜の長さで切り、適宜の厚さ（一分五厘位）に割つて、燈心の上を押へ、それから内筐を箝めて下さい。石綿は重みがあるため、鍼無蓋を使ふ時、石綿の重みで中筐を押し出し、熱度を下げるからいけません。内筐の中には白金綿をピンセットで充分ほぐして、上縁と平らになるまで盛り上げ、白金綿押への針金も平らにして、箝めて下さい。（脱脂綿よりも眞綿を入れると尙宜しい。）
- 五、使用する時には、先づ蓋を取り、外筐の横の小孔から、ペンチを萬年筆用のスポイトに一杯半入れ（餘計に入れるのは禁物です）横の小孔には、薄い柔かい紙をなめて貼るか、竹か堅い木で栓を造つて、箝めて下さい。それからマツチの火を、白金綿の上に近づけると、直ぐに火を呼びます、紅く見えなくても、手を其上にかざして見れば、火が着いたか着かないかが分ります。純アルコールを使用するのは無益で其瓦斯で咽喉を害したり、火の着きが遅く熱度が低く其上不經濟でありますから、特に熱度の高いのを嫌ふ人の外は、使用しない方が宜しい。若しペンチの臭氣を嫌ふ人は

香水を少し混ぜて使つて下さい。

- 六、熱の高低を加減するには、次のことを参考にして、自分で工夫して下さい。此心療は四項に述べた如く、白金綿を内筐の上縁と平らに盛つた時、適度の熱が出るやうに造つてありますが、白金綿を中高かに盛り上げれば、熱が強くなり、白金綿押へと共に上縁よりも低く押へれば熱が低くなります。又た純アルコールをペンチに代用すれば熱が低くなります。
- 七、尙ほ使用上、次の事に注意して下さい。
 - 1、使用前には、ピンセットで白金綿を整理して使用中の飛散を防いで下さい。
 - 2、白金綿は、使用に随つて締まつて、内筐の中で踊るやうになり、白金が飛散し易くなりますから、時々適當に補充して下さい。
 - 3、白金綿は、長く使用するうちに、白金が少なくなつて效力も減じます。其時は取出して充分にほぐし、新しいのと混ぜ合せて使つて下さい。
 - 4、使用中に火が消えさうになる頃は、心療器がひどく熱くなりますから、火の消えない中に、蓋をしたまゝ、横の小孔からペンチを補充して下さい。
 - 5、熱い蓋を取る必要が出来た時は、布切れをかぶせて取つて下さい。
 - 6、蓋がゆるくなつたら、少し押へてすばめて使つて下さい。白金綿押さへがゆるくなつたら、少し擴げて箝め直して下さい。
 - 7、内筐がゆるくなると、鍼無蓋で軽く治療してゐる間に、抜け出して、火力が弱くなりますから、其時は紙を適宜に外筐との間にはさんで、しつかり箝めて下さい。
 - 8、此中心療器は、丈夫に出来てゐるから、修理の必要を生ずることはない筈ですが、白金綿押への針金だけは、永い間には破損を免れません、其時は其地方で修理して下さい。萬一修理の出来ない場合は、新品と取りかへして下さい。

白金綿の製法の公開

白金石綿の作り方に就ては最近製法を改良し一層優良な品質のものを得られる様になつたから此の方法を茲に御紹介する。白金石綿は充分注意して製すれば火力の強い又壽命も永い優良品が得られるのであるが少しく不注意であるか又は手を抜いて製すると火力の弱い壽命の短い、時としては點火不可能の不良品となることが往々あるものである。

材料

(一)石綿 なるべく質の柔らかい繊維の長いものがよろしい。粉末が混じたもの、繊維の短いもの、質が堅くてゴワ／＼した手ざわりのもの、色の純白で無いもの等はよろしく無いから避くべきである。そして如何なる優良品でも必ず不純物が含有して居るから先づ濃鹽酸と共に數時間煮沸する。然れば含有して居る不純物は鹽酸に溶解して来る、不純物中には必ず鐵分があるものであるから鹽酸は黄色に着色して来る。これに蒸溜水を加へて徐々に攪拌し(強攪拌すると石綿の繊維が切斷する)石綿を沈降せしめて上澄液を流し去る。濃鹽酸を用ふるのは微量の鐵が存在しても黄色に着色するからであつて新らしく濃鹽酸を加へても最早や黄色が増加しなくなるまで前述の方法に依つて鹽酸を取り換へて煮沸しなければならぬ。鐵分が取り去られたならば蒸溜水を加へて徐々に攪拌して石綿を沈降せしめ上澄液を流し去る。此の操作は十數回乃至數十回繰り返へして上澄液が酸性反應を呈しなくなる迄行はなければならぬ、そして最後に石綿を濾紙上に集め水を切り乾燥する此の精製法は必ず行はなければならぬ。不純物を含有する石綿は、特に鐵分は白金の燃焼作用を著しく妨げるから是非濃鹽酸と處理してこれを除去しなければならぬ。

斯く精製を行つた石綿は更に肉眼的に選別して細かい部分、繊維の短かい部分或は固まつた部分等を取り除いて良好の繊維のみを集めて使用するのである。之等の精製法を施す時は最初の不純の石綿は約半量とな

る。即ち最初十グラム石綿を取り精製すると約五グラム純良石綿が得られる。

(二)鹽化白金、封管入一グラム、橙黄色の結晶性の塊である。封管を破つたら必ず全部を一定の水に溶解しなければならぬ。

(三)鹽化アンモン、壘入一オンス又は一ポンド純白色の結晶である。化學用純品を購入する。

(四)五珪ホルピベット、メスピベットとも稱す。

(五)乳首尖端に孔の開いて居ないもの。

(六)蒸發皿、平底のものがよろしい。直径七センチ内外のものが使ひ宜い。

以上の材料はいづれも藥種商で求めることが出来る。

處方

第一液

鹽化白金

一、〇瓦

蒸溜水

二五、〇瓦

第二液

鹽化アンモン

三、〇瓦

蒸溜水

二五、〇瓦

第一液及び第二液は別々に製し且別々に保存しなければならぬ。

製法

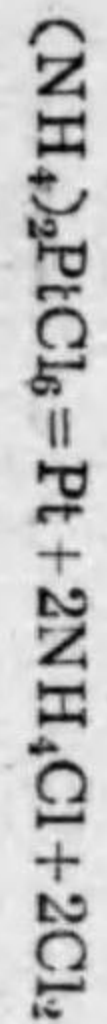
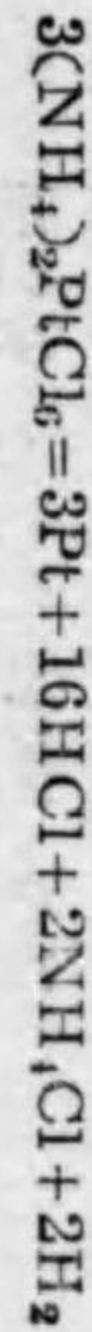
精製石綿二瓦を秤量し蒸發皿の中にて一樣の厚さの層にひろげる。次にホルピベットに乳頭を付し第一液(白金液)を五珪吸ひ上げて石綿上へ滴下しムラの無い様に白金液を散分する。層の表及び裏の兩面へ滴下する方が好結果を與へる。然る後直ちに第二液をやはり五珪ホルピベットで吸ひ上げて鹽化アンモン液をムラの無い様に鹽化白金を散布した石綿にふり掛ける。さうすると次の反應式に示す様に



鹽化白金 鹽化アンモン 鹽化白金酸アンモン

鹽化白金は鹽化アンモンと反應して石綿纖維中て水に不溶解性の鹽化白金酸アンモンとなつて固着される。

斯く處理した石綿は重湯煎上で加熱し乾燥せしめた後攝氏三〇〇度内外の温度に加熱すると次の反應式に示す様に鹽化アンモンの白煙を放つて白金が析出し石綿纖維に固着して優良の白金石綿が得られる。



此際注意すべき事項

- (一) 石綿を精製した後は取扱は必ずピンセットを用ひ手を觸れないこと。
 - (二) 白金液を浸み込ませた石綿には塵芥等は落ちない様にする。
 - (三) 石綿を焼く時にはガス火炭火等の火焰が直接石綿に觸れない様細心の注意を拂ふこと。
 - (四) 金網を火の上に置いてその上に蒸發皿を乗せて焼くのがよろしい。但し此時には蒸發皿を破損し易いからその方も注意せねばならぬ。
 - (五) 石綿をあまり強く焼かないこと。あまり熱が強いと白金が飛散する懸念がある。鹽化白金が還元されて徐々に黒色になつて行く程度がよろしい。
 - (六) 石綿を焼いて還元する時に白色の煙が出るがこれは鹽化アンモンであるから無害である。
- 以上記述した方法で白金石綿を製すれば必ず優良なものが得られるのであるが白金石綿が出来上つてから後の取り扱ひにも注意を拂はないと折角の優良品が不良となるから爲念注意事項を書き添へて置かう。
- (一) 白金石綿の取扱には必ず清潔なるピンセットを用ふる事、直接指先で觸れたりすることは避けなければならぬ。

(二) 濕氣を防いで保存すること、濕氣があると燃焼力を阻害するからこれを避けなければならぬ。濕氣のみならずアルコール、揮發油等にも濡らさない様に注意せねばならぬ。

(三) 直接に火焰を當てない様にすること、白金は光りの強い還元焰に依つて白金カーボニルと稱する氣體に變じ揮發するからである。

(四) 油煙、炭の粉等も白金を變質させるから白金綿中に混入しない様注意すべきである。よくおこつた炭火を少し離して白金石綿部を加熱する様にして點火すれば最もよろしい。

(五) 使用後はなるべく心療器から取り出して置く方がよろしい。

白金の回收

白金石綿の不用になつたものは決して捨つべきものではない。これを貯めて置いて適當量に達したならば白金を回收するのである。回收に都合が好い石綿量は二十瓦内外であらう。少くとも十瓦以上に達しなければ回收し得る白金量の關係上回收には不便である。

これには先づ一容の強硝酸及び三容の強鹽酸を混合して玉水を製し白金綿を投じ加熱すると盛んに發泡しつつ赤褐色のガスを發生し白金は鹽化白金となつて溶解する。此の赤褐色のガスは酸化窒素及び鹽化ニトロシルの混合物で毒性が強いから吸入しない様注意すべきである。白金が全部溶解して鹽化白金となればガスの發生が止むから加熱を止め蒸溜水で稀釋して濾過し濾紙上に残つた石綿は數回蒸溜水で洗滌する。此の石綿は乾燥して白金を附着せしむれば再び使用が出来るから保存して置くことよろしい。濾液は重湯煎上で蒸發乾固すると不純の鹽化白金が得られるからこれを少量の蒸溜水に溶解し冷却し鹽化アンモンの濃厚溶液を加へると鹽化白金酸アンモンの淡黄色の沈澱が生ずる。これを濾過し乾燥後注意して赤熱すると純白金が得られるからこれを再び玉水に溶解し蒸發を行ひて純鹽化白金の結晶が得られる。

白金は貴金屬中でも可なり高價な金屬である。之を捨て、は個人としての損失はさまで大なるものではないであらうが全國の心療者全部の不用品を集めて回收することが出来れば相當の價格に達するであらう。斯かる高價なもののみ廢棄するのは國家經濟上から云つても無駄なことであるから適當な方法によつて不用品を集めて回收を行ふべきものと考へる。

(尚、この白金綿を自分で作るのが面倒ならば東京市牛込區若松町七二大東盟舎で(振替東京一八八二五)中心療器一月分小瓶六十錢、大瓶一圓二十錢で分配する。十箇送送料十五錢、家庭で使ふにはこれ二月は使へる。)

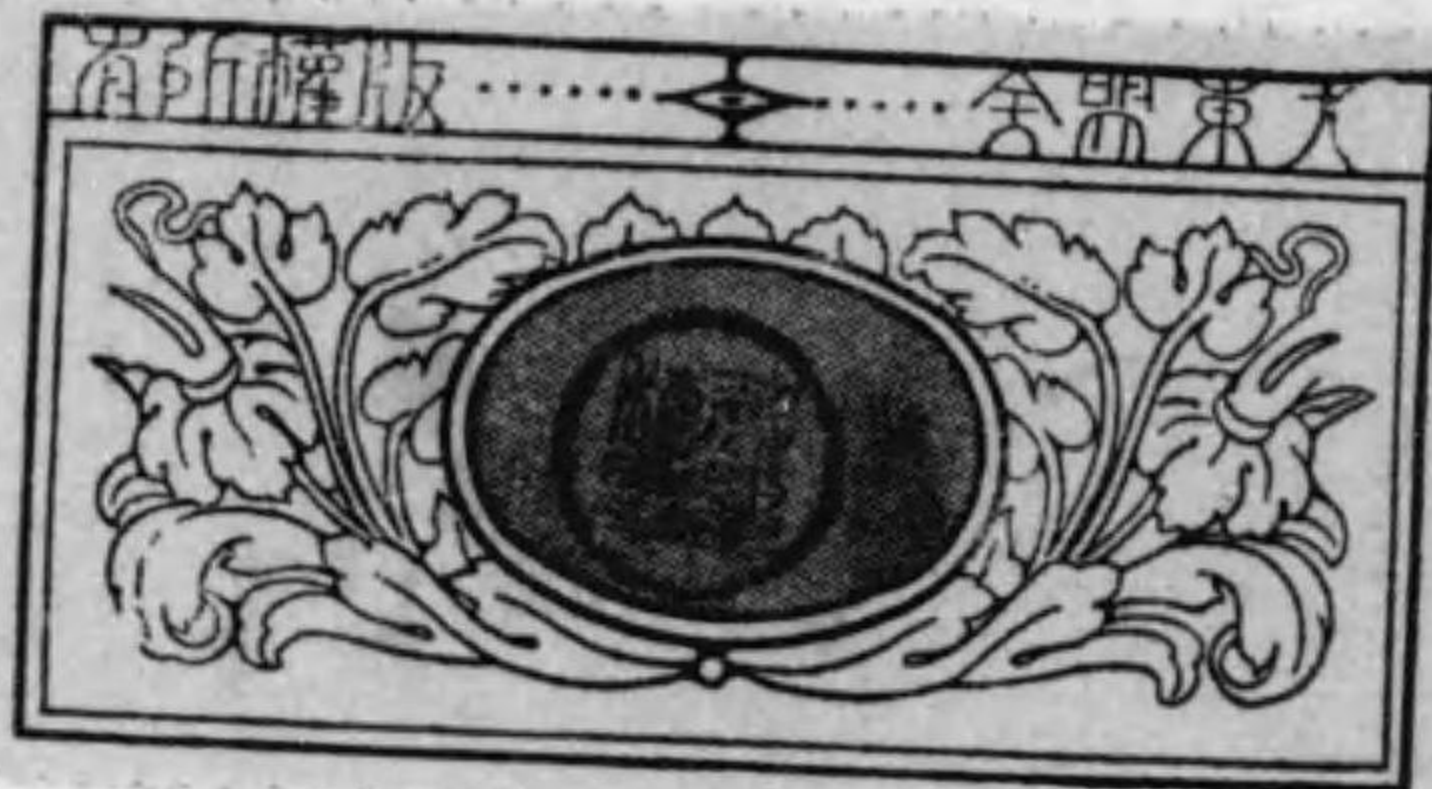
平田式療術醫典

に就いて

平田式療術醫典は平田先生の療術方面の統一的大集成でありまして、吾が傳道部は全力を擧げてその完成に努力しつゝ、諸兄弟の御援助を祈つてゐるのであります。醫典は一月乃至三月に一回は出版されて行きます。全て體裁は方法篇の通りです。そのプログラムは左の通りです。

一、方法篇。二、婦人科・性科篇。三、小兒科産科篇。四、外科耳鼻咽喉科・眼科・齒科篇。五、皮膚科篇。六、神経科・精神科・運動器疾患篇。七、呼吸器循環器物質代謝及血液科・泌尿器科篇。八、消化器科・中毒科・傳染科篇。以上八巻で一通り完結致します。各巻の頁數は全て二百五十頁から三百頁迄です。定價は一圓均一です。各巻にはそれぞれ、異つた立場から説かれた平田式療術の概論が附してあります。これはなる丈重複しないやうに出来る丈違つた立場から説いてあります。又各巻それぞれに、重複しないやうに平田式療術の圖解が數百箇分配挿入してあります。本書全巻の通讀によつて、療術者としての資格が得られ、又家庭に於ての誤りない看護・自療の途が示されるのであります。(大東盟舎傳道部。久氣清香記)

9.1



平田式療術醫典

昭和九年九月一日印刷 納本
昭和九年九月五日第一版千部發行 (定價一圓五十錢)

著者 平田内藏吉

發行所 東京市牛込區若松町七二

發行者 久留穂生

東京市本郷區眞砂町三六

印刷者 龜谷良一

東京市本郷區眞砂町三六

印刷所 日東印刷株式會社

發行所 東京市牛込區若松町七二

大東盟舎

發賣所 東京市本郷區曙町二六

斯文堂書店

電話大塚五八一六。振替東京三四四八九

平田内藏吉著 東京市牛込區若松町七二 大東盟舎發行 (定價五圓) (振替東京) (送料三錢) (一八八三五番)

辯證法教典(全) 既刊

○四六倍判。天金、アート美裝。箱入。五〇〇頁。上質紙。内容は、中心健康術。中心生活法。中心日

本論よりなる。○生○奥山勇治氏曰く「書中示されたる中心生活の展開を讀んで、一頁一頁胸の内がおどるやうになつて一氣に讀んでしまひました云々。中心

○北海道中心健康術の講習の全部を地方の人々のために集大成して公刊した新著。○長岡市の形又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○密に調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○同志の調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○成された調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○生○奥山勇治氏曰く「書中示されたる中心生活の展開を讀んで、一頁一頁胸の内がおどるやうになつて一氣に讀んでしまひました云々。中心

○北海道中心健康術の講習の全部を地方の人々のために集大成して公刊した新著。○長岡市の形又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○密に調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○同志の調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

○成された調心健術の完成と云ひます。又中心生活法として始めて完全なる光りを見出した如く、省みて感概又無量です。又拾ひ讀み出した新著。全

平田内藏吉制定 發賣所 大東盟舎 (振替東京) 一八八三五番

平田式療術額面用圖譜 (横三尺、縦四尺のもの 一、二、三、四、五)

一、反應部位全圖 (三色石版色刷)	一部 一圓	送料十五錢
二、古經穴圖譜	一部 一圓	送料十五錢
三、刺戟點綜圖	一部 一圓	送料十五錢
四、骨度等分圖	一部 五十錢	送料十五錢
五、筋肉上反應圖	一部 五十錢	送料十五錢
右全部一纏めに御註文の場合には	定價全部 五圓	送料十五錢

大阪の山崎幹夫氏曰く「治療部位の關係を一目瞭然たる體系へ統整せられたる劃期的の圖表にして私共の渴仰已まざりしもの」云々。駒形字太七氏曰く「一目瞭然に出來ました。これなら如何に初歩の人でも容易に反應部位を知ることが出來ます。」云々

(この圖譜は、専門的に熱誠治療をなさる方の掛圖用に少部數作つたものです。)

東京市牛込區若松町七二

大東盟舎發賣 (振替東京 一八八二五番)

電・牛込 六一八二番

平田式熱鍼治療器

(效果はどれでも同一です。價の高下は只便利さと裝飾のためです。)

一、傳道實驗用熱鍼器	價定六十五錢	内地送料十五錢	白金綿専用。白金綿。一日一回使用。一月分附。スボイド附。
二、普及型熱鍼器	價定一圓五十錢	送料十五錢	白金綿。一日一回使用。二月分附。スボイド。ピロロドット。換蓋附。ピロロドット。
三、熱鍼心療中心療器	價定三圓五十錢	送料十五錢	白金懷爐火口、スボイド附。
四、火口附普及熱鍼器	價定一圓	送料十五錢	箱入。直接電線に通じて用ひる。堅牢に作つてあります。
五、電氣熱鍼器	價定十八圓	送料二圓	一、二、三、四の器械用の白金綿。補給用のもの。
六、白金綿	價定大一圓二十錢 價小六圓十錢	送料双方十五錢	

右熱鍼器はその原案は全部平田氏の發明に懸り、實用新案四件、意匠登録三件を有してゐます。今迄會員が模倣製作する事を許してゐましたが、漸次心療の本義を離れて器械の賣買を専らとし、しかもその結果大抵失敗してゐるため、平田氏は昨年来斷然その製作を禁止しました。

平田内藏吉既刊著書目録

東京市日本橋區通三丁目五

春陽堂版

(春陽堂に直接御申込を乞ふ)

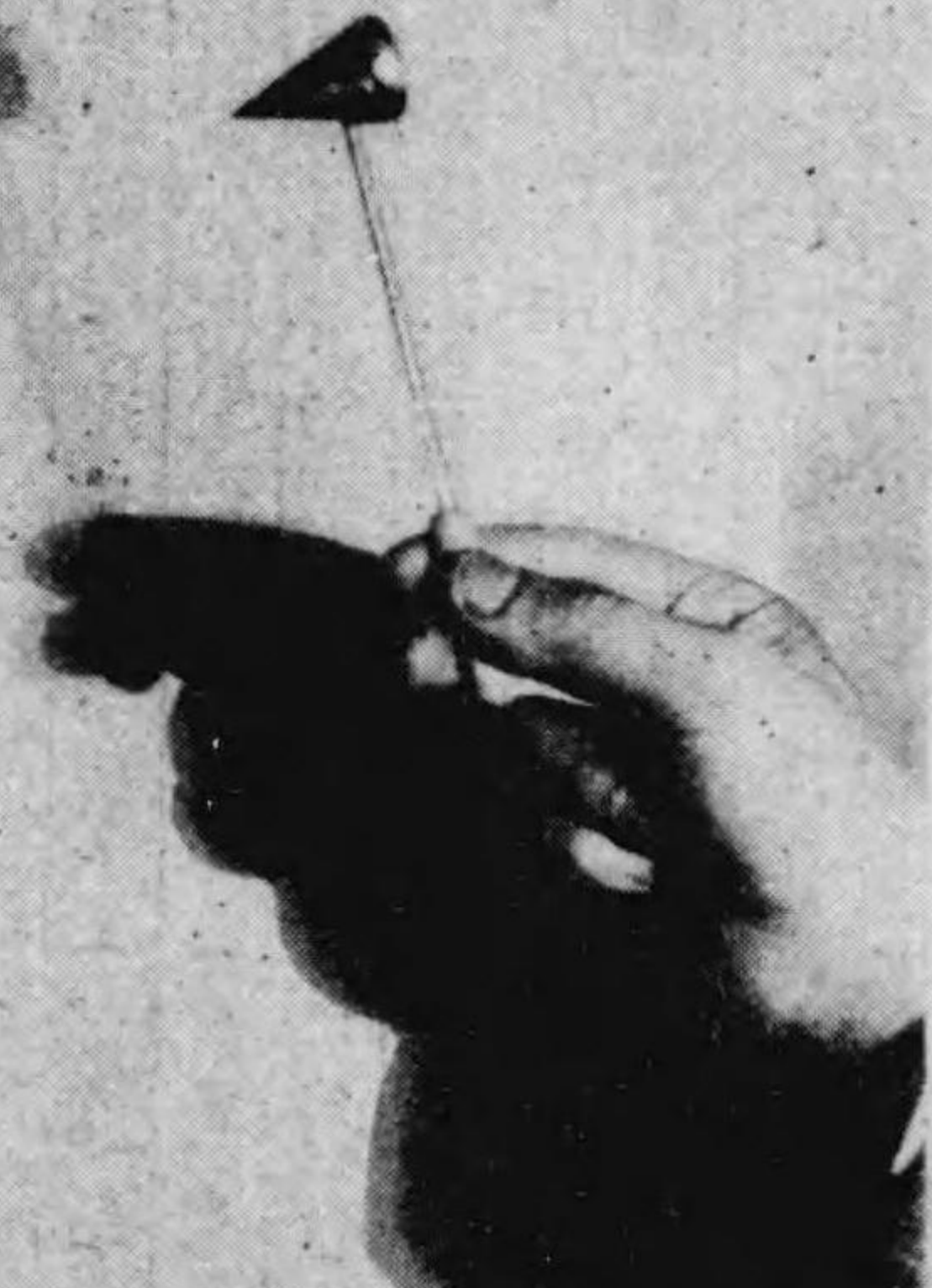
一、平田式心療法	定價一圓七錢	税十五錢	瀧浦文彌氏實驗例編輯。四六判四百頁。厚紙裝。箱入。器械付。栗原基氏序。
二、心療圖解	定價二圓五錢	税十五錢	四六判五百頁。布製。箱入。小西重直氏題辭。實驗例付。
三、鬪運術	同前。		四六判五百頁。クロス上製。箱入。中桐確太郎氏、西田天香氏題辭。
四、整體指壓溫熱水治療法全集	同前。	(民間治療全集第一卷)	四六判四百頁。クロス上製。箱入。圖版多數。附録掛圖付。
五、和漢洋自療藥營養療法全集	同前。	(同第二卷)	四六判五百頁。クロス上製。箱入。
六、經絡經穴刺戟療法全集	同前。	(同第三卷)	四六判六百頁。クロス上製。箱入。
七、治病強健術熱鍼療法全集	同前。	(同第四卷)	四六判五百頁。クロス上製。箱入。
八、光線療法、精神療法全集	同前。	(同第五卷)	四六判五百頁。クロス上製。箱入。
九、觸手中心健康法全集	同前。	(同第六卷)	四六版五百頁。クロス上製。箱入。

他に、「眞の哲學」文獻書院。「眞の哲學序説」「純粹哲學體系」竹中書店。「平田式心理療法」合掌社。「ライツエル療法」生活研究社。「心療醫典」「關連讀本」本村書房。「辯證法教典」「看護の友」大東盟舎がある。計十八冊既刊。

看護の友

平田内蔵吉著

KANGO NO TOMO



昭和八年八月三十日の「都新聞」の紹介に曰く。

「看護の友」といふ書名だけでは稍、漠とした感があるが、表紙を開くと扉には「熱鍼心療看護の友」と註釋が入つてゐる。「看護」といへば現に家族に病人でもない限り、暫く無用の事のやうに思はれるが、著

者は「國民皆兵と同様國民皆醫とならねばならぬ」と主張し、又「病氣を癒す秘訣は未だ病まざるに之を癒し、未だ破れざるに之を治めるにあり」と叫び、更に心身の根本的改造を提唱してゐる立場から、自己及び他人に對する廣義の「看護」を移したものであらう、萬人必讀の書といふべきである。此書の根幹となつてゐるのは著者の發明による「熱鍼器」を用ひての心療法の記述を中心として、進んで中心健康術を説き、又他面には靜養の道に就いて述べ、更に靜養から内觀へと、玩味すれば、たゞに治病の事に止まらず、深遠なる宇宙の生氣の躍動を感じる。

最近我國に於て種々様々なる民間療法が行はれてゐる、これは一つには高價なる醫療費の支辨に堪へない爲の經濟的理由もあらうが、又一つには人間の身體を餘りに部分的に見て、これを統一體として取扱はない近世醫學に對する反抗運動とも見られる、中にはいかゞはしいものもあらうが、この民間療法流行の現象は、治療醫學上から行詰つたと見られる西洋醫學を批判して長らく埋もれてゐた東洋醫學の復興を物語るものであらう。

京都帝大文學部に心理學ををさめ京都府立醫大で研究せる著者が、東洋に於て古來行はれて來た鍼、灸、按等の療法を近代醫學、或は又心理學の上に立つて近代的に再吟味し、これを綜合して一つの器械化し、單純化して案出、發見したのが此「熱鍼器」であり、熱鍼心療法である。その方法は尖端の尖鋭なる熱鍼器を以て、病狀或は虚弱の現れた皮膚の反應部位を斷續的に刺戟し、これに連なる身體の各機關の機能を覺醒せしめ、これによつて健康の恢復或は増進を招來せしめんとするものゝやうだ。

即ち熱刺戟と痛刺戟を同時に然かも左手觸壓法によつて快感を伴ひながら最も適切、效果的に與へるといふものである、又徹底的養生法として呼吸を調へ、姿勢を正し、精力を養ひ、食養に心がけることをあげ説明してゐる。

中心健康術、熱鍼法等にはそれ／＼多數の寫眞或は圖解を行ひ、或は治療要項の索引をも付した分厚いもので、刺戟療法辭書の觀あり、又心身の修養書とも見られやう。なほ著書の箱を利用して熱鍼器の見本を挿入添附してあるのも行届いてゐる。

東京市牛込區若松町七二

大東盟舎

(振替東京一八八二五番)
電話牛込六一八二番)

金・頁百六・組密詰行一十二ホ八・判六四
器療心鍼熱型新・入箱・スーロク・入字文
入個十數百・版凸・眞寫・版色三・附
錢一十二料送・錢十五圓三冊一價定

終

